

第1回 フィリピーナはどこへ行ったのか？ 白野慎也

今、2006年3月13日深夜、僕は1人マニラ空港の到着ロビーにたたずんでいる。

いつもの旅とは違う。読者に安らぎを提供する旅行会話集執筆の取材旅行でも休暇でもない。

予想だにできない新しい人生との出会いを求めての旅だ。初めてのノンフィクションへの挑戦。思わず身震いするような興奮と恐れ、そして自らの原点を訪れる懐かしさの入り混じった不思議な感情に僕は包まれていた。

昨年10月のことだった。

以前は毎日のように通いつめていた地元のフィリピンパブが急に恋しくなり、しばらくぶりに行ってみようと思い立った。僕の地元では、同じオーナーが4軒のフィリピンパブを経営している。どの店も女の子たちは粒ぞろいで、大型店か小型店か、とか料金体系が若干違っている程度の違いである。どの店に入っても外れなく楽しめるのはわかっていた。ほんの数カ月前楽しく遊んだことを思い出して、どの店にしようか、店内の様子や華やいだお店の雰囲気思いをめぐらせながら、懐具合と相談して、一番料金設定の安い小箱の店に行くことに決めた。しかし、そのパブの入った雑居ビルの懐かしい入り口に立つと閉店の看板が……。

入管法の改正で、新しいタレントが入国できなくなり、閉店したり、やむなくフィリピン人以外の外国人を入れてインターナショナルクラブに転身するなど、フィリピンパブ業界は非常にきびしい状況だとは聞いていたが、こんなところにもその影響が出ているのかと実感した。その瞬間、いやな予感が走った。もしかしたら他の店も……。

予感の的中。残る3軒のうちの2軒が閉店。営業した1店もロシアンパブに変身していた。ロシア人に何の偏見もない。ただ、おしゃべりや酒・カラオケのお相手として、僕の心の中でロシア人にはフィリピン人の代わりはできなかった。

夜な夜な他愛もないおしゃべりと、カラオケで遊び明かした日々が遠い昔のように思えてさびしかった。

フィリピンパブがここまできびしい状況に追い込まれているのを初めて実感した出来事だった。

しかし、何より気にかかったのは、僕らに束の間の安らぎと楽しい時間を提供してくれた彼女たち、そう、エンターテイナーたちが、今どこでどうしているのだろうか、ということだった。そして頭の片隅で、僕とフィリピン、いやフィリピーナとの出会い

の原点、リリーというエンターテイナーの面影が、昨日の出来事のようにリアルに脳裏をよぎったのである。

第2回 フィリピーナとイラクの複雑な関係

1980年代以降、多くのフィリピーナが来日し、最盛期には6,000件とも言われるフィリピンパブが、全国津々浦々で、日本人男性に癒しと憩いを与えながら、隆盛を誇ってきた。芸能人(エンターテイナー)たるフィリピーナの入国も2000年には60,000人を突破、2004年には80,000人を突破した。当然、フィリピンパブから始まる多くの恋物語が国際結婚という形で結実していく。1990年代は年間6,000件前後で推移していた日比カップルの婚姻は2000年代に入ると、毎年7,000件台を超え、2004年には8,600件にも達し、トータルの日比婚姻数も10万組にも達した。フィリピンパブもフィリピンパブ恋愛の行く末にも何のかげりもないように思えた。

そこに、思わぬ落とし穴が。長引く多国籍軍によるイラク民主化活動の中、フィリピン軍が多国籍軍から脱落した直後に、アメリカ政府は、フィリピン人エンターテイナーの日本における就労が人身売買にあたるのではないかと、というクレームをつけてきたのだ。

アメリカ政府が「人道的見地」から、日本におけるフィリピン人エンターテイナー就労に対してクレームをつけるのは、唐突に思えた。しかし、それをアメリカからの制裁と考えるとつじつまがあうとも言えた。

つまりこういうことだ。フィリピンは、イラクのフセイン政権制裁に、多国籍軍と一端として加わっていた。アメリカと共同歩調を取っていたわけだが、イラクで出稼ぎをしていた自国の民間人を人質に取られたことから歯車が狂う。人質返還の条件として突きつけられた『軍の撤退』をのんで、フィリピンはイラクから全面撤退したのである。このことに対してアメリカが怒り、制裁を加えたのではないかと……こう考えると確かにつじつまが合うのだ。

裏切り者フィリピンへの制裁手段としてフィリピン人エンターテイナー就労批判をしたという説はそれなりの説得力を持って、今なお多くの人々から信じられているのも事実だが、真相は明らかではない。

かねてからわが国の法務省も、日本国内でダンサーやシンガーとして興行ビザを与えられて就労するタレント(エンターテイナー)が、その資格に見合った技能を持たず、恒常的に資格外労働であ

るホステスとして接客に従事していること、またペナルティやノルマ、給料の搾取など過酷な条件での労働を強いられていることなどの実態をおおむね把握してきたはずだ。しかし、こうした状況改善のための徹底した違反の摘発や省令改訂などの根本的な措置はほとんど講じてこなかった。事態をほぼ黙認してきたのである。

だが、最大の盟友アメリカからの指摘を受けて、自発的外交方針のない日本が行動を起こさないわけにはいかない。法務省はただちに本格的行動に出た。省令を改訂。最大のポイントは、ダンサーや歌手としての本来の技能を持たない『名ばかりの芸能人』に対する興行ビザのきびしい発給制限だった。その結果、2004年度、83,000人に達していたエンターテイナーの受け入れは、2005年度には47,000人、なんと前年度56%に、2005年8月以降ではなんと、対前年比20%にまで締め付けられた。タレントを確保できなくなったフィリピンパブは、閉店に追い込まれたり、日本人やロシア人・ルーマニア人・中国人・インドネシア人などを織り交ぜて、やむなくインターナショナルクラブとなるか、日本人配偶者のいるフィリピン人女性などをアルバイトとして雇用し、スナックに鞍替えして生き残りを図っている現状だ。最盛期には6,000軒あったフィリピンパブは、2006年3月現在、3,000軒程度にまで激減したというのが、事情通の大方の見方であり、業界関係者は、フィリピンパブ壊滅の危機というまさに業界の存亡の危機を極めて現実的なものとして日々感じながら、文字通り生き残りをかけて必死の戦いを続けている。

2泊3日のマニラ参りも...置き去りにされたファンのその後

フィリピーナの魅力に取り憑かれてしまったフィリピンパブファンには、古きよき時代を偲び、平成鎖国とも言われるフィリピン人エンターテイナー締め出し撤廃を願って悶々としながらも何の行動も起こせない人々がいる一方で、忙しい仕事の合間を縫って、愛するフィリピーナを追って2泊3日の強硬日程でマニラ参りをする、いわゆる『追っかけ隊』も急増しており、フィリピンパブに端を発する恋物語の行く末は限りなく不透明できびしい。

具体的な行動が起こせず、日本国内で悶々とした日々を送っている『悶々派』にしろ、強行日程を押してまでフィリピーナを追いつける『積極行動派』、いずれのタイプのフィリピーナファンもそれぞれに行動を起こしているのである。フィリピーナがいなくなっても、彼らのフィリピーナへの思いは消えてはいない。むしろ合えない時間が思いをより募らせているようにも思える。

そんなフィリピーナのとりこになった日本人男性の断ち切れぬ思いを見透かしているかのように、新しいビジネスやメディア媒体登場の動きがでてきている。ひとつがフィリピン在住で来日できないエンターテイナーとフィリピーナと触れ合いたくて仕方のない日本人男性がインターネットでライブ・チャットできる有料サービスである。生身のフィリピーナとパブで日常的に接する機会があればこんなビジネスは生まれてくることはないはずだが、多くの業者がこの新事業に参入し、ライブ・チャットをまとめるライブ・チャット情報サイトすら登場してくるほどの急成長振りだ。もうひとつは、フィリピーナ好きの日本人男性に明確にターゲットを絞った本格的月刊誌の刊行である。こちらも潜在的読者のニーズに1日も早くこたえられるよう、急ピッチで作業を進めているらしい。

そんな中、僕は入国できなくなったエンターテイナーのその後の人生と、彼女たちに取り憑かれた日本人男性、そして両者の中で繰り広げられる様々な人間模様をつぶさにレポートしてみたいと思い、いてもたってもいられずにマニラを訪れたのだった。

ネオンの海から来たマーメイド

私にとって人生の転機というやつはいつも偶然に訪れるものだった。私がフィリピン語・フィリピン現代文化の研究家＝フィリピン・カルチャー・ウォッチャーとして多少名前を知られるようになったのも、フィリピン・パブ・パラノイアというフィリピンパブファンにはお馴染みのサイトで、『旅の指さし会話帳フィリピン編』の著者募集の書き込みを見つけて、すぐ応募し、採用されたのが直接のきっかけだ。

それにしてもやはり、今自分が、日本人とフィリピン人の不思議な恋物語の顛末を追いかけてマニラにすることがとても不思議だ。

それまでフィリピンなんて地図の上でしか知らず、やはり近くて遠い、しかも自分にはまったく無縁の国だった。日本のメディアから提供されるフィリピンの情報といえば、麻薬の製造・販売、売春、日本人がらみの保険金殺人などの犯罪、度重なるクーデタなどの政情不安、台風や火山の噴火・土砂崩れなどによる自然災害、船舶の転覆事故などの人災、およそ平和な南の島のイメージからは程遠い『ショッキングな事件情報』ばかりだ。

ごく最近のマスメディアのフィリピン関連報道もしかりである。主犯の妻がフィリピン人だった。『仙台の赤ん坊誘拐事件』、『レイテ島地すべり災害』、エドサ革命20周年にタイミングを合わせた

かのようなクーデタ未遂事件など、マスメディアの情報だけに接している限り、フィリピンは平和な日常なんてまったく無縁な東南アジアでもっとも危険な国にしか見えてこない。

そんな片寄ったマスメディアのフィリピン報道にしか接していない、以前の僕にとっては、フィリピンはできれば行きたくない恐怖の島国であったと言っても過言ではなかった。

そんな僕が、なぜこんなにもフィリピンという国とフィリピナの魅力にはまり込んでしまったのか？ それは、僕自身の一人のエンターテイナーとの出会いを抜きには考えられない。

1989年8月最後の土曜日の夜。東京新宿コマ劇場脇の広場は、夏休み最後の冒険を求める若者でごった返していた。大手食料品メーカーに就職して3年目、社会人としての生活のリズムもつかめてきた僕はそんな喧騒を楽しみながら土曜日の日課、そうディスコに向かう途中だった。しかし、若者たちの、一晩だけの恋の駆け引きの成り行きに見入っているうちいつもと違う路地を通る羽目になったのが運のつき。

新宿では老舗のピンクサロンの入り口に、黒目がちでエキゾチックな東南アジア系の美女が微笑みかける特大の写真が突然瞳に飛び込んで来た。魅入られたようにポカンと口をあけて立ち止まっていると、店のボーイが「どうぞこの娘、いいでしょう。すぐお相手できますよ」と言うが早いか、やんわりと背中を押されるままに、初体験のピンクサロンに足を踏み入れることに。「ご指名はあの写真のリリーさんでよろしいですね」というボーイの声に上ずった声で「はい」と応えるのがやっとだった。

ボックスシートに通されて場内の暗さに目が慣れてくると、あちこちのシートで「営み」が繰り広げられているのがぼんやりと見えてくる。と突然、「リリーデス。ヨロシクオネガイシマス」という舌足らずな日本語が。振り返ると、さっきの写真の彼女が・

「ココ、スワッテイデスカ」と言うので、「OK」と応えると彼女は腰掛けた。狭いボックスシートに腰掛けると彼女はいきなり僕のズボンに手をかけ、脱がせようとする。

僕は「ノー」と彼女のサービスを断った。彼女が怪訝な顔をしているので僕は怪しげな英語で「ノー サービス、ジャスト トーク」と言うと、彼女は「OK」とにっこり微笑んだ。それから30分ほど、怪しげな英語交じりの日本語で、今で言うならファースト・タイマー(初来日)のフィリピン人と英語交じりの不自由な会話を初めて楽しんだ。

「何歳ですか」では通じなくても「ハウ オウルド アー ユウ？」と言うと通じる不便さとか、ゆったりした会話のテンポがなぜかとっても楽しかった。

「お客様、もうお時間です」のボーイの一声で不思議なときめきの瞬間はタイム・オーバー、になるはずだった。が、しかし、お店の出入り口まで見送りに来た彼女が、帰り際に「ワタシ アナタスキ デートスル アトデ 12 ジ オミセオワル アナタ コデマツスル OK？」

と誘ってくれたのだ。僕はうれしさを顔面一杯に表現しながら、大きく首を振りながら

「オーケー シー ユー レイター」

と何度も繰り返すと、彼女も

「シー ユー レイター」

とにっこり応えて足早に薄暗い店の中に戻っていった。ネオンの海からきたマーメイド。リリーとの出会いが今日にまでいたる僕とフィリピンの物語の始まりだとはこの時はこれっぽっちも思わなかった。

午前12時少し前、僕は本当に来るのかなあ、と半分以上の疑念を抱きながら彼女を待った。15分が過ぎ、駄目か

リリーとの熱い2カ月

午前12時少し前、僕は本当に来るのかなあ、と半分以上の疑念を抱きながら彼女を待った。15分が過ぎ、駄目か、と思った矢先「コンニチワ アリガト」とTシャツにジーンズ姿の彼女が元気よく目の前に飛び出てきた。シュンとしかけていた心がにわかに活気づく。結局、その晩はディスコ、ボーリング、ショット・バー、レストランとはしごして、最後は大久保のホテル外の一隅にある雑居アパートに彼女を送り届けてバイバイ。ドア口で別れ際、彼女は目にも止まらぬ早業で僕の唇にキスしたかと思うと、

「ネキスト タイム イツスル？」

と尋ねられ、とっさに

「トモロー オミセオワリ 12 ジ OK？」

と応えた。彼女はまたにっこり微笑んで「OK」と応えたかと思うとまたしても目にもとまらぬ早業で僕の唇にキスし、ボタンとあつという間にアパートの自室に消えていった。

彼女が振り向きざまに行った言葉

「アナタ ワタシノ オニイサン ミタイ」

その一言が、兄弟のいない私にとっては、くすぐったく、またとてもうれしかった。

28歳にして、南の島から来た褐色の肌の妹ができたのがとてもうれしかったのだ。

それから約2ヶ月、リリーを中心にした、僕にとっては不思議な、しかしときめきに満ちた生活が続いた。

午前0時15分、彼女の店の裏口で待ち合わせ、あとはお決まりのコースで遊び、午前7時にアパートへ。そしてそれから自宅に帰って朝食、一睡もせずに会社に行って、目を開けて眠り、時間をやり過ごし、午後5時45分の会社の終業時間で飛び出すように帰宅の途へ。

午後7時前後に夕食を済ますと午後11時まで仮眠、午後11時タイマーの音で勢いよく飛び起きてシャワーを浴びて、おしゃれな服に着替えて11:45に自宅を出発。午前零時15分に彼女の店の裏口での待ち合わせから始まるデートへとなだれ込んでいった。

もともと眠りが浅く、一日8時間は眠らないと調子が悪い自分には結構このくらしのリズムはつらかった。しかし、20代の若さと回復力、彼女への愛情、理屈抜きの楽しさが、こんな無茶苦茶な暮らしを支えてくれた。

そんな「交際」が始まって1ヵ月半、真夜中のデートを終えて彼女をアパートまで送り届ける途中、強い通り雨にあった。僕は彼女が濡れないように、自分のジャケットを脱いで彼女の小さな体をくるむように包んで足速にアパートに送り届けた。

日曜の朝で、僕はビショビショの雨をぬぐうこともなく、着替えもせずにベッドに崩れこんでしまった。

翌日からその報いが容赦なく僕を襲った。

扁桃腺炎になって、のどは腫れ上がり、水を飲むことすらままならない。1週間も40度以上の高熱にうなされ、病床に屈した。バファリンを砕いて何とか飲み込んではそのどの腫れを引かせ、一時的に熱を下げ、流動食を取って最低限の体力維持。

リリーはその間も1日に20回以上は電話をかけてきた。声も出ない、出たとしても状況を説明できない。

結局、僕が病床にあるまま、彼女は6ヶ月間の「芸能人」としての勤めを終えて帰国。帰りの日、成田に行くという約束を果たせなかったのが心残りだった。リリーは、僕が約束を守らなかった、「何てうそつきなやつ」と思っていたに違いない。そう思うと悔しくてしかたなかった。

リリーの帰国後、すぐに彼女にもらったマニラ市内の電話番号をダイヤルしてみた。

いろんな女性が電話口に出たが、何を言っているかわからない。

「リリー プリーズ」、「リリー プリーズ」と連呼してみたが、結局本人にはたどり着けず、電話を切られてしまう。そんな繰り返しだった。

リリーから電話も手紙も来なかった。こうして、激しく熱く燃

えた期間限定の恋は2ヶ月で終わったかに思えた。

フィリピン語の猛勉強と高い授業料

リリーは去った。しかし、彼女の面影は、残された何枚かの写真とともにいつも僕のそばにいた。

瞳を閉じれば、彼女の黒く大きな瞳、シャンプーしたての髪の毛の香り、そっと肩を抱くと、指先まで滑り落ちてしまうほどなめらかな、シルクのようななめらかな肌の感触……鮮やかに彼女のすべてが細かい部分まで克明に蘇ってくる。

そして、フィリピンという国とフィリピーナへの興味は俄然深まっていったのだ。

僕は、1989年11月、フィリピーナともっと言葉でわかり合うために、タガログ語と英語を同時に勉強し始めた。リリーの小さな写真を額に入れて、机の上におき、もし再会できた時、フィリピン語で愛を語り合うことを夢見てがんばった。

それとリリーがくれた彼女のお気に入りばかりを集めた一本の音楽カセットテープ。これも僕を強く、タガログ語と英語の世界へと駆り立てた。彼女のお気に入り曲のメッセージが分かればいいなあと思った。

今思えば、このテープがフィリピンポップス(OPM=オリジナル・フィリピノ・ミュージック)との出会いだった。まったく意味は分からないが、センチメンタルなメロディと繊細で甘い歌声が、リリーとの思い出のシーンを心のスクリーンの中に再生し、巻き戻された時の中で僕はリリーとたびたび語り合っていた。そして我に返ってはため息をつく。そんな繰り返しだった。

独学と並行してフィリピン・パブにもはまり込んだ。学習の成果を実地で試す身近な実地訓練場だからだ。褐色の肌に吸い込まれそうな大きな瞳、脚線美、ヒップアップした美しいバックライン、ひとたびテーブルに着けば楽しい雰囲気作りの天才で、大したことを話しているわけでもないのに自分が世界で一番幸せな男というような気分させてくれる天性のホスピタリティ。

僕はそんなフィリピーナの魅力にどっぷりはまり込んでいった。

時代はバブルがはっきりとはじけ始めた1990～91年。給料はほとんどすべて、フィリピンパブに消えた。猛烈に遊びまくる心の片隅ではいつもリリーとの再開を求めているのかもしれない。

その間本気で結婚を意識して付き合った女性もいた。

疑う心を持たない一直線な若気の至りで、結婚前から『彼女の家族は自分の家族』という思いで先走り、彼女のフィリピンの実家改築費・新品のジープ・トライシケル・ガレージの工事費・彼女

の家族の病院代など、惜しみなく先行投資をした。

その結果、今度は彼女の方から、何の遠慮もなく経済的支援を次々と求められるようになり、彼女の家族を助けるために借金。結局、あまりの経済支援の負担の重さにギブアップしたこともある。

そんな、今思い出しても気持ちがブルーになる『貢くん』体験もした。ご多分に漏れず「自分もフィリピンパブの実地学習で本当に高い授業料を支払ったものだ」と振り返ると、自戒の念と恥ずかしさで一杯だ。

しかし、僕はめげずにフィリピンとフィリピーナを愛し続けた。いつか本物の愛に出逢うことができると信じていたからだ。そしてひょんなことから……

今、リリーと出逢えたら…

そしてひょんなことから私は、会社員を続けながらフィリピンで生活するという機会に恵まれた。

在職中の大手食品メーカーが、企業イメージをアップさせる戦略の一つとして、「ボランティア休職制度」を突然導入したのである。会社から給料の 60 %をもらってボランティア活動ができるというなんとおいしい制度。これを利用すれば、フィリピン人の社会や生活を肌で学び、自分のフィリピン語力を徹底的に磨くことができる！

出世競争などハナから眼中にない私は、すぐに目の前のニンジンにかぶりついた。1993 ～ 94 年のほぼ 1 年間、自分で探したボランティア団体のマニラ事務所に赴任することになったのだ。

赴任当初、フィリピン語には予想以上に苦勞した。フィリピンパブでの「実戦」で、多少は自信を持っていたのだが、本物の発音は聞き取れないほど早かった。膨大な意味不明な音の波を、毎日シャワーのように浴びる。そして、ようやく聞き取った言葉も、参考書には決して書かれていない表現だったりした。

家に帰ると辞書を首っ引きでフィリピンの教科書や小説を読破。といっても、小学校の教科書や、簡単な恋愛小説だったが、おぼえた表現はすぐ翌日には使うことができる。身に付くスピードは日本にいたときとは比較にならなかった。

読めない新聞も無理矢理に読み、何を言っているのかさっぱりわからないテレビ・ラジオの聞き取りにも果敢に（無謀に？）挑戦した。フィリピンの音楽(OPM)と映画にもハマった……。

努力はうそをつかなかった。一年もするとタガログ語で考え、独り言を言い、夢を見ている自分に気づいたのである。

『今リリーと出逢えたら』と、ふと思った。今ならもっとわかり合える。僕は決して彼女を忘れない。もっとも、彼女の方は、すっかりおじさんになってしまった僕に気がつかないかもしれないが。

僕の願いはひとつ、彼女の平和なフィリピンでの日常生活を垣間見たい。

誠実そうなフィリピン人の旦那さんとかわいい子供たちといっしょにショッピングモールを楽しそうに闊歩する姿、子供たちと公園で無邪気に戯れる姿。台所でエプロンに身を包んでフィリピン料理を鼻歌混じりに作っている姿、そんな平凡な主婦としての彼女の日常を一瞬でも見てみたい。ただ、それだけだ。

そして僕はこういうだろう。

「クムスタカ(元気かい?)。君は変わってないね。きれいだ。僕は年をとってしまったよ。あれから何度も電話をかけたんだけど、言葉ができなかったからつながらなくてごめんね。これからも幸せにね。素敵な思い出をありがとう。君を決して忘れないよ。さようなら」

「タクシー　サー」

物思いにふけていた僕は空港内のクーポン・タクシーのカウンタースタッフの呼びかけで、我に返った。

消えたエンターテイナーの今を追いかけての旅。移り気なフィリピンパブファンの中には「フィリピンパブは終わった」と公言してはばからない人もいる。確かに、遊びだけの人ならそれでいい。しかし、フィリピンパブは、その極楽的魅力を謳歌した日本人男性にとって、思い出というには新しすぎる。

それ以上に…

日本に来られない彼女たちはどうしているのか？

旅の始まりは、期待が大きければ大きいほど不安にもなるものらしい。

夜のニノイアキノ空港、乗りなれたクーポン・タクシーのチケットを買って待っているわずかな時間にも、思いは空港をとっくに離れてフィリピン全土の元エンターテイナーたちや、彼女たちのとりこになった男たちのもとへと飛んでいく。

取材をしながら、フィリピンを旅する中で、どんな出逢いがあるだろうか。

* *

減少の一途をたどるフィリピンパブだが、その極楽的魅力を謳歌した日本人男性にとっては、思い出というにはまだまだ新しす

ぎる。

だが、それ以上に過去の遺物の一言で片付けられないのは、フィリピンパブで生活の糧を得ていたエンターテイナーだ。仕事の場を失った彼女たちは、生活をかけた戦いを新たな場所で続けている。

日本では、ペナルティや様々な屈辱的な就労規則で縛られていたとは言え、本国フィリピンでは考えられないような高給を得てきた彼女たち。ふたたびフィリピンの賃金水準で、まっとうな仕事をするのには相当な気持ちの切り替えが必要だ。

エンターテイナーたちの中には、大学中退くらいの学歴を持つ人もいるが、日本以上に学歴重視のフィリピンでは、まっとうな仕事に就くのは至難の業だ。

日本のような賃金は期待できない、就職のチャンスも少ない…だから彼女たちの、フィリピンパブに始まる物語は終わっていない。生活を守るためには、終わらせるわけに行かないのだ。

いつともわからぬ日本行きを待ちながら、マニラや大都市の日本人向けのカラオケ店で頑張って働く女性、日本行きを待つうちに売春婦に身を落としてしまった女性、デパートガールや会社勤めなどをしながら日本行きを心待ちにする女性、エンターテイナーの道を断念して、看護師・介護士などの技能を身につけて出稼ぎの道を探す女性、いまだ見ぬ日本行きの夢に思いを馳せるエンターテイナー予備軍、ジャパン・ドリームをあきらめてフィリピン人の恋人と結婚した女性、フィリピンにいながら言葉巧みに昔のお客をスポンサーとしてお金を引き出しているしたたかな女性、フィリピンにいながら日本人男性の相手をするインターネットのライブチャット・コンパニオンとして働く女性など、身の振り方は様々であろう。

また、フィリピーナの魔力に取りつかれた日本人男性に目を向けても、日本にいて新しい恋人を求めてさ迷い歩く人、日比両国に別れて暮らしながらも、時々渡比したり、電話やテキスト、チャットなどでコミュニケーションを保ち、着々とフィリピンパブで出会った女性と愛を育んでいる人、愛し合っていたつもりが、結局お客さん・スポンサーの1人として利用されただけだったり、コミュニケーションが途絶えがちになることによって結局破局してしまった人、フィリピンに何度か渡航するうちに、愛を求めていた人からただの夜遊び人になってしまった人……様々な人生模様があることだろう。

今回の旅の目的は、第一に、消えたエンターテイナーのその後を追うことだ。これから出逢うであろういろいろな生き様は、日本ではエンターテイナーだった、あるいはそれを目指したフィリ

ピーナたちのそれぞれの今であり、未来でもある。

そしてまた、エンターテイナーとの愛に夢を馳せた日本人男性たちのその後も見てみたい。自分自身にも一瞬先は見当もつかない彼らの今を伝えることができたなら、と思う。

さらに、旅の道すがら、僕の人生を 180 度変えてしまったリリーとの再会があったらなどと、かなわぬ夢を見る自分もいる。そんな意味で今回の旅は、リリーとの奇跡の再開を求めている旅でもある。

* *

「タクシー・サー」

思案に暮れがちな僕のところへタクシーが来た。今回の活動拠点である、かつて自分が暮らしていたアパートへの道順をドライバーに告げると、タクシーは夜の帳に包まれたマニラの町に静かに吸い込まれていく。

旅はまだ始まったばかりである。

高級カラオケクラブの裏側

今回から、著者のフィリピンでの取材報告が始まります。

最初に登場していただくのは、ジャパニーズ・カラオケ勤務の Rona（ローナ/23 歳）です。

★シンデレラの今

「今はどうしようもなくて……暮らしは本当にひどくてどん底なんだけど、待つことしかできないのよね。私には」

23 歳、来日経験 4 回、最後の来日からもう一年近くも次の機会を待つローナは、開口一番ため息混じりに話した。

身長 150 cm、体重 39 kg と小柄で華奢な彼女は、最後の来日で出会った日本人男性との間にもうけた一児の母でもある。

僕はマニラにつくとすぐに、来日の道を閉ざされたままのフィリピーナたちを、知人の紹介・情報提供など、できる限りのツテをたどって探し始めた。もちろん自分自身でも独自に探索した。日本人向けの店の多いマカティ市全域はもちろん、マニラ市のエルミタ・マラテ地区、パサイ市全域、パラニャーケ市のバクララン地区なども歩いた。

そんな時、マカティの日本人向け高級カラオケクラブで知り合ったのがローナだった。特別きれいとか、かわいいというわけではない。素朴な田舎の娘という雰囲気漂わせている。笑うと瞳の奥に悲しみがにじんで、何か気になる娘だった。彼女もまた、2005 年 3 月 15 日の法改正の犠牲者だ。

日本に行きたくても、行かれないエンターテイナーの苦しい現

状、日々の生活をかけての必死の戦い。誰だって喜んで話したくなるような楽しい話ではない。だが僕はあえてそれを聞くためにフィリピンにやってきた。カラオケで出会った元エンターテイナーたちの口は一樣に重かった。ただ、ローナは初対面にもかかわらず、取材の趣旨を説明してインタビューを申し入れたところ、すんなり承諾してくれたのだった。

そして今、彼女の休日の日曜日、僕はマニラ首都圏の北の端にあるバレンズエラ市の彼女の家を訪問し、今の暮らしぶりについて尋ねている。

「どれくらい苦しいの？」

ローナにはつらい質問だが、僕はまず彼女の苦しさの実態ははっきりさせておきたかった。

「日給は 150 ペソ。レディス・ドリンクや指名が取れば、バックや給料のアップもあるけど、若くてかわいい女の子たちが次々に入ってくるから、指名やドリンクを取るのは至難のワザ。月収は少ない時だと 4,000 ペソ。多い時でも 6,000 ペソくらいにしかないの。給料のほとんどは、子供のミルク代、お姉さんに払ってる子供の世話代、毎月の両親への仕送りで、消えちゃって自分のために使えるお金は 1 ヶ月 1000 ペソ以下よ」

僕は愕然とした。マニラ首都圏の法律で定められた最低賃金は 1 日 275 ペソだ。だからローナは最低以下の条件で働いてることになる。日本人の酔っ払い相手の何かとストレスの多い仕事で日給 150 ペソとは！ もう少しきちんとした仕事、たとえば有名レストランのウェイトレスだって、日給 180 ペソ前後は取っている。日本料理店ではウェイトレスの日給が一律 340 ペソという店もある。彼女の薄給がまず気の毒だった。

1 ヶ月 1000 ペソ以下で生活しているというのも驚きだった。1 日平均 33 ペソで食費、化粧品代、衣装代、交通費などすべてをまかなっていることになる。1 日 3 食して、適当にレジャーを楽しんで……そんなまともな暮らしは絶対に無理だ。

「朝は食欲がないから食べない日がほとんどね。昼の 12 時頃に寮の友だちといつも同じ食堂に行って、魚か野菜料理のおかずをどちらか 1 品とご飯を注文するのが日課になってるわ。何しろ予算が 1 日 30 ペソだから、これが 1 日分の食事になることが多いわね。肉料理は高いから手が出ないわよ。もし仕事の時に、指名してくれたお客さんが食事をオーダーしてくれたらさらにもう 1 食ありつけて本当にラッキーっていう感じ。1 日 2 食できる日なんてめったにないから」

外出する交通費もない生活

やっぱりそんな感じか、と思いながら、僕は淡々と話す彼女の話を聞いていた。米 1 キロが 20 ～ 30 ペソ、サンミゲル 1 本が 28 ペソ。定食屋の割安セットメニューでも 30 ペソ以下の店は少ない。30 ペソでは健康な人なら一食でも腹一杯食べることは無理だ。それに 23 歳の女性と言え、おしゃれやレジャーなど、自分のためにもお金をかけたいに違いない。

しかしローナは、半年以上新しい服は買ってないし、化粧も最低限。交通費がかかるからと言って外出もしない。日曜日に子供と過ごすことだけが生きがいだと言う。家族を養うためだけにすべての時間とお金を費やす。それでも子供の病気など緊急時には田舎から仕送りしてもらおうこともある。

「家族のために仕事してるのに、逆に仕送りしてもらうなんて本当に情けないわ」

僕は、家族のための 100 % の自己犠牲を当たり前のように受け止め、ひたすら自分を捨てて生きる彼女のけなげな姿に感動し、心ならずも家族を助けられない状況に追い込まれてしまった今の自分を責めている彼女が不憫でならなかった。彼女にはタイマー(日本行きのベテラン)特有のスレやある種の倦怠感がない。お客を巧みにスポンサーに仕立てる技もない。真っ正直で不器用な万年新人タレントのように見えた。

ワンセット 90 分、1,300 ペソ。VIP ルームがいくつもある豪華なカラオケ店でお姫様のようなドレスに身を包み、洗練された身のこなしで日本人客にいやしと憩いを提供し続ける来日待ちのシンデレラの実生活は、予想をはるかに超えて極めて過酷なものだった。

★運命のオーディション

ローナは 1982 年の 8 月、フィリピン中南部の中部ビサヤ地方のボホール島で生まれた。5 人兄弟の 3 番目で、15 歳の時お姉さんが仕事でダバオに行くのに同行した。父親には定職がなく、お姉さんだけが家計の担い手だった。家は 1 日 1 食しかできない極貧の生活で、ベニヤで作った四角い箱にトタン屋根を乗せただけの家を借りて住んでいた。

彼女の日本行きの動機も、こうした貧困からの脱出、親兄弟の経済的支援である。しかし、日本に行きたくとも身のまわりに日本に行ったことのある人はいない。どうしようかと思っていた矢先、地元ダバオで日本のプロモーションがオーディションをやるといううわさを聞きつけて、迷わず応募した。まさに『渡りに船』だった。

オーディション会場に着いた彼女はすごく萎縮したと言う。200

人もの応募者が殺到。かわいくてスタイルのいいコがたくさんいる…

日本で手にした幸せとは？

★運命のオーディション

オーディション会場に着いた彼女はすごく萎縮したと言う。200人もの応募者が殺到。かわいくてスタイルのいいコがたくさんいる。みんなおしゃれた。『私なんか絶対ダメだ』と思った。しかし、ダンスとインタビューのオーディションの後、合格してしまったのだ。わずか5人の合格者の中に自分が入るなんて夢のような話。ローナが18歳の時だった。

「すごい倍率の中を勝ち抜いたんだね。君はスーパースターだ」
僕の見え見えのボラボラ(ゴマすり)に彼女は顔をクシャクシャにして喜んでくれた。

「応募のことは、両親、特にお父さんには絶対内緒だったの。ジャパユキはみんな売春婦だと思い込んで、何を言っても納得してくれないのはわかってたから。だから、内緒でマニラに上京。内緒で来日。私が日本帰りだってわかったのは、最初の来日からたくさんのおみやげを持って帰宅した時なの」

日本にエンターテイナーとして働きに出る女性を、フィリピン人の多くはいまだにジャパユキと呼び、全員が日本では売春していると思い込んでいる。この偏見は保守的な地方部で非常に根強く、エンターテイナーの多くが、両親、特に父親の説得に苦労している。

ローナは、無駄とわかっている父親の説得を省いたというわけだ。

「それで、帰国した時の家族の様子はどうだった？」僕は内緒の日本行きの顛末を聞いた。

「みんなびっくり。私、少し肌が白くなって、髪の毛も茶髪にしたから、外見の変化にもびっくりしたみたい。でもそれ以上に兄弟とお母さんはおみやげに大喜び。お父さんは始め不機嫌だったけど、怒り出しそうになった時にずっと日本製の腕時計を手渡したらニヤツとして、怒るタイミングを失くしちゃったの。私が持ち帰ったお金でみんなが毎日1日3回のご飯とおやつまで食べられるようになって、仕事の意義を理解してくれたみたい」

ローナは晴れて里帰りした時の家族の喜びについてイキイキと話してくれた。

「田舎に自分の家も買えて、兄弟を学校に通わせることもできて、帰国する度に家族の暮らしが豊かになっていくのが、とても楽しかった。私がちょっと頑張るだけで大きな幸せを家族にプレ

ゼントできるんだから。体がぼろぼろになるまで続けたいと思ったわ。毎日食べものの心配をする暮らしから、安定した将来の生活を設計できる暮らしに変わっていったの。実際、お父さんやお母さん、兄弟たちとサリサリストア(雑貨店)経営や米作りとその卸売り・養豚・魚の養殖とか、いろいろなビジネスプランの話し合いも始めてたの」

5 / 200 の幸運を勝ち取ったシンデレラ物語の成功の章は、聞いている僕の心も明るくしてくれた。

★フィリピンのボーイフレンド

彼女は、愛知県内に3回、四国の漁村に1回、あわせて4回、2年に及ぶ来日経験を持つ。当然、日本人男性とのロマンスがあるはずだ。それを聞いてみた。しかし、意外にも浮き彫りになったのはフィリピン人の恋人の存在だった。

「ええ、日本に行く度に何人かの男性にまじめに言い寄られて、つきあってたけど、さびしさをまぎらわせていただけだった。だから3度目の来日までは決して最後の一線は越えなかった。今でも連絡を取り合っている人はもういないけど……」

ジプニーで始まった、美しき思い出

★一線を超えない理由

「……3度目の来日までは決して最後の一線は越えなかった。今でも連絡を取り合っている人はもういないけど……」

彼女は言いよどんだが、理由は明白だ。ただ、彼女は身持ちの固い女性だとわかった。

「君は、結婚するまで純潔を守るという考えの持ち主だったの?」

「ええ。両親からずっとそうするように言われてた。実はね。私が高校生時代にダバオに住んでた時にボーイフレンドがいて、いつか結婚しようって約束してたの。それで未来の旦那さんのために私ができるたった一つのギフトを大切に取っておいたの」

「美しい話だ」と思った。一瞬恥ずかしそうにうつむいてから彼女はまた語り始めた。

「彼はね、私が高校に通う時にいつも乗っていた路線ジープの運転手で名前はエフレン。

その時もお金がなくて。ジープを止めたいのに止められずにモジモジしてたら、止まってくれた。私が15で彼は18。『乗れよ。かわいい子は特別料金さ』って言って乗せてくれたの。払える分だけでも払おうとしたら『その金でメシ食べよ。最近痩せたぜ』って私の健康まで心配してくれていたの。すぐ彼のことが好きになったわ。一目惚れね」

甘い思い出を語る彼女の瞳は明らかに遠く 9 年前を見つめていた。

そして知り合って 1 年、『付き合ってくれ』の言葉の一つもないながら、二人の愛はどんどん深まり、ローナ 16 歳の誕生日に、まだ恋人でもない彼から出し抜けにプロポーズを受け、あっさり承諾。二人はめでたく将来を誓う合う間柄になったのだった。

「恋人でもないのにいきなりプロポーズ。そして君もすぐ OK なんてすごい早ワザだね」

僕はちょっと冷やかした。フィリピンの伝統では、女性は好みの男性から求愛されても、もったいぶってすぐ OK の意思表示をせず、わざと気のないフリをすることになっている。男性は、愛する女性の気を引くためにいそいそと女性の家を訪ねて、家事の手伝いをしたり、夕暮れ時に窓辺でセレナーデを弾き語りで歌ったり涙ぐましい努力をして、ようやく愛する女性のハートをゲットするわけだ。二人は、フィリピンの伝統からかなりはずれていたことになる。

彼女は僕の冷やかしに伝統的なフィリピン女性らしい恥じらいを見せながら続けた。

「彼は私が OK したことで急に長い間押さえ込んでいた情熱に火がついちゃったみたいで、一気にキス。それから私の背中を抱いた手をスカートの中に入れてきたの。さすがにその時は結婚するまでダメって、パシッと彼の腕をたたいたの。彼が『ごめん。そんなつもりじゃなかったんだ』なんて急にシュンとしちゃったんで、私が『結婚するまで我慢してね』ってやさしく言ったら、彼は『わかった。約束する。そうだ。そう言えば誕生日おめでとう』だって。順番がおかしいねって二人でゲラゲラ笑っちゃった」

「そうか、彼がいたから他の男性には指一本触れさせなかったんだね」

「指一本ていうわけじゃないけど、まあそんな感じね」

彼女の言葉の意味はよくわかった。

★日本行きで引き裂かれるフィリピン人同士の恋

フィリピン人の恋人がいるフィリピーナの場合、日本に出稼ぎに行くとなると、必ずと言っていいほど、彼氏との気まずい別れがつき物だ。気持ちよく『気をつけて頑張ってね』と送り出してくれるカレはまずいない。日本行きが原因で口論となって別れてしまう場合も多いし、永遠の愛を誓い合ったとしても二人が離れ離れになっている間にどちらかに新しい恋人ができて最後は別れてしまう、というカップルも多い。また、フィリピン人男性が一途な性格だと、別れと言う現実を受け止められずに自殺してしま

う悲劇的なケースも珍しくない。こうした自殺のニュースを僕は何度も現地のタブロイド誌で見かけた。

ローナとエフレンの場合もそうだった。彼女が来日前にダバオからマニラに上京する時も彼女の日本行きをめぐって大喧嘩になった。彼は決して賛成しなかったが、自分の経済力では、彼女の家族まで養っていくことはできないと最後はしぶしぶ納得したのだった。

「でもね。彼は『しばらく離れ離れになるんだから最後の思い出をくれ』って言うの。『どうすればいいの』って聞いたら、『君がマニラに旅立つ前にドライブしよう』って。何が起こるのかうすうす気がついてたし、心の準備はできてたわ」

彼と付き合って3年。ローナはもうそうなってもいいかなあ、と思っていた。親の言いつけに従うよりも愛する人の望みをかなえてあげたかった。ダバオの美しい夜景が見える丘の上にジープを止めて、後部座席に大きなござを敷いて、体験したことのない痛み、ひっきりなしに襲いかかってくる蚊の攻撃に耐えながら、その夜二人は初めて結ばれた。

では将来を誓い合ったフィリピン人の恋人のために、日本の恋人たちと絶対に一線を越えなかった彼女が、4回目の来日でなぜ日本人の恋人に身を委ねたか？ 新たな謎が芽生えた。

4 回目の来日で越えた一線

★つらい遠距離恋愛

4度目の来日で、ローナは瀬戸内海沿いの四国の漁村で働くことになった。日本にも田舎があることはよくわかっていた彼女だが、初めて店に向かう道すがら、ほとんど人通りがなく、あまりに閑散とした街並みを見て、お客さんが来ないのではないかと不安になった。

しかし、お店は連日大盛況。しかもローナ曰くそんなド田舎で、彼女は思いもかけず日本人男性と結婚してしまうのだ。

「愛情のない結婚だったと思うわ」

ローナは日本人との結婚を軽くこの一言で総括した。

店の客は漁業関係者がほとんどだった。後にローナの夫となるAさんもやはり漁業に従事し、同じ船で漁をする上司と店にやって来た。忘れもしない2003年11月。ローナはAさんの第一印象について話してくれた。

「最悪ね。25歳と若いくせに態度が大きくて、命令口調で女の子を奴隷のようにこき使うの。筋肉質の大きな体で、むっつりしてて、黙り込むと怖かったわ。タガログ語も少しできるんだけど、下品な言葉ばかり。フィリピンパブで遊び慣れている感じでいや

だったわ」

「じゃ、何で最後は深い仲になったの？」僕は聞かずにはいられなかった。

「彼、前の奥さんと別れたばかりで、寂しかったらしいの。毎日のようにお店に来て、私を指名してくれた。『お前と一緒にいると寂しさを忘れられるんだ』が彼の口癖。その言葉にクラッときたの。だって寂しいのは私だって同じだもん。だんだんと彼の横柄な態度にも慣れてきて。同情がいつの間にか愛情に変わっていったのかしら」

そんな愛の始まりもあるんだろうなあ、と思って僕は聞いていた。

Aとの関係が深まっていく最中、ローナはフィリピンの姉から『エフレンが別のフィリピン女性と結婚した』という連絡を受けた。ローナはその時頭の中が真っ白になった。悪い冗談だと思ったかった。ともかく一刻でも早く彼の口から直接に真実を聞きたかったと言う。

「すぐには信じられなくて、確かめようと思って彼に何度電話をかけてもつながらない、テキストしても手紙を書いても返事も来ない。1ヶ月必死で彼を追いかけて待ったわ。お店でやけ酒飲んで酔いつぶれて、減給のペナルティを受けたわ。『彼のことはあきらめよう』と決心した日、Aがお店に来て、エフレンのこと話したの。そうしたら『そんなやつ忘れちまえよ。俺たち結婚しよう』といきなり言われたの。すごくびっくりしたわ。冗談なのか、本気なのかわからなかった。だってそれまで『愛してる』って言われたことなんか一度もなかったのよ」

しかし、ローナはAへの同情と失恋のショックに負けて誘われるまま彼に身を任せた。それでも初めてAと関係した時は、エフレンを裏切ったような気がして泣いてしまった。9年間も連れ添った仲だったし、もしかしたら彼の結婚はうそかもしれない、という思いもあった。

僕は、彼女の話聞きながら待つ身のエフレンのことを考えた。

初めて結ばれた夜の翌々日、ローナはマニラに出発。そして8ヶ月のトレーニングを経て来日。

6ヶ月の仕事の後、帰国しても彼の待つダバオに滞在するのは2週間ほど。以後大体8ヶ月の周期で、ローナのダバオ滞在中に2週間ほど同じ時を過ごすだけの恋愛関係。この時ばかりは二人はむさぼるように愛し合ったというのが、エフレンにとってはいつまで続くかわからないローナのジャパン・ドリームの終わりを待つのは相当つらかったのではないかな？

また、二人の出会いからもわかるように、エフレンは人のいい

田舎の若者のようだし、かなりの男前だったというのだから、地元の女性からの誘惑も多かったはずだ。ローナにしても彼がいるからこそ、日本にいても大きな心の支えがあった反面、来日中は女性としての恋心を自由に羽ばたかせることはできなかった。

『一番大切な部分はエフレンにだけしか許さない』という強い貞操観を貫くための葛藤もあったに違いない。

このカップルも結局は遠距離恋愛の犠牲者なのだ。恋人同士がそんなに長期間離れ離れになっていていいはずがない。『どちらも悪くない。両方が犠牲者なのだ』と僕は思った。

あわただしい結婚式

＊初めて結ばれた日本人、Aとのその後

しかし、現実には過酷だった。1ヵ月後にローナはAの子供を妊娠。Aは妊娠を知って急にやさしくなった。それでもローナは彼を本心からは愛せなかった。2004年の5月の終わりに帰国する時のサヨナラ・パーティにも『仕事が忙しいから』と言ってAは来なかったのだ。

「何なのこの人って思った。やけっぱちな気分になったわ。シングルマザーになる覚悟だって決めたんだから」

僕は気になるAとのその後、エフレンとの結末についてローナに尋ねた。

「フィリピンに戻ったらすぐダバオに直行。エフレンに直接会って聞いたわ。結婚は本当だった。新妻がおどおどと見守る前で『うそつき』って言って彼の頬を思いっきりひっぱたいてそれでおしまい。

Aは時々思い出したように電話をかけてきては、『結婚しよう。お前の家族も助けるよ』なんて言ってたけど、信じられなかった。何度か日本に行って、日本人に捨てられた女の子をたくさん見て、男性を見る目も厳しくなっていたし、Aの態度から、どう考えても本当に愛されてるとは思えなかったから。

時々電話してきては『愛してる。結婚しよう』なんて言ってたかと思うと、パタッと連絡がなくなっちゃうの。そしてまた思い出したように電話をかけてきて……その繰り返し。信じたくたって信じられないわよ、そんな男。それが突然、その年の7月にAがマニラのお姉さんの家にやって来て事態が急変したの。その時だけは、やっぱりAは私を本気で私を愛してくれていたんだわと思って喜んだ。

Aは田舎から私の両親も呼び寄せて、『お嬢さんと結婚させてください』って床に土下座してお願いしたのよ。さすがにその熱意は家族に伝わって即OK。私もその時はすごく感激して泣いたわ。」

それからAは、ローナの家族を動員してびっくりするほど手際よく、フィリピン側の婚姻関係手続き、教会の手配、判事の手配とか、あっという間にすべての段取りをつけて、結婚が成立するのを見届けると、『今度帰ってくる時は迎えに来るよ。一緒に日本に帰ろうな』と言い残してあっという間に日本に帰国してしまったと言う。

その後、『生まれてくる子供のために』とか『お前の家族のために』って言って2ヶ月間続けて5万円仕送りしてきたが、それからパッタリ音信不通。子供が生まれた時も何の連絡もなし。それでもローナは子供には生まれる前からAと話していた日本人名をつけることにした。Aとの約束にそこまでこだわるのに納得いかない僕の気持ちを見透かしてか、

「心のどこかでAがまた帰ってくるかもしれないと思って」

とローナは説明してくれた。

ローナは本当に人がいいと改めて思った。普通のフィリピン人なら、ここまで自分のプライドを踏みにじられたり、ひどい目に合わされた時は、相手をくそみにけなすものだ。怒りや憎しみが高じるあまり、恨みを持った相手を刃物で刺し殺したり、ピストルで射殺したりと命のやり取りに発展するケースも珍しくない。だからこそフィリピンに長期に滞在する外国人にとって、フィリピン人との人間関係では「決して彼らのプライドを傷つけないこと」「恨みを買わないようにすること」は常識になっていると言っても過言ではないほどだ。

しかし、これだけプライドを踏みにじられ、コケにされても、ローナはAの悪口ひとつ言わなかった。肉体関係だけで満足せず、わざわざ渡比して婚姻手続きを完結させ、子供が生まれる前にドロロン。何なんだこのAという奴は！ 憤懣やるかたない思いで、僕はこの恥知らずの無責任夫に対して彼女が望むことを聞いてみた。しかしその願いは、予想に反して控えめなものだった。

「今は子供に満足にミルクも飲ませてあげられない状態なの。だからせめて子供のミルク代と、世話をしてくれているお姉さん夫婦へのお礼として毎月1万円でもいいから仕送りしてほしい。それができないなら、私との婚姻を解消してほしい。Aに望むことはそれだけよ」

「『婚姻の解消?』一瞬何のことかわからずに僕は聞き返した。

あなたのメイドにして！

★離婚したくてもできない理由

「今は子供に満足にミルクも飲ませてあげられない状態なの。だからせめて子供のミルク代と、世話をしてくれているお姉さん

夫婦へのお礼として毎月 1 万円でもいいから仕送りしてほしい。それができないなら、私との婚姻を解消してほしい。A に望むことはそれだけよ」

「『婚姻の解消?』一瞬何のことかわからずに僕は聞き返した。

「だって書類の上ではAはまだ私の夫でしょ。フィリピンでけね。だから婚姻を解消しない限り、これからもし素敵な人との出会いが会っても結婚できないの。相手がフィリピン人だろうと、日本人だろうと。私は紙の上だけの結婚にまだ縛られているのよ。完全には自由じゃないの」

僕にもよくわかった。フィリピンでは本来、離婚はできないことになっているが、弁護士を雇って『婚姻無効』の手続きを取れば晴れて独身に戻ることができる。ただ、その諸費用は、30,000 ペソ～ 50,000 ペソと普通のフィリピン人がおいそれと用意できる額ではない。まして今のローナの稼ぎでは、飲まず食わずで貯めたとしても 5 年、いや 10 年かかっても用意できないかもしれない。

しかし月 1 万円の仕送りにしろ、この婚約無効の手続き費用にしろ、定職を持った日本人なら、謝罪の気持ちさえあれば難なく払える金額だ。A は、離婚後のさびしさを紛らすために、ローナをおもちゃにし、その人生を大きく狂わせたことへのささやかな代償すら支払わず、日本では独身面を引っ下げて好き勝手に女遊びを楽しんで、男に生まれた幸せを謳歌しているに違いない。

その一方で、家族すべての生活を背負っていたローナは、底なし沼のような極貧生活の中で毎日生き延びることに汲々としている。こんな理不尽が許されていいはずがない。

「毎月仕送りができないんなら、せめてローナを自由にしてやれよ」

僕は、自分の気持ちがコントロールできなくなって思わず近くのテーブルを両手こぶしでたたきながら大声で叫んでしまった。ローナは一瞬驚いた様子を見せたが、僕の A に対する怒りの表現だとわかったのか、微笑みを浮かべて言った。

「まだ、私の生きがいと会ってなかったわね。連れてくるわ」

彼の名前は KEN。1 歳半、覚え始めのタガログ語を少し話し出したばかりのジャパニーズ・フィリピーノだ。一見して日本人の血を受け継いでいるとわかる顔立ち。「この子が私の生きがいよ」と言うローナの顔が一瞬のうちにやさしい母親の顔に変わっている。

しかし、無責任男との気まぐれな行為の結果の置きみやげであるこのかわいい子供が今の彼女の生きがいだとはちょっと皮肉だと言わざるを得ない。子供のない僕にはそうとしか思えなかった。

目鼻立ちの整った男前だが、難しい顔をしてまったく笑わない。

母親の苦難をともに背負い込んでいるようにも思えた。「この子の笑顔が見たい！」インタビューが終わったら二人をSM(シューマート：フィリピン最大のスーパーマーケットチェーン店)での食事に誘おうと思った。愛情のない『関係』によってこの世に生を受けた子供が、フィリピンで周囲の人々の暖かい愛情を一杯に浴びて幸せに暮らしている姿を僕はたとえ一瞬でも見たかったのだ。

★出稼ぎのチャンスはもうない？……かすんでいく夢

「可能性はフィフティ・フィフティかなって思ってたけど、最近ダメかなあと思い始めたの。日本が厳しくなっただけでなく、アロヨ(大統領)がテレビで『日本に出稼ぎに行くエンターテイナーはフィリピンの恥、削減する』と公言したのもすごくショックだった。日本にもフィリピンにもどこにも私たちの味方はいない気がしたわ。もう一年近くも待ってるし。今ヴィザをもらえているのはファースト・タイマーの娘(初来日の娘)ばかりよ」

エンターテイナーとしての再来日の可能性についてローナはうつろな目で話した。

「ダメかもしれない。でも今の私にはただチャンスを待つしかないの。私は、高校しか出てない。頭も悪い。新しい仕事を探すにも、今は応募書類を用意するお金も交通費もないんだから。贅沢は望まないけど、1日30ペソの生活はもういやだわ。カラオケの仕事も飽き飽き。でもやめられない。他に選択肢がないんだから。あと1年は待ってみるわ」

「もし1年待って日本に行かれなかったら？」

僕は心から彼女の身の上を案じて、最悪の場合の心構えを聞いてみた。

「結局私にはこの仕事しかないかもしれないわね。でも、できれば田舎に戻って畑仕事でもして平和に過ごしたいわ。貧乏には慣れてるからどうやってでも生きていけるわ」

ローナは自分に言い聞かせるかのように言った。そして気を取り直して言葉を続けた。

「ただ私だってただ黙って待ってるわけじゃないのよ。韓国にエンターテイナーを斡旋するプロモーションにも足を運んでみたわ。

『接客はもちろん売春もしなくちゃいけないけどOKかい？』と聞かれてすぐ帰ってきちゃった。どんなに貧乏でも売春だけは絶対にいや」

なるほど。他の日本帰りの女性から、日本以外の多くの国でフィリピン人がエンターテイナーとして働く場合、ほとんど必ず売春がセットになっている、と聞いていたがどうやら本当らしい。そんなことを考えている時、ローナは出し抜けに言った。

「クーヤ ガウイン モ アコン カトゥーロン モ（お兄さん、私をあなたのメイドにして）。マニラにいる間だけでいい。給料は1日 300 ペソ。いや 200 ペソでもいいわ」

心臓がバクバクした。冗談ぽく言う彼女の視線は真剣そのもの。彼女がそこまで追い込まれているとは！ 一瞬真剣に考えた。掃除、洗濯、食事の世話、その他雑用をこなしてくれるメイドはありがたい存在だ。ただ1ヶ月 9,000 ペソは、今回の緊縮予算の取材旅行ではやはり大きな出費だ。突然の申し出に僕が当惑しているのを読み取った彼女は

「ほんの冗談よ」

と申し出を取り下げてくれた。内心ホッとしたが、彼女の真剣なまなざしは、確かに『私どうしようもないの。助けて』と訴えかけていた。僕は何もできない自分がたまらなくもどかしかった。

ジョリビーのディナー

★幸運を祈る

インタビューは終わった。時計の針は午後2時半をまわっている。彼女たちは今朝からまだ1食もしていないはずだ。早く食事に誘ってあげなければ。

「KENはグワーポ(男前)だけど本当に笑わない子供だね」

とローナに自分の感じたままを言った。

「そうなの。気難しい子でね。ミルクを飲んだり、おいしいものを食べるとよく笑うのよ」

ローナは答えた。「じゃ、みんなでジョリビーに行こうよ」と僕は2人を誘った。

2人は着替えのために2階に上がった。僕も一緒に部屋を見せてもらった。テラスとベニヤ張りの3畳半くらいの部屋、そして階段の脇に3畳足らずの部屋が一部屋あった。狭い方の部屋に改めて目をやると、小さなたんすの脇に、ピンクのスーツケースがポツンと置かれている。ローナの日本への思いをたくさん詰め込んで『私を早く日本に連れてって』と訴えかけているようだ。

出産後体調を壊し、7ヶ月間完全休養してからタレントとして現場復帰して1年。かつてない長いスタンバイ状態での日本にけるローナの思いを目の当たりにして、僕の胸にもグッとこみ上げてくるものがあつた。いたたまれなくなつて振り返ると、テラス越しに希望をかき消すような灰色のマニラの空が見えた。

「ありがとう。インタビューは終わりだ。これ今日のお礼だよ」

僕は500ペソをさりげなく彼女に渡した。

「ありがとうクーヤ。これでKENのミルクが買えるわ」

彼女の瞳が潤んだかと思ったとたん、大粒の涙が一筋二筋と流れ

た。彼女はハンカチでさっと涙を拭い去ると、何もなかったかのように笑顔を取り戻して

「さあ、ジョリビーに行きましょう」と弾んだ声を出した。僕は500ペソというお金がこんなに価値のあるものなんだと改めて感じていた。

SMに着いてジョリビー人形を見つけると、KENはローナの手をぐいぐい引っ張る。

「この子、本当にジョリビーが大好きなの」と笑みを浮かべるローナ。

僕はブライドチキンとご飯のセット『チキンジョイ』、ローナとKENは『ミックスプレート』という、ビーフステーキ・ご飯・フルーツサラダのセットを注文した。

席について、ミックスプレートのフタを開けると、ベビーチェアに座ったKENは満面の笑みを浮かべ、何度も小さくジャンプするように腰を浮かせた。

「あっ、KENが笑った」そんな言葉が思わず僕の口をついて出てきた。

KENは、ビーフステーキ→ご飯→フルーツサラダと、次々に自分が食べたいものを指さしてローナに意思表示する。ローナはKENのリクエストに答えて彼の口に慌ただしく食べ物を運ぶ。KENは、おいしいと思う度に満面の笑みを浮かべては足をばたつかせる。一方、ローナはKENがパクパクやっているうちにさっさと自分の分を食べる。KENの笑顔にローナが週に一度の母親業を楽しむ姿、どちらもとてもほほえましかった。

ローナと日本の無責任男との束の間の恋の結果生まれたKEN。しかし彼はマニラの片隅で貧しいながらも確かな母親の愛情を受けて幸せに生きている。そしてフィリピン社会の一員としての人生を確かに歩みだそうとしている。それが実感できて僕はうれしかった。ささやかなディナーの後、僕らはSMの入り口で別れた。

愚直なまでに真っ正直、精一杯に生きているローナにこれ以上頑張れとは言えない。頭の中では『クーヤ、あなたのメイドにして』と言った彼女の言葉が何度も何度もこだましている。でも僕には何もできない。SMバレンズエラ店から一步外に出ると、体を射抜くような真夏の日差し、灰色で焼けたゴムのような匂いのする空気、我が物顔にクラクションを鳴らしながら通り過ぎていくジープニー・バスなどの鼓膜が破れんばかりの騒音、どこから沸いて出てくるのかと思うほどたくさんの人の群れ……混沌と喧騒の街、マニラの夏の昼下がりがそこにはあった。

この巨大都市には、ローナのように日々の生活をかけた戦いをしている人が一体どれだけいるのだろうか？ 何ともやるせない

思いと自分の無力感に押しつぶされそうになりながら、僕は心の中で「神様。この母子にどうか幸運を」とつぶやきながら、人込みをかき分け帰りのバスに乗り込んだのだった。

わずか 40 日の来日（アナリサ第 1 回）

★クライマックスは突然に～手入れ

「ケイサツダ。ダレモ ソトニ デナイデ……」

さっきまで客席に座っていた半袖シャツの 4 人の男たちが急に立ち上がって大声を上げているのがステージのカーテンの割れ目から見えた。

「さあ、こっちの扉から早く逃げて。警察に捕まるぞ」

クラブの日本人スタッフが大慌てでカーテンをたくし上げ、舞台に飛び込んできた。

1 回目のステージを終えて着替え始めようとしていたアナリサは、お店に何か大変なことが起きたことだけはわかったが、恐怖で身体が硬直して身動きできなかった。

「あんた、何ボケッとしてるのよ。警察に捕まりたくなかったらさっさと裏口から出なさい。捕まったら刑務所に入れられて、強制送還よ」

「ケイサツ」「キョウセイソウカン」先輩タレントの言葉にゾクッと身震いしながら、ステージ衣装のままあわてて裏口から店を走り出た。ハイヒールでの砂利道の逃走。途中何度も転びそうになった。フィリピン人 11 人とルーマニア人 4 人のインターナショナルクラブ混成タレントチームのプロモーター宅への避難劇だった。

隠れ家のプロモーター宅にも、いつ警察が来るかわからないと思うと震えが止まらない。

「店が営業許可を持ってなかったから手入れがあったのよ。私たちには何も罪はないから心配することないわ」

先輩タレントの説明を聞いてもアナリサの不安は完全には消えなかった。

「お店に営業許可がなければ、閉店になる。その時は他のお店で働くことはできるんだろうか？ それダメなら結局フィリピンに強制送還されてしまうんじゃないだろうか？」

予感は的中。ライブハウスの名目で営業してきたお店は即日閉店。彼女たちも結局、翌日警察署に身柄を拘置され、日本でのエンターテイナーとしての序章はあっけなく幕を閉じた。2 日間の拘留後、あっという間の強制送還。初来日からわずか 40 日目のみ

じめな帰国だった。何のために日本に来たのだろうか。オーディション、来日に向けてのトレーニング、大金をはたいて買ったお店用衣装、歌の特訓、メイクアップの練習……すべての苦労が泡のように消えてしまった。月給 1,500 米ドルの契約が、帰国時に手にしたのは日本円で 3 万円。関西国際空港を飛び立ってからマニラ国際空港に着くまでアナリサの涙は一瞬たりとも止まらなかった。そんなアナリサを気遣い、後に親友となる同僚のサンディーが「短期間の仕事でホームシックになる間もなくてよかったね」と悲しい冗談を言った。

「本当にそうね」とアナリサも精一杯笑顔を作ってサンディーの思いやりに答えた。

★取材のあせり～学校めぐりに活路

僕はカラオケ回りを中心に情報を集めてきたが、カラオケ勤務以外の人生を歩むフィリピーナにはなかなか出会えず、期待していた知人の紹介もうまく回らず、看護師や介護士など、前向きな転身を目指す女性に出会うためには、学校を直接訪ねる方が近道だと気がついた。僕は、以前から目をつけていたマカティ市内のショッピングモール内の看護師養成学校・介護士養成学校に飛び込みで取材することを決めた。

最初のターゲットは看護師養成学校だ。小さな入り口の扉を開けると、200 人は収容できそうな講堂が目に見え込んできた。数ヵ月後には看護師として渡米する若者たちが、講義に聞き入っている。僕は初老で温厚な雰囲気的女性事務員に取材の趣旨を簡潔に説明した。

彼女は協力的だった。生徒たちのプロフィールを見回しながら「生徒さんの過去についてまでは本校では把握しておりませんからねえ……」とつぶやいた。

そうだなあ、昔はジャパユキでした、と入学願書にいちいち書かせるわけもないし、空振りだな、と思っていたら、彼女は「ちょっとお待ちください」と言って立ち上がって講義中の講師に歩み寄り、何事か話し始めた。自分のために授業が中断されている。生徒たちに申し訳なかった。二人の話が終わると思わぬ展開が。講師が生徒たちに言った。

「みなさん、今日は日本人ライターのゲストが本校の授業を視察に見えています」と講師は私を生徒たちにきちんと紹介してくれた。

200 人ほどの生徒たちの視線が一斉に私に向いた。少しドキドキしながら

「マガンダン ハーポン ポ サ イニョン ラーハットウ(みな

さん、こんにちは)」

と一言あいさつした。生徒たちの中から、「この日本人、少しはタガログ語ができるのか？」と言う驚きからか、「ワー」という歓声があがった。講師は続けた。

「この方は、以前日本で仕事したことがあってその後新たな人生を歩み始めたフィリピン人女性のドキュメンタリーを書いています。本校に見えたのは、看護師を目指すみなさんの中に以前日本で仕事をした経験のある人がいるかどうか、取材対象を探すためです。みなさんの中で、以前日本でエンターテイナーとして働いた経験のある人はいませんか？ もしいたら手を上げてください。インタビューに協力すると謝礼が出るですよ」

いやー、授業を中断してくれたうえに、ここまで協力してくれるとは！ 僕はとても感激した。残念ながら日本でのエンターテイナー経験者はいなかったが、

「みなさん、授業を中断させてしまって本当にすみませんでした。そしてご協力ありがとうございました。みなさんのアメリカでの看護師としてのご成功を心からお祈りしています。神のお恵みを！」

とお礼の言葉を述べて講師と親切につながしてくれた事務員にお礼を言って、看護学校を後にした。大きな拍手と「サヨナラ」などの日本語が背中から追いかけてきた。僕は何度か振り返って手を振った。意外な展開に少々驚き、一瞬期待が膨らんだが、結局直接の収穫はなかった。冷静に考えれば至極当たり前のことだ。日本にエンターテイナーとしてやってくる女性の学歴は、高卒か、大学中退がほとんどだ。4年制大学の卒業者はほとんどいない。フィリピンで看護師の資格を取るには他のコースに比べて一段と授業料が高い看護学校の4年過程を修了した上に国家試験に合格しなければならない。エンターテイナーから看護師への転身は、時間的にも学費の面でも非常に難しい転身パターンなのだ。

気を取り直して、次は介護士養成学校へ。介護士は、高卒でも6ヶ月間の看護師コースを受講すれば、すぐにプロフェッショナルとして活躍できる点、看護師よりもはるかにハードルが低い。今回フィリピンに渡航する前にも看護師への転身の例は身近で何件か聞いていたので、期待して学校に乗り込んだ。たが、学校は休校。改めて出直した。

日本語学校での意外な発見（アナリサ第2回）

★なぜ今さら日本語学校で日本語を学ぶのか?!

看護師学校、介護士学校と2校回って収穫なし。今日はダメだ

ったな、と思って遅い昼食を取ろうと思ったその時、Japanese Language School の小さな看板が目にとまった。「今、日本語を勉強しているのはどんな人たちなんだろう」という好奇心がふっと沸いた。

「コンコンコン」小さくノックしながら日本語学校の扉を開け、応対に出てきた女性事務員にまた取材の趣旨を説明した。小さな事務所風の学校の中には、事務所と小さなテーブル付きの席が 10 ところじんまりした教室が 2 つあるだけだった。奥の教室では、英語とタガログによる日本語レッスンが行われていた。生徒はわずか 5 人だが、先生と生徒の掛け合い、生徒同士の会話訓練と熱気みなぎる授業風景が半開きの教室の扉越しに見えた。

「授業は 2 時間と長いですが、終わったら、生徒さんとお話になってもいいですよ」

初めての授業風景に見入っている時、事務員が声をかけてくれた。ありがたい。2 時間は少々長いが待って話を聞いてみる価値はある。僕は一度学校を出て、モール内のマクドナルドで遅めの昼食を済ませてから授業終了の時間を待って学校に戻った。

ちょうど授業が終わって生徒さんが教室から出てくるところで、僕は生徒一人一人に「こんにちは」と日本語で話しかけた。みんな「コンニチワ」と気さくに返事をしてくれた。なんと 5 人中 3 人が日本帰りの女性だった。その中でもっとも気さくな感じの女性に最後のフィリピンへの帰国時期を聞いてみると 2005 年 5 月。再来日を待ってほぼ 1 年。ドンピシャの取材対象だ。僕は簡潔に取材の趣旨を説明して協力を求めた。そしてとりあえず 15 分、モール内のマクドナルドでのミニ・インタビューを承諾してもらった。

「出逢いは偶然の風の中」、僕はさだまさしの歌の詞に自分の心境をダブらせていた。

マクドナルドでは静かな隅っこに二人分の席を取り、ハンバーガーとコーラをはさんでのインタビュー。向かい合って座るとクリッとした瞳がきれいなアイドル系の彼女の美少女ぶりにドキドキした。「うーん、ひかれる！」そんな気持ちを抑えて質問を始めた。

「日本でエンターテイナーだった君が、今またどうしてわざわざ日本語学校にまで行って日本語の勉強をしているの？ だって日本語はうまいよね？」

おっとりして、ちょっとボーっとした感じのアナリサは、少し考えてから答えた。

「いえ、まだまだよ。実用レベルにはほど遠いわ。もし日本に帰れた時、日本語がうまかったら、仕事に有利でしょう。エンター

テイナーで日本に戻れなくてもフィリピンの日系企業に応募する時も日本語ができた方が有利よね。それから私は看護学校生なの。新2年生で卒業まで先は長いけど、将来日本で看護師として働く時にも、日本語は絶対条件でしょ」

エンターテイナーとして日本に戻る道を残しながらも、それがダメなら、日系企業への就職、最後の最後には本来の夢である看護師になる道が残っている。流動的な日比の人的交流環境の中で多くの可能性を残しながら、着々と未来を見つめて堅実な努力をしている。見かけによらずこのコ、ちゃんとした将来設計を持っているんだと僕は感心した。運命に身を任せるだけのカラオケ・ガールとは大分違う。来日経験についても聞いてみた。

「来日は1回だけって言ってたけど、6ヶ月だったの?」

「いいえ、1ヶ月だけ」彼女はうつむき加減に答えた。

「えっ、1ヶ月? 何で?」

その後、僕が絶句していると、ぽつりと彼女が途切れ途切れの日本語で言った。

「オミセ クローズ シタ シカタナイ」

初来日の時に、彼女の店が手入れか何かで閉店して帰国する羽目になったに違いない。

「とんだ災難だったね」心からの同情をこめて僕は言った。

「そうね。本当に悲しかったわ」

ちょっとショッキングな初来日のことを聞いて彼女への興味はますます増大していった。そんな苦い経験を味わったからこそ、帰国後、行く先不透明なエンターテイナー稼業だけでなく、将来の可能性を広げるために、看護学校の春休みを利用して週5日6ヶ月間の日本語教室に通っている。しかし、彼女の顔はこれだけではなかった。

日本語学校での意外な発見（アナリサ第3回）

★家族のビジネスプラン

「春休みの間は少しでもお金を稼ぎたいから夜はマカティのカラオケでバイトしてるの」

日本語学校で知り合ったアナリサは、単なる元エンターテイナーの看護学生・日本語学校生徒ではなかった。現役のカラオケガールでもあったのだ。

僕は時計を気にしながら、ちょっと答えるのは難しいかなと思いながら聞いてみた。

「自分の夢を実現し、家族を助けるためににお金を稼ぐ具体的なプランはもうあるの?」

「お父さんが簡易食堂をやってるの。それをもう1店舗増やすの

が最初のプラン。お母さんもマカティに美容室を開きたいという希望があって、それを助けるのが第2のプランね」

すぐに明快な答えが返ってきた。僕はさらに突っ込んでみた。

「君の2つのプランを実現するためにどれだけ予算が必要か大体わかってる？」

正直、彼女が答えられるとは思っていなかった。しかし彼女は一瞬考えてから即答した。

「そうね。お父さんの簡易食堂の開業資金が5万ペソ。お母さんの美容室が50万ペソ。それに私の勉強にも残り3年分で15万ペソくらい必要だから、全部で70万ペソくらい稼がなくちゃいけないことになるかな」

びっくりした。目の前の頼りなげな15、6といっても通りそうな童顔の天然ボケ風のアイドル系美少女がこんなに明確なビジネスプランを持ち、しかも具体的な予算額まで把握しているとは！アナリサに対する興味は限りなく増大していった。

15分はあっという間に過ぎた。彼女の携帯電話番号を聞き、次回の本インタビューの約束を交わしてその日は分かれた。エンターテイナーの道を残しながら、看護学生であり、日本語学校生徒であり、カラオケガールでもある。そして初来日での衝撃の苦い思い出。興味本位でのぞいただけの日本語学校ですごい逸材に出逢い、僕は少なからず興奮して、こぶしを握り締め「イエス、イエス」と小さく連呼していた。

★具体的な将来設計

インタビューの日の朝9時頃、朝食を終えてまさに家を出ようとしている時にアナリサの友人サンディーから電話があった。

「オハヨゴザイマス カノジョ マダネテル インタビュー アシタ ニジダッテ」

あちゃー、いやな予感が現実のものとなってしまった。

「じゃ、明日よろしくね」

ただ、待つ身の僕だった。絶対怒ってはいけない。こちらはひたすらお願いする立場。フィリピン人との約束では、遅刻は言うに及ばず、ドタキャンのリスクが常に伴うものだ。

翌日、僕は約束の時間を待ちきれず、というか何とか来てもらえるように午後一番でこちらから電話した。

「たとえ嵐が吹こうとも たとえ大波荒れるとも……」

何と着メロは、フィリピンで1970年代後半に大ヒットした日本製のアニメ「ボルテス・ファイヴ」だった。この「ボルテス・ファイヴ」。日本ではヒットどころか話題の端にも上らなかったが、合体ロボ系のアニメで1978年に初めて日本からフィリピンに輸出

され、巨大ロボットの戦いや宇宙船などが次々と登場するハイテク時代のストーリーが非常に新鮮で多くの子供たちを熱狂させたのだった。こうした事情を知るフィリピンパブファンやエンターテイナーの中でも「ボルテス・ファイヴ」は人気のある曲になっている。着メロの選曲からもアナリサはかなりの日本びいきであることがわかった。

「クーヤ、 キノウゴメンネ キョウダイジョブ シンパイナイ」
こちらが尋ねる前に彼女が言った。僕は実際に会うまではちっとも安心ではなかったが、「じゃ、よろしくね」といって電話を切った。

高い授業料は誰が払う？（アナリサ第4回）

★楽しい授業

午後2時、約束の時間ぴったりにアナリサはマクドナルドに現われた。今日は連れがいる。親友のサンディーだ。アナリサの1つ年上の22歳。褐色の肌に高い鼻、彫りの深いスペイン系の顔立ち、ちょっと野性的で大きな黒い瞳が魅力的な女性だ。アナリサとは違うプロモーション所属だが、アナリサよりわずか2週間前、先述の店に入店し、来日後わずか1ヵ月半後強制送還という、アナリサと同じ運命をたどった戦友であり、短い間でも苦楽をともにした上、看護学校生という共通点もあり、あっという間に親しくなったのだ。

早速アナリサのインタビューを始めた。

「今の暮らしはどう？ 生活は苦しい？」

「うーん、あてもなく待つのはつらいけど、日本語の勉強がもうすぐ終わると、看護学校の授業が6月に始まって大忙しになって大変。だけど、楽しいわ」

『楽しい』の一言にはびっくりした。彼女の受け答えからは、日々生きるか死ぬかの瀬戸際で、血のにじむような生活の苦勞をしているという様子はまったく感じられない。「勉強で苦勞しているとはゆとりがあるなあ」というのが正直な気持ちだった。次に彼女のエンターテイナーとしての再来日にかかる思いと、見通しについて聞いてみた。

「強制送還でフィリピンに帰ってきちゃったから、日本の法律だと5年は再来日できないって聞いたんだけど、プロモーションの人が何とかするって言ってたから期待してるの。実際どうなるのかはわからないわ。でもエンターテイナーで日本に戻るのがベストだわ」

彼女の受け答えは生き方の選択肢が多い分だけ心のゆとりを感じさせるものだった。

「もしエンターテイナーとして再来日できなかつたらどうする？ エンターテイナーとして来日するのをいつまで待つ？ 選択肢がありすぎてどれを選ぶか迷うと思うけど」

エンターテイナー以外にもすでにいろいろ可能性のある彼女だけに質問を変えてみた。

「エンターテイナーは最終目標に向かう途中の手段だからタイミングが合ったら、OKっていう感じね。だって最後は看護婦になるか、オフィスできちんとした仕事がしたいもの」

★本当のこと

もっともな答えだ。彼女のようなプロフェッショナル志向の女性からすれば、なおさらエンターテイナー業は夢に向かう途中の仮の姿に過ぎない。ただ、彼女の心にゆとりを与えている日本語学校の学費、看護学校の授業料などのお金がどこから出てくるのか不思議だった。彼女は振れば 1000 ペソ札がバサバサ出てくる打ち出の小槌でも持っているのか？ 僕はお金に関する疑問について聞いた。

「日本語学校の授業料っていくらぐらいなの？ 入学金はいくら？」

「授業料は6ヶ月で2万ペソ、入学金が6000ペソよ」

大学の授業料と変わらないではないか。設備の割に高すぎる。僕はここで核心に迫った。

「帰国時の所持金は3万円と言ってたけど、日本語学校の授業料は誰が払ったの？」

「お父さんが出してくれたの」

彼女の回答は急に歯切れが悪くなってきた。月収15000ペソのレストラン経営のお父さんが支払えるとは思えなかった。では1年で4万～5万ペソの看護学校の学費は誰が出すと答えるのだろうか？

「看護学校の学費はどうするの？」

僕は彼女を尋問しているような気まずい思いを感じながら恐る恐る聞いた。

彼女はしばらく黙り込んでしまった。どうしても話したくなければ無理強いはできない。

フィリピン人もまた、プライバシーに関する意識は非常に高い。だからこそ、突っ込みすぎてはいけない。そこでインタビューがすべて終わりになってしまふからだ。お父さんが払ってくれたことにして次の質問に進もうとした時、彼女が申し訳なさそうに言った。

「クーヤ、ごめんね。私うそついた。本当は日本人のボーイフレンドが日本語学校の学費も看護学校の学費も払ってくれたの。本

当のこと言うのが恥ずかしくて、ごめんなさい」

「なんだ。そうだったんだ。いいんだよ。悪いのは僕の方なんだから。次々とプライベートなことばかり根掘り葉掘り聞いちゃってごめんね」

僕は疑問が一気に解けてスカッとした。彼女との間に立ち込めた気まずい雰囲気も一瞬のうちに払拭できた。インタビューはスムーズに流れ始めた。

日本行きの前に出会いが待っていた（アナリサ第5回）

★看護婦になる夢

アナリサは 1985 年 4 月、ミンダナオ島の第 3 の都市、カガヤン・デ・オロ市で簡易食堂を営む両親のもとに生まれた。3 人兄弟の 2 番目で、2 つ年上の長男はお父さんの食堂を手伝い、7 つ年下の妹は高校 1 年生だ。生活は苦しかったが、極貧というほどではなく、何とか 1 日 3 食できる生活を送っていた。3 人とフィリピンにしては兄弟が少ないのも家の経済負担を小さくする上ではよかった。

アナリサが小学校を終えると、さらに豊かな生活を求めるお父さんに従って家族全員でマニラ首都圏のタギッグ市に引越した。アナリサは高校生までは質素ながら特に不自由のない暮らしを送ることができた。

しかし、かねてからアナリサは、看護婦になってアメリカで仕事をして稼いだお金で家族に楽をさせてあげたいと思っていた。夢をかなえるには、看護学校に通い、国家試験を始め幾多の試練を乗り越えなければならなかった。そのためには年 4 万～5 万ペソの学費を始め、莫大なお金が必要だ。初年度こそ何とかお父さんが学費を捻出できたが、それが限界だった。アナリサは自分がフィリピンで働いてお金をためて、お金がたまったら学校に行って、学費が足りなくなったらまた休学して働く。そんなことも考えた。

「でもそんなことを繰り返してたら、いつ卒業できるかわからないでしょ。30 歳になっちゃうわ」

アナリサはお父さんが 2 年目の学費を支払えないとわかった時点で、短期間で大きく稼ぐ手段として日本行きをすぐに決意した。いここが日本にエンターテイナーとして出稼ぎに行って成功した実例が身近にあった。アナリサは自分の思いをすぐにお父さんに伝えた。

「私が日本に行って学費を稼いでくるわ。お父さんとお母さんの仕事も助けたいし。お父さん、今まで苦勞かけてごめんね。これからは私の番よ。お願い、私を日本に行かせて」

「何とか看護学校は私の力で卒業させてやりたかったんだが、申

し訳ない。気をつけて行っておいで」と言ってお父さんは涙を流したと言う。

アナリサも当時の記憶が鮮明によみがえったのか感極まって声を詰まらせ、瞳からは大粒の涙がひとすじふたすじと流れた。涙もろい僕も思わずもらい泣きしてしまった。

★紳士的な駐在員

こうして 2004 年の 4 月、いとこの紹介でプロモーションに入ると、昼間はマニラのオフィスでトレーニング、夜はマカティの日本人向けのカラオケ店で、接客の実地トレーニングと彼女のエンターテイナー生活はすぐにスタートした。事務所も職場も自宅から近く、1 日 250 ペソの給料も出て、何のトラブルもなく、日本行き計画の出だしは順調だった。

彼女の芸能人としての資格は踊りが苦手だから歌手ということになった。昼の日本語レッスン・歌手としてのヴォイス・トレーニングと夜の店での実地訓練という生活パターンに慣れてきた 2004 年の 6 月、身長 180 cm くらいと長身で、スリムで男前の T さんというお客さんのテーブルに着いた。世界的に有名な日本の大手メーカーの現地駐在員だという T さんは、流暢なアメリカ英語を話した。

ニューヨーク駐在の経験もあると言う彼は、身のこなしも何もかもがスマートで、助平な日本人観光客や名もない会社の駐在員と格の違いを感じさせたという。

一目見て素敵なお人だと思った。アナリサにとって人生初めての恋。日本人好みのアイドル系の美少女アナリサに遊び半分で言い寄ってくる客は多かったが、自分からは名刺を渡すことはなかった。自腹で作り、一番お気に入りの写真を刷り込んだ愛着のある名刺を誰彼かまわず配るのはいやだったのだ。しかし、T さんには「また来てください」という心からのメッセージとともに名刺を渡していた。

T さんは奥さんと 2 人の妻子持ちであることも隠さなかった。カラオケに遊びに来る妻子持ちの客の多くが、女の子の気を引くために独身だとうそをつく中で、包み隠さず、自分の家庭について語る T さんに対し、アナリサはかえって信頼感を持ったという。

2 年間の単身赴任の終わりは、翌年の 3 月。アナリサは出会って早々に「T さんと一緒にいられるのもあと 9 ヶ月なんだなあ」と計算していた。長いようで短い微妙な期間。最初の巡り会いから、T さんはお店には最低でも週 3 回、多い時は毎日のようにお店に来てくれた。どうせ別れなければならないんだから、好きになってはいけないとわかっているにもかかわらず会う度にどんどん T さんへの愛情

が深まって行くのを抑えられないアナリサだった。

同伴はもちろん、お互いの休日である日曜日にはよくドライブにも行った。人気遊園地スター・シティ、避暑地タガイタイ、マニラ湾のサンセット・クルージング、ハリソン・プラザやアヤラ・センターでのショッピング。とても楽しかった。いつもお店や寮に送り届けてくれるのだが、別れ際にサヨナラのキスをされることもなかった。

ただTさんの言葉や態度の節々に自分に対する愛情を感じていた。それがだたの思い違いではないことを知ることになるのはTさんの帰国も迫った 2004 年の 2 月だった。ある日曜日、いつものようにアナリサはTさんにドライブに誘われた。その帰り「話があるから僕の家につき合ってくれないか」と言われた。アナリサはTさんからお別れの言葉でもあるのかなと思って誘われるままについていった。しかし、意外な展開がアナリサを待ち受けていた。

「恵まれすぎ」の自分（アナリサ第 6 回）

★「君と結婚したい」

「僕は、妻も子供もある。だから君を愛しちゃいけないと思っていた。いい友人でいたかったけど、もう無理だ。君が大好きだ。妻と別れるから、いつか結婚してくれ？ 僕を嫌いだったらはっきり言ってほしい。愛せないならそう言ってくれ。君の意思を尊重するよ」

アナリサは最高に幸せだった。今まで彼と過ごした時間を思い出していた。避暑地タガイタイでアナリサが寒さで震えていた時、ジャケットを脱いでさっと背中を包んでくれた温かい手、車から乗り降りする時にさっと助手席に回って扉を開いてくれる心配り、さりげない愛の瞬間がコンピューターのスライドショーのように次々と脳裏を駆け巡った。

しかし、妻子持ちである彼との交際を両親に相談しても絶対に許してくれるはずがない。他人の家庭を壊してしまうことになる。そんなことをしてもいいのだろうか？ それ以前に彼は奥さんと離婚する気などなく、目先のさびさしから逃れるために私を愛人にしようとしているだけかもしれない。でもTさんは、いつも紳士的で自分を大切にしてくれた。強引に自分を奪うつもりならいつでもできたのに……さまざまな思いが頭を過ぎる。どうしていいかわからない。

「好きなんだ、アナリサ。信じてくれ。日本に帰ったら妻と必ず別れて君と結婚する」

ヒートアップした Tさんは止まらない。ものすごい力で彼女を

抱きしめ、キスしようとした。始め抵抗したが、「Tさんが大好きだから、どうなってもいい。Tさんを信じよう。もしだまされているならそれでもいい」と覚悟を決め、Tさんに身を任せた。

帰国後もTさんは毎日必ず電話をしてきた。愛の言葉で彼女を幸せで一杯にしてくれた。そしてTさん帰国後1ヶ月、晴れてアナリサも日本を目指す機上の人となった。

勤務地は大阪。都会だと聞いていたのに、お店はかなりの山中で、行き返りに通る桜並木がとてもきれいだった。Tさんは、九州という別の島に在住・在勤でかなり遠いことがわかった。日本に帰ってからのTさんは仕事がとても忙しいらしかったが、毎日必ず電話を忘れず、いつも変わらぬ愛の言葉で彼女を満たしてくれた。6月には大阪に来て、一緒にUFJスタジオに行く約束もしていた。それが約束直前の5月下旬。突然の手入れですべてがキャンセルになってしまったのだ。

★毎月の送金

「がっかりしないで。いつも愛してるよ」

強制送還の後、Tさんはますますやさしくなった。ほとんどお金がないまま帰国したアナリサに対して彼女の家族を含めた人生設計の提案と、経済支援を惜しまなかった。

「もし日本にエンターテイナーに戻って来られるにしろ、だめにしろ日本語に磨きをかけておいた方がいいよ。エンターテイナーがダメでも、将来僕の奥さんになって日本に来た時も日本語ができれば看護師として日本で働くことができ、相当な収入になる。もし、日本に来られなくても、フィリピンの日系企業に勤める時も強力な武器になるから」

と言って、Tさんは強くアナリサに日本語学校通いを勧め、「学校選びは君に任せるよ」とすぐに5万ペソを送ってくれた。さらにTさんはアナリサが生活に困らないように毎月日本円で5万円分をペソ立てで送金することも約束してくれた。彼女は電話帳や自分の足で歩いて日本語学校を探し、帰国した翌月の2005年6月には開講直後の基礎クラスにすぐに入学した。また、約束どおりその月を皮切りに、毎月決まった日に彼女の口座にTさんからの送金が入るようになって、日々の生活にはまったく困らなくなった。彼の期待にこたえるように一生懸命勉強しなければ、と日本語学習意欲は当然盛り上がった。

友だち時代には、Tさんは小額のチップやショッピングのデートの時に小額のアクセサリなどを買ってくれることはあったが、これだけまとまった額のお金を出してくれることはなかったし、彼女自身そんなことは望んでいなかった。もし経済支援の話があ

っても辞退していたと言う。しかし、将来を誓い合った今、アナリサは T さんの自分への投資を愛情の表現だと感じ、受けた恩は一生彼を愛し続けることで返そうと思っていた。さらに T さんは、いかにも将来設計に抜かりのない日本人らしく、アナリサの両親が漠然と頭の中に抱いていた美容室と簡易食堂のプランを聞き、開業資金を試算してくれた。

「お母さんがやりたがっている美容室の開業資金が 50 万ペソで、簡易食堂は 5 万ペソで始められるよ。美容室の開業資金はすぐには出せないけど、簡易食堂の方は、すぐにお金を送ろうか?」とも言ってくれたが、これ以上彼の行為に甘えるわけには行かないと思い、ありがたい申し出を辞退した。

日本での仕事の忙しい最中にも、彼は 2 泊 3 日のスケジュールで毎月アナリサに会いにフィリピンに来てくれた。1 ヶ月に 3 回来てくれたこともあった。こうした日本人の恋人によるお金と知恵と心の全面支援により、アナリサは心にゆとりを持って将来に備えて自分の能力を磨くことに専念できたのである。今の自分の境遇について彼女は、

「自分は本当に恵まれている。恵まれすぎかもしれない。すべて彼のおかげだわ」

と言った。しかし、僕はまだ結論を出すのは早過ぎると思った。

日本語学校が 2006 年の 4 月に終了すると、今度は彼女の長年の夢を実現するために看護学校過程を終了しなければならない。ここでも T は気前よく、一年分の学費 5 万ペソを一括で送金してくれた。「スポンサーのいるコは恵まれているなあ」と思った。5 万ペソといえば、フィリピンでは 4 年制大学新卒の平均初任給 1 万ペソの 5 カ月分だ。

スポンサーのいるタレントの優雅な生活（アナリサ第 7 回）

★小さいながらも素敵な我が家

マクドナルドの店内が込み合って騒がしくなってきた。続きはタギッグ市の彼女たちの家で聞かせてもらうことにした。そして、マクドナルドやアナリサの通う日本語学校などの入ったモールからジープでひと乗り、マカティ市とタギッグ市の境目にあたる新興住宅地の中にある彼女たちのアパートに向かった。渋滞のない道路をジープは風を切ってぶっ飛ばし、15 分ほど、やがて眼前にマーケット・マーケットという巨大なショッピング・モールが現われた。こんなところにも新しいモールがと、僕は驚いた。なぜならこの界隈は、ほんの数年前まで無人地帯で、地図上もマカティ市とタギッグ市の境界線の入っていない、いわばどうでもいい経済的価値のない場所だったからだ。この巨大モール前で降りて、

向こう側のブロックに渡ったところに彼女たちの小さなお城があった。

全体がパステルグリーンに塗られたこぎれいなアパートで、彼女たちの部屋は2階、ドアを開けると、パステルグリーンの床がピカピカと光沢を放つ7畳ほどの広さのワンルームに、キッチンがついているだけのシンプルな作りの空間が広がった。テレビはもちろん、冷蔵庫に電気炊飯器、洗濯機、電子レンジ、トースター、キッチンテーブルなど十分な家電製品や家具が整っていた。テレビ台の中のキャビネットには海賊版のCDやVCD、宇多田ヒカルやミスター・チルドレン、kiroroなど、フィリピーナがお気に入りの日本人アーティストのCDもたくさんあった。カーテンで仕切られた部屋の隅の寝室には、2段ベッドと衣装キャビネットが置かれていて、限られたスペースを無駄なく活用している。

「ねえ、見て見て」

カーテンで仕切られた寝室から14歳の高校2年生、アナリサの妹のアナベルが籠を持って出てきた。飼っているハムスターが3匹の赤ん坊を生んだらしくて大はしゃぎだ。

はしゃぎまわるアナベルにアナリサは、

「おもちゃじゃないのよ。光を当てないようにして部屋の隅にそっと置いておきなさい」と言った。アナベルは、生まれたばかりの赤ちゃんをじっくり見たくて仕方ないようだったが、お姉さんの言いつけにしぶしぶ従って、ハムスターの家を元の場所に返しに行った。

炊き立てのご飯に魚に肉に野菜にカップヌードルなど、食べ物はふんだんにあった。「スポンサーのいるタレントは暮らしぶりが違うなあ」と僕は以前インタビューしたローナの家とアナリサたちの暮らしぶりを比べて心の中でつぶやいていた。アナリサたちは毎日午後1時と午後7時半の1日2回、食事をしている。1日3回食べないのはタレントらしくいつもセクシーでいるために自主的にダイエットしていると言う。「食べられないのと、食べられるのにあえて食べないのとは全然違うよなあ」僕はまた心の中でつぶやいた。

★「僕」の意見

僕は危うく忘れかかっていたことを思い出した。彼女たちの本当の顔、看護学校生姿を見せてもらわなければ。

「アナリサもサンディーも6月から看護学校生なんだよね。君たちの制服姿の写真があったら見せてほしいんだけど、ここにある？」

二人は待ってましたとばかりに手に手にアルバムを持って見せてくれた。

真新しいアルバムの中に制服姿の写真を何枚か見つけた。真っ白な長袖のプルオーバーのトップに、プリーツの入った真っ白なひざ下 20 cmはあろうかというロングスカート。二人とも白衣の天使という称号がふさわしい清楚な出で立ちで、純粋な田舎の娘さんという雰囲気があふれ出ている。アルバムの中には、店でのショットもたくさんあった。メイクをほどこして前髪を額の左右からひと筋ずつたらしめたアナリサは可憐であり、僕は、初めて彼女にあった時のゾクゾクするようなときめきを思い出した。ほんの2年ほど前の写真の中ではサンディーもまだ無垢な看護学校生であった。

気になるのは、アナリサと日本人恋人 T さんの将来である。僕は思い切って、二人の将来について自分が思うことを率直に話した。

「世界的に有名な超一流企業に勤めていて、妻子もある社員が離婚することは大変なことだと思うんだ。と言うのは、今の奥さんと作った家族が壊れることはもちろん、T さんは社内的な信用を失って、これからの昇進にも大きくマイナスになることは間違いない。だから、彼が離婚するということは出世をあきらめることで一大決心が必要だ」

アナリサは神妙な面持ちで僕の話に聞き入っている。僕は続けた。

「君の心の中には彼しかいないかもしれないが、彼の心の中には、君と奥さんと会社の3つがある。あっそうだ。子供もいたね。現実的に考えると、奥さんと会社を捨てて君を選ぶ可能性はとても低いと思うんだけど、君はどう思う」

「その通りかもしれないわね。実は彼、以前は『絶対奥さんと別れる』と会う度に言っていたのに、この前の電話で『やっぱり別れるのは難しいかもしれない』なんて言い出したの。そんな言葉を聞いたのは初めてでショックだったわ。どうしよう？」

彼女はいくぶん狼狽気味に救いを求めるような目で問いかけてきた。

「彼にとって君はやはりさみしさしのぎの相手に過ぎなかったんだと思うな。一時は本気で君を愛したかもしれない。でも日本に帰ってから、自分が離婚したら自分の人生がどうなるかを冷静に考えたんだよ。普通の日本の会社員なら、あの超一流企業に勤めていたら、海外駐在中に知り合った女の子のために会社のすべてを捨てるはずがない。日本の企業の駐在員でフィリピン人女性と付き合っただけで日本の妻とは別れるなんて言ってフィリピン女性に期待を持たせる日本人男性はたくさんいるけど、本当に日本の奥さんと別れたという話はほとんど聞いたことがないんだ」

彼女はうつむいてすすり泣いていた。そして声を振り絞るように言った。

「やっぱりダメなのかなあ。でも日本人ってみんなそんなにうそつきなの？」

フィリピンでの日本人駐在員たちの多くの行状を見聞きするにつけ、僕は返す言葉をなくした。胸が痛かった。僕が言葉を失っているうち彼女は自分で結論を出した。

「彼ね、来月にプライベートと仕事を兼ねてこっちに1ヶ月間来るんだって、それではっきりいつ奥さんと別れるって言う約束をしなかったら彼のことあきらめるわ」

「それがいいかもしれないね」

僕は、すべてを捧げた外国人との初恋で彼女の傷が少しでも小さくてすむように祈るばかりだった。

勝ち組なのか？ 負け組なのか？（アナリサ第8回・最終回）

★したたかな割り切り方

「ほらね。言ったでしょ。妻子持ちに本気で惚れたらダメって。スポンサーだと思えばいいのよ。私はパパには恋人の振りをしているけど、もしお金をくれなくなったら『愛してる』なんて絶対言わないよ」

親友のサンディーが話に割り込んできた。いつの間にかうまそうにタバコをくゆらせている。吸い方もなかなか年季が入っている。アナリサよりはるかに仕事上手に見えるサンディーはネグロス島出身の22歳で、マニラで看護学校過程を3年まで済ませている。アナリサよりも本物の看護婦に近い場所にいる。ただ、お尻の上部に刺青を入れていたり、男出入りが激しいといううわさといい、清純なフィリピンの看護婦のイメージとは程遠い。性格的にはシャキシャキしていて、自己主張も強いタイプの女性だ。完全なアメリカ志向で、看護婦の資格を取ったら、すぐアメリカにわたって看護婦になり、家族を助けたいと思っている。今日のメインはアナリサだから、サンディーのインタビューはほとんど形だけでさっと済ませたのだが、彼女にもパパと呼んでいるスポンサーがいるらしい。どんな風に交際して、どんな支援を引き出しているのか興味があるので聞いてみた。

「パパは、観光旅行でマニラに来た時にお店に来たお客さんなの。本当の名前は何回聞いても覚えられないから、パパって呼んでるわ。70歳過ぎのおじいちゃんなんだけど、一目ぼれされちゃったみたい。毎月フィリピンに来て、マニラにいる間は毎日お店に同伴してくれて、あちこちで買い物して、帰る時もおこづかいを毎回1万ペソくらい置いてってくれるの。愛していないからクーヤが考

えるような特別な関係はないわよ。でも一緒にいる時『パパ、大好き、愛してる』って言うのと喜んじゃって。『女房と離婚してお前と一緒にになりたい』って言うから『うれしいわ』って言うんだけど、パパは奥さんと別れないまんま。もう2年の付き合いになるわね。でももし奥さんと本当に別れたとしてもパパを愛していないから、『知らないわ、勝手にして』って言って逃げちゃうけどね」

と言って、サンディーは大声で笑った。僕は苦笑するしかなかった。

「それに君にはグワーポ(男前)の彼氏がいるんだろう」と僕はかまをかけてみた。

「お店にくる常連客で私に気がある人がいるのよね。グワーポなんだけど、パロパロ(浮気もの)だって言ううわさで、しばらく様子を見て見るつもり。でもパパは捨てがたいわ」

「なんで？ 愛していないし、おじいちゃんだし、タイプじゃないって言わなかったっけ？」

「その通りよ。でも毎月5万円、送ってくれるんだから。スポンサーは大事にしなくちゃ」

サンディーは悪びれることなく語り大声で笑った。色ボケパパに聞かせてあげたかった。どんな気がするだろうか？ 白衣の天子サンディーの腹は相当黒そうだった。同じようにカモられている同邦男性がたくさんいることを思いつつ、こういうかわいい悪魔に気をつけないと、と僕は思った。

日本人男性から同額の月5万円の支援を受ける2人に対する僕の気持ちは全然違っていた。プロの水商売人サンディーには嫌悪感を、偶然そういう状況になったアナリサに対しては共感を感じた。この感情はあまりに短絡的に過ぎるだろうか？ いずれにしろ、カモられている被害者の日本人と加害者のフィリピン人、そして無垢なフィリピーナをもてあそんでいる加害者の日本人と傷つけられた被害者のフィリピン人という、2つの正反対の事例を僕は同時に見せ付けられ、複雑な心境だった。

アナリサのすすり泣きは止まらない。僕の言葉が深くショックを与えてしまったようだ。サンディーの高笑いとアナリサのすすり泣きの狭間で僕は何とも言えない居心地の悪さを感じていた。

★抜かりなく見えた将来設計のほろ苦い結末？

日本語学校生は実は日本帰りのエンターテイナーであり、看護学校生であり、カラオケ・ガールでもあった。月5万円の仕送りに加えて、学費の全面支援、そんな生活の心配のない中で、当面は、日本でのエンターテイナーへのカムバックが第一志望、磨きかけた日本語力を生かして日系企業への就職もよし、本来の夢、

看護師として日本でもアメリカでも働くのもよし、というように彼女の将来は、どう転んでもまったく心配のないバラ色の未来に見えた。

しかしその基盤は、結局妻子ある日本人の恋人のいつ途切れるかわからない経済支援だった。それがわかって、僕は本来の夢に向かったの前向きな転身について始めは素直に喜んでいたので少しがっかりした。

日本人妻との離婚をためらい始めた彼がアナリサへの支援をやめた時、彼女はすべての経済基盤を失う。

万が一、Tさんが奥さんと別れてアナリサを選んだとしても、日本側の家族が壊れる。どっちにしろ誰かが傷つく。

Tさんがアナリサを現地妻に仕立てようとしたらどうなるのだろうか？ 彼女は経済的にはゆとりのあるままだが、女性としての人生はゆがんだものになり、いつか別れの時がやって来る。彼女が負う心の傷は一生涯消えないだろう。

泣き止まない彼女に愛人云々の話はできなかった。アナリサは一人の元エンターテイナーとしてタレントとして勝ち組なのか負け組なのか僕にはわからない。アナリサに罪はない。たまたますべてを捧げて初めて本気で愛した相手が、単身赴任の妻子持ちの日本人駐在員だったただけだ。

「頑張ってね。彼への思いは引きずらない方がいいと思うよ。期限を決めてその時が来たらスッとあきらめた方がいい。フィリピンでは言うだろう。『ふさわしい伴侶は探すものではなく、神様が適切な時期に適切な人を授けてくれるの待つんだって』」

余計な世話は承知の上で僕は自分の心からの思いを伝えた。もちろん結論は2人で出す問題だ。彼女も損得を考えてサンディーのような現実的な決断をするかもしれない。純粹に愛した彼女が少しでも傷を深めないよう、心から祈りながら僕はアパートを後にした。

「ありがとうクーヤ」

背中越しにアナリサの声が追いかけて来る。僕は振り返って手を振った。彼女は何か吹っ切れたかのように表情は明るかった。西の空に太陽が沈んでいく。街をオレンジ色に染めながら。マニラ湾では今はさぞかし夕日がきれいだろうなと僕は思った。

(アナリサの章・終わり)

フレンドリーなウェイトレス (シエラ第1回)

★出し抜きのプロポーズ？

「ねえクーヤ、私と結婚してくれない？」

唐突なシェラの言葉に僕はストローですすっていたマンゴシェークを思わず吹き出しそうになった。

「冗談じゃないの。本気よ。イミテーションでいいから、お願い!!」

なんだ！　そういうことだったのか。入管によるエンターテイナーの入国規制が厳しくなって偽装結婚の申請が激増しているとは聞いていたが、インタビューの場でこれだけあからさまに偽装結婚の夫役を頼まれるとは思ってもいなかった。

「何かおかしいこといった?」

シェラは僕の戸惑いなど、どこ吹く風である。彼女としては日本にエンターテイナーとして従来のルートで行くのが難しくなったから、それに代わる手段としてごく自然に偽装結婚を思いつき、身近にいる人のよさそうな日本人に手当たり次第声をかけているのに過ぎないのだ。

シェラは思ったことを考えずにすぐに口に出すタイプ。ある意味ではとても正直で率直な性格だ。考えてみれば、これだけ偽装結婚と思しきケースが激増している中で、今までのインタビューで偽装結婚の話があまり出なかったことが不思議なくらいだ。

彼女たちは、答えたくないことや都合の悪い話になると、はぐらかしたりうそをついたりしていたはずだ。ほとんどの元エンターテイナーたちをインタビューした時は、お互いに初対面か2回目の顔合わせである。彼女たちも最低限自分を取り繕い、偽装結婚の希望があっても自ら話題にすることは避けてきたに違いない。実際、僕が「偽装結婚は考えないの?」と水を向けると「いい人がいればぜひお願いしたいわ。あなた、夫になってくれない?」と話にのって来るケースは多々あった。もちろんこの『いい人』とは、あと腐れなく淡々と名目上の夫役を静かに果たし、契約が切れたらすっと彼女の人生から跡形もなく消えて行ってくれる日本人男性のことだ。

偽装結婚とは文字通り、日本人の妻として日本に滞在する資格を得るために書類の上だけで日本人男性と婚姻関係を交わすものであり、2005年3月15日の法務省令の改正でフィリピン人エンターテイナーの入国が急激に絞り込まれてから激増しており、事情通の話では買い切り150万円、300万円などと言うのが相場になっているらしい。買い切り150万円と言うのは、日本人男性とフィリピン人女性の2年間の偽装結婚契約である。フィリピン人女性は頭金30万円を支払い、婚姻関係に入ってから、名目上の夫に毎月5万円を支払う。したがって $30 \text{ 万円} + 5 \text{ 万円} \times 24 = 150 \text{ 万円}$ となるわけである。

買い切り300万と言うのはほぼ同様の4年間の偽装婚姻契約である。名目上の夫は自分の妻としての地位を与える代わりにこれだ

けの報酬を得、一方フィリピン人女性としては、これだけの支払いの代償として、日本人の妻として何の制約もなく自由に日本のパブやスナックなどで働いて稼ぐ権利を手に入れると言うわけである。偽装結婚を仲介する業者の暗躍もよく知られているところだ。僕が頭の中でそんなことを考えていると、シエラが追い討ちをかけてきた。

「偽装結婚にはヤクザが絡んでいる場合も多いって聞いているし、クーヤならまじめでやさしそうだからといい思うんだけどなあ」

シエラはすごく真剣な視線でじっと僕を目をまっすぐ見つめてきた。ちょっと待ってくれよ。そっちはよくてもこっちは一応花の(?)独身。近いうちに意中のフィリピーナと愛情あふれた結婚をしたいと思っている。そこははっきりさせておかなければならない。

「僕は独身だけど、彼女がいてもうすぐ結婚する予定なんで残念だけど、君の申し出には協力できないなあ」

「なーんだ。そうなんだ。残念だわ」

彼女は心底残念がっているようだが、何とか納得してくれた。

彼女の申し出をいなしながら、『どちらがインタビューしているのかわからない。とんだ幕開けになってしまったなあ』と思いながら、僕は苦笑していた。

しかし、やさしくてまじめそうと評されてまんざらでもない気分でもあった。ただ、僕は次の瞬間、シエラの彼氏の反応が気になってすぐに隣の席を見た。彼氏はおとなしく平然として僕らのやり取りに黙って耳を傾けていた。

★彼氏同席のインタビュー

そう、今回はインタビュー相手の彼氏が同席するという異例の事態になってしまったのだ。

シエラとは、マニラ市のエルミタ地区、別名ツーリストベルトとも呼ばれる外国人観光客の多い場所にある日本レストランで、ウェイトレスとして勤務中に知り合った。

在比日本人の知人から、同地区の某レストランでは日本帰り組がたくさん働いているらしいという情報をもらって出かけてみたところ、そのレストランで働くウェイトレスの過半数が元ジャパユキだったのだ。中でもシエラはテキパキとした動きで職場によく順応し、いつも笑顔を絶やさずフレンドリーで話もしやすかった。黒くてまん丸な瞳と健康的な褐色の肌が印象的な清楚なイメージの女性だ。

来日回数は7回、最後の来日も2005年の1月、現在次の来日を待っているが、カラオケよりも少しきちんとした仕事として、待

機中のアルバイトとして日本レストランのウェイトレスを選んだという。なるほど、たしかにカラオケとは違って指名や同伴もなければ、酔っ払いの機嫌を取ったりすることもない。同じ接客業でもウェイトレスの方がきちんとした仕事だと言える。そして、もう1年3ヶ月も来日を待つ彼女もまた入管法改正の犠牲者と言って間違いないだろう。

ジャパニーズ・カラオケとは一味違った元エンターテイナーの新しい人生の一例としてインタビューを申し入れたところ、二つ返事でOKしてくれたというわけだ。

やりにくいインタビュー（シエラ第2回）

★嫉妬深いボーイフレンド？

インタビューは彼女と出会った2日後の午後7時に、マニラ湾沿いを縦走するロハス大通りに面したアリストクラットレストランに決まった。当日、約束の時間に遅れることちょうど1時間、ここまではフィリピンの常識。想定内の出来事だ。マニラ湾の夕日を眺めるため午後6時前には到着していた僕の携帯が鳴って、彼女を迎えにレストランの入り口に出向いた。しかし彼女が現われた時、僕は愕然。Tシャツにジーンズ姿の彼女は右手にタバコ、左手には明らかに彼氏らしき20代前半の男性と仲良く手をつないで登場したのである。シエラはレストランで働いている時とはまったく別人のようにスレた感じの水商売の女性に変身していた。その分だけ彼らの後ろに遠慮がちに連れ添って来た妹のミルナの可憐さが余計に際立っていた。女性というのは本当にTPOによってこうも変わるものなんだなと改めて思った。

友だちや兄弟・いとかなど女性の連れを伴ってやってくることは想定内である。しかしまさかボーイフレンド同伴とは！今日のインタビューはやりにくくなるぞと僕は覚悟した。

インタビューの中では、タレント時代の日本人男性との恋の話、今もかつてのお客さんと連絡を取り合ったり、デートしているかなど、かなり踏み込んだ話も聞くので、フィリピーナに負けず劣らずやきもち焼きのフィリピン人ボーイフレンドの嫉妬や怒りがインタビュー中に爆発したり、またシエラが彼氏に気を遣って肝心なことを話してくれなくなってしまうのではないかと心配したからだ。

幸い彼氏は物静かでシエラには似つかわしくないような育ちのよさを感じさせる22歳の中国系の若者だった。僕は彼にインタビューの趣旨を説明し、彼女の過去の男性遍歴も話題になるかもしれないけれども、決してやきもちを焼いたり、怒ったりしないでじっと耐えてくれるように重ねて頼んだ。

フィリピン人エンターテイナーには女ざかりの女性が多い。それだけに本国にフィリピン人の彼氏がいる場合も非常に多い。彼らは恋人同士ながら、6ヶ月の彼女の日本でのお勤め期間には逢瀬はかなわない。だからこそ、こうしたフィリピン人カップルは、たまっていた愛のエネルギーをぶちまけ合うかのように、彼女の次回の来日までの短い待機の間、盛りのついた猫のように激しく愛し合う。その結果、往々にして妊娠してしまってせっかく決まっていた来日の機会を棒に振ってしまう場合も多い。わかっているでも勢いでそうになってしまうのはとてもよくわかる。僕自身、頭の中ではよくわかっているはずのそんなことが、今回の来比で非常なリアリティを持って実感できた。僕がそんなことを考えていると不意に彼氏は言った。

「大丈夫です、クーヤ。心配しないで下さい。僕は今の彼女を愛しています。その昔彼女がどこの誰と何があってもかまいません。邪魔にならないようにしますから。僕のことは気にしないでインタビューしてください」

この彼氏、なかなかできた人物だな、と僕は少しほっとした。

「クーヤ、この人のことは気にしなくていいのよ。どうしてもってしつこく頼むもんだから彼氏にしてやったのよ。生意気なこと言ったらたたき出してやるから。彼がいなくなったら私には日本人のパパがいるんだから。あんたおとなしくしてなさいよ。わかった?」

シエラが姉さんカップルの本領発揮で一発かます。

「わかってるよ」

すっかり尻にしかれっぱなしの気弱な感じの6つ年下の彼氏は、力なく苦笑しながらこう言葉を返すのがやっとだった。

「このフィリピン人カップルは、万が一うまく行って夫婦になったとしても彼は一生すごく苦勞するぞ!」と僕は心の中でつぶやいた。

ともかくインタビューはつつがなく始まった。

★今の暮らし

「日本行きねえ。最後の帰国からしばらくはジリジリして待ってたけど、今は期待しないで待っているっていう感じね。たぶんタレントとして日本に戻るのはダメじゃないかなあと思うの。もう、まともな方法では行かないんじゃないかしら。だから第一希望は偽装結婚で、第二希望がエンターテイナーとして日本に戻る。どっちもダメなら……その時は何とかするわ」

そう答える彼女の言葉にはゆとりが感じられた。そのゆとりの理由を後に僕は知ることになる。

シエラは 6 人兄弟の 2 番目としてマニラ南東約 200 キロのケソン州の田舎町に生まれ育った。両親には定職がなく、いつも小さい時はお腹をすかしていたこと、親戚の間をたらいまわしにされた記憶が残っている。親戚の家ではおじさんやおばさんに邪魔者扱いされたり、時には折かんなどの虐待を受けたこともあったようだ。それでも彼女は親戚に育ててもらった恩を忘れてはいなかった。

「おじさんやおばさんにはいろいろ世話になったから恩返ししないといけないの」

と言う彼女の感謝の深さは、日本で稼いだお金でまず、両親に家を買ってあげたのを皮切りに、世話になったおじさんやおばさんに次々と延べ 6 カ所もの土地を買い与えていることからよくわかる。

専門学校の 2 年コースを卒業すると、来日経験のある友だちの影響で 1997 年に 18 歳でプロモーション入り。芸人としての資格は、踊りがダメだから一応歌手ということになった。以後 1998 年の初来日以降、ほぼ 1 年に 1 回という比較的ゆったりしたペースで来日している。通常のタレントは、フィリピンに帰国したらなるべく間を空けずに再来日を望むものだ。実際、そこそこの容姿を持ち、客あしらいのできるタレントは、数週間から 2 ヶ月程度で再来日する場合が多かった。しかしシエラは 1 度帰国すると最低 5 ヶ月以上は次の来日までの間隔を取っている。お店から 1 日も早く戻ってきてほしいというリクエストがあってもだ。それは彼女が家族や親戚との時間を大切にしてきたかららしい。まず両親の住む田舎に帰ってお父さんとファミリービジネスについてじっくり話し合い、自分なりに納得のいくところまで準備してから次の来日に備えていたと言う。

現在の 1 ヶ月の収入は、レストランでの日給が 340 ペソとなかなか高いため、月 15 日勤務に過ぎないにもかかわらず、チップとあわせて約 6,000 ペソ。妹と他の仲間と 2 人の計 4 人で家賃 5,000 ペソの部屋の部屋に住み、1 日 2 食、時には気のおけない仲間と飲んでカラオケに興じたり、小額の買い物を楽しむ余裕もあると言う。

子供もいない。家賃の負担は軽い。それに自分たちが最低限暮らしていくのに困らないくらいの稼ぎもある。両親にはゆとりのあるときだけ仕送りしていると言う。それにしても家賃を除いて交通費を除けば月々自由になるのは 3,000 ペソほどだ。僕はシエラのゆとりのわけが気にかかっていた。

「金の亡者」か「シンプルな暮らし」か？（シエラ第3回）

★壮大な夢

「私はシンプルな暮らしなんてもう飽き飽き。日本での仕事とお給料に慣れてしまったから、もう昔の貧乏暮らしはごめんだわ。私ね、最後の来日では月給 2,000 ドルもらってたのよ。フィリピンにいたらそんな金額は絶対稼げないわ。だから日本に行かなきゃいけないの。私は大金持ちになりたいの。家族がたくさんのビジネスをいくつも持っていて、ドカーンと大きな邸宅に住んで、車は何台もあって、ドライバーやメイドが何十人もいて……」

彼女の壮大な夢を聞きながら、僕は始め強い嫌悪感を持った。

一瞬、「ありがとう。君の話は十分聞かせてもらった。ありがとう」と言って、謝礼の 500 ペソを 2 人分渡して席を立とうかと思ったほどだ。

日本に夢をかけた元エンターテイナーたちは、僕が知る限りでは、ほとんどが金の亡者ではない。まず両親や兄弟が飢えることなく暮らす程度の生活ができることを願い、それがかなってから自分自身の幸せ探しを始める女性がほとんどだ。彼女たちにとっての幸せとは、一人の女性として普通に結婚して子供を生んで、1 日 3 食して、基本的な衣食住が満たされるような家族生活を手に入れるといったシンプルなものだ。多くのフィリピーナはそれだけで十分幸せを感じることができるよう育てられている。

しかしシエラの夢は、典型的なシンプルなフィリピーナとの幸福感とは大分かけ離れたものだった。

『シンプルな暮らし』を尊しとする多くのフィリピーナの話聞き慣れてきた僕にとってシエラの価値観は受け入れがたく思えた。フィリピン語には『ムクハン・ペーラ』と言う表現がある。『守銭奴』『金の亡者』という意味だ。僕にとってその時のシエラは『ムクハン・ペーラ』以外の何者でもないように見えて、汚らわしいとさえ思ってしまったのだ。

でも僕は思いとどまった。フィリピン人は日本人以上に本音と建前を使い分ける傾向がある。お金が嫌いな人なんて例外的な存在だろう。むしろ金持ちになりたいと正々堂々と言える方が正直ではないか、と思い直し、彼女の大金持ちへの道のシナリオに耳を傾けてみようと思い直したのだ。また、小さい頃から親戚をたらいまわしにされ、それだけ貧しさと愛情のない生活に長いこと耐えてきたのだろうとも思った。彼女の『拝金主義』に対する嫌悪感は一瞬のうちにある種の共感と好奇心に変わった。それは彼女がある意味真っ正直なのとその夢が限りなく漫画チックだったからでもある。

「どこまでも私のファミリーの土地で、車で 1 時間走ってもまだ私

の土地なの……」

こんな夢は、日本人でもせまい土地の小さな家に住んできた誰もが抱く夢ではないだろうか？ これは納得できる。僕もそんな気持ちを抱いたことがある。それにしても自動車で1時間走ってもまだ自分の土地ということは、土地の一辺のどれかが70～80kmはあるということになる。ということは何百、いや何千 km^2 の土地の持ち主になりたいと言うのだろうか？ アキノ元大統領の農園でも64 km^2 に過ぎない(?)のである。シェラの夢は壮大と言うより単なる妄想としか思えない。そんな僕の思いをよそに彼女は、夢の続きを延々と語り続ける。

「自宅内の移動だけでなく、遠くに行く時には自家用ヘリもほしいわね。いずれはジェット機も……」

ここまで来ると、ちょっとついて行けない。僕は笑うしかなかった。

「金持ちになんてなりたくない」というフィリピーナが多い中で彼女の本音一辺倒の言葉は僕にとって非常に正直で新鮮に響いていた。

金持ちになる皮算用（シェラ第4回）

★失敗また失敗のファミリービジネス

それだけ壮大な夢を実現するためにはとてつもない大金が必要だ。大金を生み出すためにシェラとそのパートナーのお父さんが手がけてきたファミリービジネスの足跡をざっと見てみよう。

「今まで一度も利益が出たことがないの」

シェラは自分たちのファミリービジネスをまずきわめてわかりやすく総括してくれた。

お金の勘定や算数は苦手という彼女が、事業意欲だけは満々のお父さんと取り組んできたファミリービジネスはまず、2002年に20万ペソを投じて始めたサリサリストア(雑貨店)だった。繁盛してはいたものの、ご近所さんからの付け払いの依頼を断りきれず、代金の未回収が多すぎて一年で閉店。

2003年には、地元の海沿いに30万ペソを投じてミニリゾート開発に着手して海辺にコテージが何棟か完成した直後、台風による大雨が原因の地すべりにあってリゾートはあっけなく泥に飲み込まれてしまう。

2004年には乗客用三輪バイクであるトライシクルのメンテナンスショップ、KTVと呼ばれるカラオケレストランの経営、乗客用バン3台の貸し出しといろいろと仕掛けるが、すべて損ばかり。現在残っているのは、貸し出し用のバン1台だけだと言う。

これは絶対、計画がおかしいか、シェラとお父さんの性格が商売

に向いていないと思わざるを得ない。

一番最初に手がけたサリサリの場合、付け払いは極力許さず、少々シビアに取り立てるといった、ある程度の非情さが必要だ。ただ、非情になりすぎると近所づきあいがギクシャクしてくるので、そのさじ加減が難しい。それで失敗してしまったと言うのはまだ納得できる。ただそれ以外のビジネスは、投資と利益計算をほとんどまったくしていないのではないかとしか考えようがなかった。僕のような素人でもわかりやすいところを聞いてみた。

「バンはいくらで買って、1日いくらで貸してるの？」

「正確にはわからないけど、多分中古を 50 万ペソくらいで買って…… 1 日いくらで貸しているかは……そう言えば今はわからないわ。お父さんがみんなわかってるはずだけど」

何のことはない。投資額も粗利益もシエラは何も把握していない。どんぶり勘定のお父さんの道楽商売に漠然と夢を託しているだけなのではないか、と僕は思った。

「今まではいつでも最後は損ばかりで……」

そう語るシエラ表情はとても楽しそうで、最後は成功することを心から信じているようでもあった。それが何の根拠もないフィリピン人特有の楽観主義であったとしても。シエラは大金持ちになる夢を見て努力を続ける過程に喜びを見出しているようで、利益が出るかでないかは実はそんなに重要でないようにも思えた。

恋人がスポンサーへ降格される時（シエラ第 5 回）

★うそがバレたワケ

7 回に及ぶ来日経験で、日本人の彼氏がいなかったということはあるにない。僕は隣におとなしく座っている彼氏に気遣いながら、シエラに日本人との恋愛経験について聞いてみた。

「日本に行く度に必ず私に本気で入れあげてくるお客さんがいたわね。でも私が本気で好きになったのは 2 回目の来日の時に知り合った彼だけね」

「2 回目って言うと 1999 年からの付き合いでもう 7 年も前の話になるけど、まさかもう付き合いはないよね？」

「いえ、まだずっと続いてるわ。でも今は恋人からスポンサーに格下げしたけどね」

彼女はちょっと顔をしかめながら言った。

恋人からスポンサーへの格下げ？ 僕がシエラの言葉の意味がわからずに考え込んでいると、彼女はすぐに説明してくれた。

「彼は出会った時は 40 歳、今は 47 歳。独身だって言ってたのに、奥さんがいるってことが最近わかったの。彼がうそをついてたことが許せなかったのよ。だから彼は私の恋人じゃなくてただ

のスポンサーだって割り切ったのよ。それで私もフィリピン人の恋人を作ったの」

なるほど、経済的支援もしてくれていた恋人に妻がいることがわかって、ただのスポンサーとして利用しようと方針転換をしたということらしい。しかしシエラの日本人の恋人が7年隠し通せた『実は奥さんがいる』という秘密がなぜバレたのか興味がある。僕が尋ねるまでもなく、彼女が自ら語ってくれた。

「それがね。今年になってからのことなんだけど、私の友だちが働いているお店に偶然彼が遊びにきたの。それを私の友だちがすぐ見つけたのよ。それで『指名してくれないとあなたがいろんなお店で遊び歩いてるってシエラに言いつけるわよ』って言ったら、彼は『それは勘弁してくれよ』って言って私の友だちを指名したんだって。それで懐かしさもあってか彼はベロンベロンに酔っ払ったらしいのよ。そして『俺、実は結婚してるんだ。シエラには内緒だぜ』って言ったんだって」

この日本人男性、フィリピーナのロコミネットワークの威力をつい忘れてしまったようだ。それにこの日本人男性、とんだ指名損をしたものだとは僕はニヤニヤしながらも同情した。

「そうか、それで奥さんがいることがわかったんだ。それでもずっと関係が続いているっていうのはすごいね。彼に対する今の気持ちは?」

「だまされたとわかっててもまだ少しは愛してるわ。愛情 20%、憎しみ 80%っていう感じかしら。出会ってからずっと、私が日本にいてもフィリピンにいても毎月5万円欠かさずにくれるし、スポンサーとして大切な人であることには間違いないわ。独身を名乗っていた時は『いつか結婚するよ』って言ってたし、妻子持ちとわかってからは『いつか妻と別れてお前と一緒にになる』とか言ってるけど、信じてないわ。彼は本当に浮気者でうそつきだってわかったから。だから今はスポンサーとしてキープしておきたいの。新しいビジネス資金もすべて彼から送られてくるものだし、私の最後の切札、介護士資格が取れたのも彼のアドバイスで介護士養成学校に通ったからなのよ。もちろん学費3万ペソは全額彼が出してくれたわ。それからね。私がカラオケでなく、レストランでウェイトレスとして働いているのも彼のためなのよ」

「彼のためっていうと?」

「カラオケだといろんな男に言い寄られて危ないから、もう少しきちんとした場所で仕事してくれないかって頼むのよ。レストランなんかどうだって言うからあの日本レストランで働き始めたの」

なるほど、日本レストランで働いていたのも日本人の彼氏のためだったのか!

スポンサーと恋人（シエラ第6回）

それにしても彼女の微妙なさじ加減には恐れ入る。しかし、『うそにはうそ』ということで、彼女は日本人の恋人を演じ、彼の望む通り日本レストランで働き、言うことを聞いているような顔をして毎月の援助を引き出し、その一方でフィリピン人の彼氏を作り、そのことは日本人の彼氏には内緒にしている。彼女もなかなかしたたか者だ。自分を傷つけた彼はスポンサーに降格という論法も妙に僕は納得してしまった。

それにしてもまたしても日本人スポンサーか？ いったい何千人、いや何万人の日本人がフィリピン人女性に個人的 ODA を実施しているのだろうか？ やはりスポンサーのいる元エンターテイナーはゆとりが違う。シエラにしても、本人がまともに働いて稼いでいる月給の4倍もの大金を毎月送ってきてくれるのだから。シエラの余裕も結局、日本人の彼（いや降格されてスポンサーと言うべきか）からの仕送りに支えられたものだったのだ。

日本人の彼も、よくもまあシエラのために大金をつぎ込んでいるものだと思う。彼女の来日中のパブへの支払い。月5万円、7年間という直接経済支援。積立預金でもしていたらちょっとした額になる。利子を考えなくても日本円で420万円。マニラなら豪華マンション1世帯分が購入でき、地方なら家が2～3軒は建ってしまう金額だ。それに加えて1年に3回は渡比して、その時は普通の恋人のように濃密に愛し合うと言う。当然その時はおこづかいをおいていくことも忘れない。

「彼は7年間も私をだましていたんだから、私が彼に内緒でフィリピン人の恋人を作って彼をスポンサーに格下げするくらい当たり前でしょう。クーヤはどう思う？」

「いや、まったく君の言うとおりでしょ」

僕は急なシエラの問いに、心にもないことを言って同調してしまった。本当はどっちもどっちだな、思っていたのだが、インタビューをスムーズに進めるには彼女の機嫌を損ねない方が得策だと思ったからだ。

気の毒なのは、だしに使われているとしか思えないフィリピン人の彼だ。シエラに恋人として認められてから1ヶ月だという彼は、まだ日本人の彼とは面識はない。日本人の彼が今度来比した時には、シエラのいとことか弟とでも紹介され、行動を共にさせられるのだろうか？

「クーヤ、よくわかってるじゃない。そうするつもりよ」

僕が冗談でシエラに鎌をかけてみたらこともなげに彼女は言い放った。これもシエラなりの復讐の一部に違いなかった。いそこ、

兄弟として紹介された人物が実は恋人だったり、旦那だったりというのはフィリピンではよくある話。僕は改めて怖いなと思った。

シエラはフィリピン人の彼氏にはどこかで埋め合わせするのだろうが、いっとうやってするのか、興味はあったが本人を隣にしてそこまで聞くことはできなかった。

しとやかな妹（シエラ第7回）

★またしても妻子持ち

シエラと同じレストランで働く6人兄弟の4番目の妹ミルナは今年25歳だが、年齢よりずっと若く見える。10代でも十分通る。いつでもお姉さんの言いなりで、シエラとは似ても似つかないシャイな性格。言葉遣いもていねいだ。2000年、看護学校の2年コースを終わった後、シエラの強い誘いでプロモーション入りして2002年と2005年の2度エンターテイナーとして来日している。

「お父さんとお姉さんを手伝いたいです。でも私はシンプルな生活で十分。お金持ちになりたいとは思いません。今付き合っている日本人の彼氏と結婚したいです。彼は私の人生で初めての恋人です。私には彼だけで十分です」

と照れるようにうつむきながら語った。

「日本にもう行かれなくなったら?」

という質問には

「今は彼が毎月3万円、送ってくれてるから、生活の心配はまったくありません。でもいつまでも彼に頼っているわけにも行かないから早くきちんとした仕事を始めたいです。もう何ヶ月か待って望みがなさそうなら、日本行きはあきらめて看護学校を終えて看護婦になることに専念します。近いうちに看護師として日本で仕事できるかもしれないですから。日本がダメでもアメリカなら看護師や介護士を斡旋している親戚がいるから確実です」

と語ってくれた。ミルナはお姉さんと違って絵に描いた餅を追いかけてはいない。現実的なプランを持っている。彼女の将来は大丈夫だと僕は思った。ただ、お姉さんたちのビジネスごっこに巻き込まるとあぶない。堅実でシンプルな彼女がお姉さんたちのゲームに巻き込まれないとことを祈るばかりだが、怖いお姉さんを目の前にしてそんなことは言えなかった。

ミルナが日本人の彼氏に送金させているのは案の定、姉のシエラの入れ知恵だった。生活が苦しいからと言って彼氏に仕送りをさせるよう仕向けていたのだった。僕はミルナの彼氏について気になることをはっきりさせておきたかった。

「君の彼氏は独身? 奥さんや子供はいるの?」

「ええ、年齢は55歳で奥さんも子供もいるけど、いつか別れて私

と結婚してくれるって」

またしても妻子持ち！ しかしミルナは彼の言葉をうのみにしてしまっている。

同邦への裏切りかもしれないと思いながらもいつものおせっかい焼きの癖が出て僕はつい言ってしまった。

「ミルナ、彼の言葉は信じない方がいいと思うよ。僕もフィリピンパブで遊ぶ日本人男性をたくさん見てきた。奥さんのいる日本人男性でフィリピン人のタレントと結婚するために『奥さんと別れるから』と言う人は星の数ほどいたよ。でも実際に日本人の奥さんと別れてフィリピン人のタレントと結婚した人は数えるほどしか知らないんだ。彼のことは本当に慎重に考えた方がいいと思うよ」

「やっぱりそうなのかもしれないわね。お姉さんのこともあるし。でも何で日本人てみんなうそつきなんだろう」

ミルナはうつむいた。

「いやそれは違うよ。日本人がみんなうそつきなんていうことは断じてないよ。フィリピンにも日本にもいい人もいれば悪い人もいる。正直な人もいればうそつきもいる。それはフィリピンも日本も同じだと思うよ」

日本人はみんなうそつきと言われては黙っていられず、ちょっときつい口調で言ってしまった。

「ごめんなさい、クーヤ。気を悪くしないで」

ミルナは僕の突然の反論にびっくりとおどおどした様子だった。

「いやいやそんなに気にしなくていいんだよ」

僕はミルナが萎縮しないようにとりなそうとしている時、シエラが乱暴なことを言った。

「あなた、男なんてたくさんいるんだから、そんな日本人忘れちゃえばいいのよ。スポンサーとしてだけキープしておけばいいのよ」

確かに心にもない結婚話を餌にミルナのようなまだ純粋なフィリピーナをだますのは悪い。しかし、スポンサーに仕立てるようにけしかけるシエラにはやはり怒りを禁じえなかった。対照的な性格の姉妹とシエラのボーイフレンドとの間に挟まって僕はなんとも奇妙な気分だった。

次のステップ（シエラ第8回/最終回）

★挑戦し続ける姉妹の夢

結局、姉妹が7年もかかって稼いだお金はほとんどゼロになってしまった。しかし、シエラはめげない。

「めげてる暇なんてないわ。またはじめからやり直せばいいんだ

から」

と笑顔で語る彼女の前向きな気持ちは買える。ただ彼女の頭の中には失敗に学んで同じ過ちを繰り返さないようにしようという意識が根本的に欠けている。余計なお世話なのだが、その点をちょっと指摘した。彼女はもっともだとうなずいていたが、僕の言葉がどこまで届いたのかはわからない。しかしそれ以上に、成否は関係なく、挑戦し続けることがこの姉妹にとっての幸せなのかもしれない。

お金を使い果たして、夢をかけた挑戦が終わっても、彼女たちには生きる術が残されている。日本行きの道が立たれても、シエラには介護士として外国に出稼ぎに行く道があるし、ミルナはあと2年頑張って看護学校を終えて国家試験を通れば、アメリカなど海外でドカンと稼ぐ道が開けてくる。

二人は人生の次なるステップに向けて着実に歩み始めている。すっかり打ち解けた僕らは再会を誓ってアリストクラット前で別れた。僕はすぐに振り返って彼らを見た。シエラは早速右手にタバコ、左手に彼氏の手をしっかりと握りしめ、頭を彼の肩に預けるようにしてゆっくりと歩いていた。その後ろを遠慮がちに見るミルナがついていく様子はどこかこっけいだが幸福感が漂っていた。彼らは人生がどう転んでもハッピーなのだろう。僕はトコトン前向きに人生を楽しむ術を生まれつき身につけているシエラがうらやましかった。と同時に彼女たちから幸せのエッセンスを分けてもらったような気がした。

マニラ湾沿いをかける風が心地よい午後10時過ぎ。ロハス大通り沿いは色とりどりにライトアップされ、ベイ・ウォークと新たな名前をもらって素敵な散歩道に変貌している。僕は海風に背中を感じながらベイ・ウォークを通して家路へに向かって歩いてみようと思い立った。北へ10キロほどの道のり。2～3時間もすればたどり着くだろう。疲れたら途中でジープニーにでもタクシーにでも乗ればいい。こんな気持ちになったのも、気持ちよい夜風とマニラの危険な夜までも快適な散歩道のように思わせてしまう新名所ベイ・ウォークの魔力かもしれない。

援交カフェとビリヤード

連載登場の4人目は、マニラ・エルミタ地区の援交カフェで働くジャネット（23歳／来日経験1回、歌手）です。

★出会い

「クーヤ(お兄さん)お待たせ」

スタッフ用の着替え室から出てきたジャネットを見て一瞬目を

疑った。

ほんの数分前まで、へそ出しの白いセクシーなセーラー服を見にまとしてダンサブルな曲に合わせて扇情的に腰をくねらせて踊り、時には世界各国から集まった男性客の求めに応じてビリヤードの相手をし、華麗なキューさばきで次々と対戦相手をねじ伏せてきた彼女が、こざっぱりした私服姿で僕の前に登場した。

真っ白いTシャツと、ボーイッシュなサイドポケットの着いたベージュのチノパン、瞳の奥に焼きついているセクシーなセーラー服姿のハスラーのイメージとのギャップにちょっと戸惑ったのだ。

彼女との出会いは偶然だった。

援交カフェとして世界的に有名な LA カフェに出入りする元ジャパユキの姿を追って毎日通いつめ、なかなかターゲットに遭遇できなかった時、すぐ近くに似たような援交カフェ A を見つけ、たまたま足を踏み入れた。

アマゾンのジャングルイメージした薄暗い A の店内では、ディスクミュージックにあわせて、カウンター席の中のお立ち台で、ステージで、通路で、はたまた 2 階に通じる階段でもウェイトレスたちが踊りまくっている。そのかわらでは男性客の求めに応じてビリヤードに興じるウェイトレスもいる。僕は女の子たちを連れ出すことのできるゴーゴーバーに迷い込んでしまったのかと思った。

「タノンコ ラン。プウェーデ バ カヨン イテイクアウト?(ちょっと聞きたいんだけど、君たちを連れ出すことはできるの)?」

僕は近くの踊っていないウェイトレスに確認のため聞いてみた。

「ヒンディ ポ プウェーデ、サー(お客様、それはできないんです)」

と彼女は淡々と答えた。きっと連れ出しできるゴーゴーバーと勘違いする客が多いのだろう。彼女はさらに説明してくれた。

「私たちウェイトレスはダンサーでもあり、ビリヤードのお相手もします。でも私たちを連れ出すことはできない決まりになっています。一夜のパートナーをお望みのお客様にはその手の女性も自由に出入りしていますからご紹介しますよ」

「は一、そうなんだ。ありがとう」と答えながら、

「不思議な場所だ。面白い店を見つけたぞ」

と僕は思った。

ここにも援交のパートナーを捜し求める女の子たちはいたが、LA カフェに比べれば格段に数が少なかった。インタビューのターゲット探しで疲れ果てていた僕は、ここではひたすらくつろぎたかった。

「いっしょに楽しみましょ」

などと言い寄ってくる援交志願の女の子たちには

「君といっしょに楽しみたいけど、そんなことしたら彼女に殺されちゃうよ。彼女はすごい焼きもちやきだから。まだ死にたくないんだ。だから勘弁してよ」

などと適当にいなしながら、僕はウェイトレスたちとの取りとめのないおしゃべりと、踊り、当時覚えてたてだったビリヤードを楽しみながらサンミゲール・ライトをラッパ飲みして安らいだ雰囲気浸っていた。

マニラ市のエルミタ地区にある LA カフェは、プロの売春婦はもとより、セミプロやアルバイト感覚のまだ初々しい女の子に至るまで幅広いバリエーションの売春婦たちが数多く出入りする援交カフェとして、世界中のスケベ男たちにその名が知れ渡っている。

それだけに丸いカウンターのある入り口付近のスペースと 1 階の奥のスペース、2 階のライブスペース、2 階奥のスペース、大きく 4 つに分かれる出会いのカフェは、1 夜だけのパートナー、あるいは 1 夜の客を求める男とたちと女たちの駆け引きの場そのもので、脂っこくてギラギラしたむせ返るような熱気が立ち込め、僕には決して心地よい場所ではなかった。

だからこそ、LA カフェに取材に行ったあとは、インタビュー相手探しにつながる収穫のあった日もなかった日も、気分をリフレッシュすることが必要だった。それでウェイトレスが踊ってビリヤードのお相手もしてくれるもうひとつの援交カフェ A に通うのが日課のようになっていた。ここのウェイトレスは、みなフレンドリーで楽しい話し相手だった。みんなそこそこビリヤードのたしなみもある。

この援交カフェ A で最初に親しくなったのは、新人ウェイトレスのジョアンナとメアリーだった。二人ともミンダナオ島北東部の田舎町の出身で、素朴な田舎のフィリピーナの魅力にあふれた女の子たちだった。ビリヤードの腕も僕といい勝負。LA 帰りの僕は、この店に入るとまずこの 2 人を探した。

見つけるとたわいもない会話を交わしながら、客の少ない 2 階のビリヤード台でギャーギャー騒ぎながら、ついてもついても入らないお遊びビリヤードを楽しんで、夜 11 時から翌朝 7 時までの彼女たちの勤務時間に丸々付き合っただけで徹夜してしまうことも珍しくなかった。

それだけこの援交カフェでの時間は僕の取材活動にひとときの憩いとやすらぎを与えてくれていた。ジョアンナとメアリーには「再来日できなくなった元ジャパユキたちの現在の生き様を取材

している」という今回のフィリピン滞在の目的は話してはいたが、まさかそういう人物を紹介してくれるとは思ってもいなかった。

初めての対戦（ジャネット第2回）

★エイトボール？ ナインボール？

マニラでは例年5月から10月、年によっては11月くらいまで長い雨季が続く。この時期はほとんど毎日のようにスコールが降る。空のどこかが必ずとっていいほど曇っていて、晴れていてもにわかにかき曇り、突然雨が降り出すのだ。だから雨季の外出時には傘が必携品。その上、度重なる台風もある。こうなるともうお手上げだ。水はけの悪い地域、海拔の低い土地に住む人々にとってはいつも洪水の恐怖と隣り合わせの不安な日々の連続でもある。また急なげや山間部では地すべりの被害も頻発し、そのつど大きな被害が出ている。ある日、僕は傘を持って出るのを忘れた。夜11時過ぎ LA カフェでの取材を終えて一歩外に出ると、大雨だった。そこからAまで100mランナーのようにダッシュ、駆け込むようにAの扉を開けると、すぐにジョアンナとメアリーが近づいてきた。軽くハイとあいさつをすると、

「クーヤ、この店で働いている日本帰りのウェイトレスが今出勤しているから紹介するわ」と言ってくれた。僕はにわかにかき胸が躍った。2階の僕の指定席に座ってそのウェイトレスを待った。ただぬか喜びは禁物。確かに日本帰りはLAカフェを始めあちこちの援交カフェにたくさんいる。でも、最後の来日が5年も6年も前という今回の取材の主旨から外れた、いわば賞味期限切れの人物である場合が多かったからだ。

期待と不安が交錯する。そして運命のご対面。ジョアンナがユニフォーム姿の一人のウェイトレスを連れてきた。

「去年日本から帰ったばかりのジャネットよ」

去年日本から？ ピッタシ！ ストライクゾーンだ。やった！僕は小躍りして喜んだ。

振り返ると、中肉中背でこれといって特別な華のない、ごく普通の女性がそこにいた。地味だが実直で意志の強さを感じさせる風貌だった。

「オハヨウ ボクワ ハクノデス」

僕は心持ちゆっくりしたテンポのはっきりした発音の日本語でジャネットにあいさつした。

時刻は午前12時を少し回ったばかり、フィリピンでは12時過ぎればあいさつはオハヨウなのだ。

「オハヨウ クーヤ マズ ビリヤード シマセンカ？」

とジャネットはすぐ日本語でビリヤードに誘ってきた。彼女は

よっぽどビリヤード好きのようだ。

「シュアー(もちろん喜んで)」

今すぐにもインタビューを始めたいところだが、僕もビリヤードを始めたばかりでプレイしたくてうずうずしている状態。それにまずはジャネットと親交を深めておこうと思い、彼女の誘いを快く受けたというわけだ。

店の中でまた、ダンサブルな音楽が流れ始めた。ジョアンナとメアリーは

「じゃクーヤ、私たちは踊ってくるから」と言って、ステージに足早に消えた。

「ジョアンナ、メアリー、ありがとう」という言葉とともに僕は二人を見送った。

このカフェのウェイトレスはいくつかのチームに分かれており、時間帯によってどのチームが踊るか決まっていることがすぐわかった。

さあ、楽しくビリヤードといきたいところだが、今日はいつものお遊びビリヤードとは勝手が違う。客の多い1階のビリヤード台でのゲーム。まわりにはかなりの腕前のアメリカ人・オーストラリア人・アラブ人・韓国人・中国人の見物人がたくさんいる。

「これだけの見物人の中で経験1ヶ月の初心者がプレイするなんて!」

僕は恥ずかしさを押さえ込むのに懸命だった。本来、シャイな性格で、自信のないことを人前で披露するなんて絶対いやな性分だ。しかし内気な性格は取材活動の大きな敵。上級者たちの前だろうがもうどうにでもなれ、と腹をくくった。そんな僕の心の葛藤にお構いなく、

「エイトボール? それともナインボール?」

ジャネットは代表的なビリヤード種目のどちらがいいか尋ねてきた。

「ナインボールで頼むよ」

僕はもう冷や汗をかいていた。どちらがいいかと聞かれてもナインボールしかやったことがないのだから。

ビリヤードのボールには、白い手玉と言われる玉のほかに15個の玉がある。エイトボールは、白い玉と15番までの番号のついた玉のすべてを使い、ブレイクショットと呼ばれる最初のショットに始まり、最初に自分がポケットに落とした番号の玉のグループが自分のサイドの玉となり、これらをまず落とすことになる。1～7番はソリッド、9～15番はストライプと呼ばれる。自分の落とすサイドの玉をすべて落とし、最後に8番をポケットすれば勝ちだ。最後に8番を落とすことを除くと、自分のサイドの玉を落とす順番

はどうでもかまわない。

一方ナインボールは1～9番の9つの玉を使い、ブレイクショットに始まり、1番から順にポケットに落としていき、最後の9番を落としたプレイヤーの勝ちとなる。いずれにしろビリヤードは、正確なキューの突き出し、白い玉と当てて落とす玉の角度、さらに相手に打ちづらくさせる作戦などが重要な頭脳のスポーツでもある。

フィリピンは世界有数のビリヤード大国であり、オリンピックやアジア大会、世界選手権などで数々のチャンピオンを輩出してきた。エフレン・レイエスやブスタマンテなど超一流プレイヤーの名前を知らないフィリピン人はまずいない。スラムのど真ん中からとんでもない田舎の山奥までフィリピン全国にビリヤード台がある。ビリヤードはまさにフィリピンの国民的スポーツのひとつなのである。フィリピン人と親交を深めたいと思っている人はぜひ嗜んでおいて損のないスポーツだ。

こんなお国柄だからこそ、ビリヤードなどまったく無縁に見える普通の地味な女子大生やOLにもすごい実力者がたくさんいる

日本からの帰国と就職（ジャネット第3回）

★キンシチョウ デ シゴト シテマシタ

さあ、ジャネットのブレイクショットでゲーム開始。三角形にきれいに並んだ15個の玉に彼女の美しく力強いフォームから突き出された白い玉が当たり、パンという歯切れのよい音とともに文字通り見事にブレイク。15個の玉はきれいにビリヤード台全体に散らばったかと思うと早速3個の玉がポケットに吸い込まれていった。彼女は自分のサイドの玉を次々とポケットに落とし、オープニングゲームはあっさり敗北。このゲームでは僕は2回しかつことができなかった。それから客が急にひいていったので僕らは延々とゲームを続けた。彼女はゲーム中ほとんど無駄口をたたかず、勝負は真剣そのもので、初心者の僕相手にまったく手加減してくれなかった。1ゲーム25ペソ。30ゲームほどやっただろうか。ついに1ゲームも勝てないまま夜が明けた。他のウェイトレスにあとから聞いた話では、ジャネットはウェイトレス経験1年に過ぎないのだが、店では誰もが認めるNo.1プレイヤーだと言う。

「悪い相手に当っちゃったな。初心者なんだから手加減してくれてもいいのになあ」

と僕はつぶやいていた。負けに負けた。初心者と言えども悔しかった。

勝負を終えてジャネットが言った。

「クーヤ、元エンターテイナーの今の暮らしに興味があるって本

当?」

「うん、うん、うん」

僕がちょっと上ずった声で答えると彼女はきれいな日本語で話した。

「ワタシ キョネンマデ トウキョウ ノ キンシチョウ デ シゴト シテマシタ」

僕は少なからず興奮していた。彼女がかつてフィリピンパブの聖地とも言われた東京の錦糸町で働いていたとは!

元ジャパユキの身の振り方には援交カフェのウェイトレスという生き方もあったんだな、と僕は思い出した。そして彼女への興味はますます高まった。LA カフェのウェイトレスにも元ジャパユキがいることは知っていた。でも僕を避けているかのように彼女たちに巡り会うことはできなかった。

なかなかかどらない人探しの最中に『援交カフェウェイトレス』の肩書きを持つ元ジャパユキに思いもかけず巡り会ったのだ。僕は事情を説明し、すぐに彼女に快諾をもらい、初対面の翌日、彼女の勤務終了直後にインタビューとなったわけだ。思いもよらぬ収穫に僕はかなり興奮していた。

★帰国してから～切羽詰ってすぐ就職

「考えてる間なんてなかったの」

ジャネットは話し始めるとすぐにポーチからタバコを取り出し、手馴れた様子で火をつけプカプカふかしながら話し始めた。

「去年の4月に日本から帰った時は、給料が残っているなんてもんじゃなくて、帰るとさっそく借金が待ってたの。ファーストタイマーだったから日本での給料は月々 550 米ドルと安かったし、衣装代を始め、フィリピンを出発する前にもうプロモーションに借金があったの。さらに悪いことに来日中にお母さんが乳がんの手術を受けることになって 1,500 米ドル借金したの。もうこれで私の 1 回目の給料はなくなるどころかマイナスになっちゃってプロモーションに借金が残ったわ。でも日本で仕事できたおかげでお母さんの手術代が払えたんだから本当によかったと思ってるわ」

2004 年の 10 月から 2005 年の 4 月まで、初めての日本でのエンターテイナーとしての仕事を終えて、なぜ就職場所として援交カフェのウェイトレスを選んだのか尋ねた時、ジャネットは開口一番で一気にこう答えた。

「多くのジャパユキ経験者が、次の来日までの待機中にジャパニーズ・カラオケに就職するのに、何でこのお店を選んだの? こういう店で働いていると安っぽい女だと思われるんじゃない?」

僕は彼女の機嫌をそこねるのではないかと恐れながらも率直に

聞いてみた。

「家に帰ると、もうその日の食事をするお金すらなかったのよ。それで帰国した翌日、昔のプロモーションの友だちに誘われるままにいっしょについて行ったの。そのまま面接を受けてこのお店に入ったの。本当なら日本から帰ったら少しは休みたいところだったけど、面接に行ったその日からさっそくここで仕事を始めて 1 年ちょっと経ったところなの」

豊かな生活を求めて日本から帰ったものの、家族の大病で帰国するとその日から食費もなく、借金も待っていて切羽詰ってすぐそこにある仕事に飛びついたということらしい。

「それからね。私日本では一応シンガーだったんだけど踊りが大好き、それにビリヤードも大好きだったから、この仕事がすぐ気に入ったのよ。ジャパニーズカラオケよりよっぽど自分に向いていると思うのよ」

なるほど、彼女の仕事ぶりからもこれは納得だった。確かに踊り好き、ビリヤード大好きの女の子にはこの異色のカフェでの仕事は楽しめるものかもしれない。

両親を支える一人娘（ジャネット第 4 回）

★今の暮らし

「日本にいる頃から、もう今度は日本に戻ってこられないんじゃないかって仕事仲間とよく話してたの。クーヤも知ってると思うけど、私の働いている時も錦糸町ではしょっちゅう警察の手入れがあって、その度にどんどん閉店する店が増えて、私たちエンターテイナーの状況がどんどんきびしくなっていくのを肌で感じてたから。今の仕事も好きだけど、稼ぎのことを考えるとやっぱり日本でまた仕事したいわ。今すぐにでもよ。でも現実はきびしいわ。アロヨも私たちのことなんかなんとも思っていないみたいだし」

彼女の今後のライフプランや再来日への見込みについて尋ねた時、彼女はこう答えた。

自国のエンターテイナーを切り捨てたしょせん良家のお嬢様でしかないアロヨ大統領に対するジャパユキたちの憎しみは相当強いものがあると改めて感じた。

「今の日給は 180 ペソでチップを含めて稼ぎは全部で 1 日平均 240 ペソくらい。ここのお客さんは気前のいい人が多いからチップが大きいのよね。月収は大体 6,000 ペソくらい。決して多くはないけど、人とおしゃべりするウェイトレスという仕事にダンスにビリヤード。私の好きなことばかりだから全然苦にならないわ。小さ

いけど自分たちの家もあるし、家のまわりで自給用に鶏を買ったり、野菜を作ったりして家族がつつましく暮らしていくにはほとんど問題のない生活を何とか送れてるわ。

ただお母さんの病気の時にトライシクルを売っちゃったから、ドライバーだったお父さんは、自給用の養鶏と野菜作りじゃ飽き足りないみたいで、『また運転したいなあって』寂しそうに口癖のように言ってるの。何とか貯金してまた買ってあげたい。お母さんにもあまり体の負担にならないサリサリ(雑貨店)をプレゼントしてあげたいんだけど……それにお母さんはもともとからだが弱いし、お父さんも最近高血圧で誰かが病院に入るようなことになったら今の平和の生活はあっという間に終わりになっちゃうわ。だからお父さんとお母さんにビジネスの機会を作ってあげたいのと、いざという時のために貯金もしておきたいからぜひまた日本に行きたいの」

お父さんにはトライシクルをお母さんにはサリサリストアを、と家族を思う孝行娘の話に僕は共感を感じながら、大きくうなずきながら聞き入っていた。

★家族を養うために

ジャネットが家族にとりわけ強い愛を感じているのは、その生い立ちによるところが大きいかもしれない。彼女は工場労働者の父と専業主婦の母のもとで 1982 年マニラ首都圏の北隣のブラカン州に生まれた。フィリピンでは非常に珍しい一人っ子だった。お母さんは体が弱く、お医者さんから 2 人目以降の出産をしようとするなら命の保証はできないと言われたらしい。そして両親は 2 人目以降の子供をあきらめ、熱い愛情をジャネット一人に注いできたのだ。それだけにジャネットの両親に対する感謝の念も愛情もいっそう強いものになったのだろう。

父親は 1997 年、20 年来勤めていた工場から突然解雇通告を受け、貯金と退職金を合わせて 6 万ペソでトライシクルの新車を購入。地元でトライシクルのドライバーとして第 2 の人生をスタートさせた。トライシクルドライバーの家庭の暮らしは大変つましいが、特に一家に事故でもない限り、1 日 3 食できる特に不自由のない暮らしだった。

しかし 2000 年、一家に最初の転機が訪れた。お母さんが最初の乳がんになり、手術費の捻出のためにお父さんはトライシクルを売却。それでも足りずに親戚中から借金して何とか手術費用を調達。お母さんは左乳房を摘出したものの、健康を取り戻した。お母さんが大病する前年に高校を卒業していたジャネットは大学に進学していく友人をうらやましく思いながら、一時グレて不良仲

間に入ってブラブラしていた。背中に刺青を入れたり、タバコをすい始めたのもこの頃だ。しかしお母さんの病気を契機に心機一転、家族を養っていくために、そして親戚への借金を返すために、お母さんの手術の直後に友人から紹介されてプロモーションに入り、エンターテイナーとして日本行きを目指すことになる。歌手としてのトレーニングをかねてマカティの KTV(カラオケレストラン)で7ヶ月間働いたものの、すぐには来日のチャンスは訪れなかった。彼女は少しでも日給のよい仕事を追って、マグノリアのアイスクリームの新製品やチョコレート・アルコール類などのキャンペーンガールの仕事、コンピューター部品工場の仕事などいくつかの仕事を転々とした。時には1日に2つ以上の仕事を抱えて頑張った。そしてようやく最初の日本行きのチャンスが訪れたのは2004年の9月だった。プロモーションに所属してからすでに4年の歳月が流れていた。

★楽しかった日本

「日本での仕事は楽しかったわ。それも来日してすぐに出会ったTのおかげよ。最後まで謎だったんだけど、彼は多分プロモーターだったと思うわ。片言のタガログ語と英語が話せたし、普通の会社勤めの人には見えなかったから。それに私たちの契約関係のこととか派遣のシステムとかやたらと詳しかったの」

日本での仕事についての僕の質問に対してジャネットのこんな答えが返ってきた。開口一番に日本での仕事が楽しかったと言い切るタレントはまずいないので、彼女の言葉は非常に新鮮に耳に響いたのだ。

恋人との間の「壁」(ジャネット第5回)

★日本人の彼氏の秘密

「でも君が日本で働いていた時期は、法律がきびしくなる直前だから同伴がなかったり、お店の外でお客さんと会ってはいけないとかすごくきびしいルールがたくさんあったんじゃない?」

錦糸町がエンターテイナーの取り締まり重点地区として狙い撃ちにされていたことはよく聞いていただけに、彼女の日本でのきびしい労働環境を察して聞いてみた。しかし、彼女の答えは意外なものだった。

「それがね。私のお店は同伴もあったし、お店のスタッフがする寮への抜き打ちチェックも全然きびしくなくて、私たちはかなり自由だったの。来日してすぐTと出会って、Tは毎日のように私を同伴してくれたの。私は日本語がほとんどできなかったけど、彼がタガログ語と英語が片言だけどできたおかげでお互いかなり

よく分かり合えた。やさしくて楽しい人で私はすぐTが好きになっちゃって、知り合って1ヶ月もしないうちに午前3時過ぎに仕事が終わると、すぐ彼のマンションに直行するようになったの。彼のおかげでホームシックに悩まされることもなかったわ」

彼女の方から転がり込んできてくれるとは何ともうらやましい話だと思った。

「それで彼とは」

僕が言いかけると、ジャネットは古きよき時代を振り返るようににこやかに遠くを見つめながら語った。

「一緒に行くところと言えばパチンコ。彼はプロフェッショナルよ。行くとたびにいつも勝つの。最高10万円稼いだのを見たわ。私もちょっとやらせてもらったけど全然ダメ。でも彼の隣で見てるだけでも楽しかった。日本ではパチンコで生計を立てている人がいるって彼が言ってたけどよく納得できたわ。食事と言えば吉野家の牛丼屋か焼肉屋さん。私が彼の家でフィリピン料理を作ることもよくあったわ」

「彼とは相当深い関係だったんだね。結婚話とかは出なかったの？」

話の流れで彼女に聞いてみた。

「彼とは気持ちは深く結ばれていたと思うわ。でも彼、体に問題があって……」

彼女が突然口ごもった。てっきりTさんが身体障害者なのかと思い、僕は先走って言った。

「そうか身体に障害があったんだね。でもそれが愛の障害になっちゃうのか。残念だね」

「クーヤ違うのよ。身体に障害があるんじゃないくて……身体に障害があるんじゃないくて……」

彼女はまた口ごもってしまった。と思ったら今度は恥ずかしそうにクスクス笑い出した。僕はわけがわからなかった。

「どうしちゃったの？ 大丈夫かい、ジャネット？」

「大丈夫、大丈夫」といいながら彼女の笑いはなかなか収まらない。しばらくして笑いが収まると、彼女は顔を真っ赤にして気を取り直していった。

「実はTはインポテンツだったの」

あー、そうだったのか？ 身体の障害ではないが、これは男性、いや愛し合うカップルにとっては深刻な問題だ。でも人前で口にするには大分勇気がいる。まして女性ならなおさらだろう。話しぶらいことを話して、ひとつの壁を越えたジャネットは彼との愛について再び饒舌に語ってくれた。

「Tと知り合って2ヶ月くらい。毎日仕事帰りには彼のマンションに一人で行って一緒に眠るの。抱きしめ合ってキスをして、体中

を愛撫されて……でも彼は最後の一步手前まで行くとずっと矛を収めるの。『それじゃ寝ようか』って言って背中を向けて寝ちゃうの。私は、ちょっと変わった人だけこの人なら結婚してもいいかなあとか考えてたから、いつ深い関係になってもいいと思ってたのよ。じゃなきゃ一人暮らしの彼のマンションに一人で行ったりなんか絶対しないわ。だから彼が途中でやめてしまうのは理解できなかったし、中途半端で欲求不満が高じて行ったわ」

それだけ心構えのできたフィリピーナにとって、Tさんの行動は真実を知らなければやはり奇妙だと思わずにはいられないだろう。ジャネットは物怖じしないタイプに見えた。このあと彼女がとった行動が僕には予想がついた。果たして僕の予想通りの言葉をジャネットの口から聞くことになる。

「それでね。ある日、我慢できなくなって彼に言ったの。『あなたなんで途中でやめちゃうの？ 私はあなたが好きよ。あなたも私を愛してると思ってた。私の体に魅力がないから？ それともあなたオカマなの？』ってね。今思うと本当にひどいこと言っちゃったと思うわ」

僕はTさんの反応にすごく興味があった。

「彼はね。ベッドの上できちんと座りなおして。『ごめん。俺は男としてはだめなんだ。俺のモノは固くならなんだ。インポテンツってわかるかい？』って。私はそういう病気は話には聞いたことがあったけど、現実には自分の愛する人がそんな病気を患っているなんてにわかに信じられなかったの」

心やさしいジャネットなら多分Tを気遣って本当にダメなのかどうか文字通り身を挺して試してみたに違いない。

「それでTさんとジャネットは本当に彼がダメなのか試してみたんだね」

ジャネットは大きな目をさらに大きく見開いてびっくりしたような顔で言った。

「クーヤなんでわかるの？ クーヤはもしかして占いもできるんじゃない？」

「いや残念ながらそんな才能はないよ。だって君とTさんは愛し合っていたんだから、君が何とかしてあげたいと思い、彼も何とかしたいと思うのはごくごく自然なことだろう」

「ああ、そうね」

ジャネットは納得顔でうなずいた。僕はその2人の実験に興味が沸いてきていた。

つらい別れ（ジャネット第6回）

★愛の実験

「それで二人の愛の実験は？」

ジャネットは恥ずかしそうにうつむきながら、

「クーヤ、話さなきゃダメ？」

と言った。興味はあるが、彼女に苦痛を与えたくなかった。

「ごめんね。君たちの愛の実験にはとても興味があるけど、プライベートな話だし、興味本位で聞いちゃいけないことだったね。

ごめんね。話さなくていいよ」

しかしジャネットは思い直したように言った。

「クーヤが興味あるんだったら話すわ」

「本当にいいのかい？ 人に無理強いするのは自分のモットーに反するんだけど……」

僕は正直、何が何でも聞きたい気持ちを抑えて言った。彼女は再び自らの少し恥ずかしい過去を語り始めた。

「本当にいいのよ。昔の話だから。彼から『インポテンツ』の告白を受けたその夜、私は何とかしてあげたいと思って、考えられる限りの方法で彼の男性自身をいろいろ刺激してあげたの。なんとかなりそうかなあって思うと萎えちゃって……恥ずかしい!! 結局、その日とそれから日も変えて何度もトライしてみたけどやっぱりダメだったの。彼の男性自身は見たところは何も損傷がなかったんだけど」

「彼はお医者さんに見てもらっていないのかなあ」

僕は素朴な疑問を彼女にぶつけた。

「お医者さんに診てもらったらしいわ。ストレスが原因なんだった。そのストレスの原因を取り除けば多分治るはずだって。それでね、『あなたストレスの原因を取り除けばいいじゃない』と言ったら、『そんな簡単な問題じゃないんだよ』ってけんかになっちゃって」

それからずっとセックスレスの深い付き合いは彼女の帰国まで続いた。ジャネットは本当に Tさんを心底愛してしまい、セックスがなくても彼を一生愛せるとも思ったし、子供は養子をもらえばいいとも思い、彼に提案したが、帰国間近、Tさんからショックな別れ話を切り出される。

「ジャネット、今までありがとう。お前が本当に好きだったよ。今まで出会った誰よりお前が好きだったよ。俺のために養子のことを考えてくれたり、いろいろ本気で俺たちの未来のことを考えてくれてありがとう。でもお前はやっぱりもう俺みたいな『男として機能していない男』じゃなくて、健康な男と結婚して幸せになってくれ。これ以上関係を続けても俺たちに明るい未来はないよ。もう別れよう」

ジャネットは彼の言葉を聞きながら涙が止まらなかった。別れ

を切り出す彼も泣いていたと言う。僕はこんな別れもあるのかなあと神妙な気持ちで二人の別れの光景を思い浮かべていた。

「日本での思い出と言えれば後にも先にも彼のことがばっかりね。彼と一緒に冬のディズニーランドに行った時は、今度来るときは彼の奥さんとして一緒に来たいなあ」と夢見たわ」

「そうか。彼のことは残念だったね」

僕は他に彼女にかける言葉が見当たらなかった。

ちょっとしんみりした雰囲気になってしまったので、僕は話題を変えた。錦糸町のローカルな話題を出してみた。妖怪みたいな様相の店主のいるサリサリストア(フィリピン雑貨店)が閉店してしまったこととか、どこそこのフィリピンレストランのフィリピン人ママはすごくケチだとか……

彼女の過去をとことんほじくり返し、とりとめもない話しをしているうちに2時間近く過ぎている。約束の最大1時間半を大幅にオーバーしてしまった。もうインタビューを切り上げなければならない。自分の好きな仕事とはいえ、仕事が終わった後はジャネットもかなり疲れているはずだ。

「ジャネット、今日は仕事の終わった後、疲れているのに長時間話を聞かせてもらってありがとう。最後にもう2つだけ聞かせてもらっていいかなあ」

「もちろん、私もとっても楽しかったわ。聞きたいことがあったらなんでも聞いて。私全然疲れてないから」

僕は彼女のありがたい申し出に甘えることにした。

「始めの質問は、売春についての君の考え方なんだけど」

「これは人それぞれの問題だと思うわ。私自身は愛情のないセックスなんて絶対にいや」

「じゃ店に出入りして売春している女のこのことをどう思う?」

僕はもう一步踏み込んでみた。いやむしろこっちの方が聞きたかったのだ。援交カフェにはいつも身近に売春婦たちが出入りしている。援交カフェのウェイトレスが出入りの売春婦たちをどう見ているのかにすごく興味があった。それで売春している女性としていない女性のメンタリティやモラルの違いを少しでもクリアにしたかった。

「女の子一人一人の問題だから、自分が決断することだと思うわ。でもお金のためなら何でもするっていう態度を非難したい気持ちもあるわ。彼女たちは体だけじゃなくて心も汚れていると思うこともあるわ。でもこのお店はそういう出会いのお店でもあるから売春している子たちとも仲良くやってるだけよ」

やはり売春している女の子と絶対しない子の間には明らかにモラルのギャップがあると思っていたが、彼女の話しを聞いて自分

の仮説が的外れでないことが確信できたような気がした。さあ、最後の質問だ。

彼女が行き着くのはどこ？（ジャネット第7回）

★日本はもう無理

「最後に君の今後の生き方についてなんだけど、これからどうやって生きていくつもりか話してくれる？ このままこのカフェで仕事を続けるか、日本行きを目指すか、それとも他の道を探すか、ということなんだけど」

彼女はちょっと天井を見上げて一瞬思案した後、答えた。

「ライブバンドが入って好きな音楽があふれていて、踊れて、ビリヤードができて……今の仕事、給料は高くないけど、本当に働いていて楽しいの。それで何とか家族3人の生活も成り立ってるから、このお店を続けられる限り続けてもいいと思ってるの。もちろんもっと条件のいい仕事があればそっちに移るけど。日本行きはできるなら行きたいけど、まともな方法でエンターテイナーとして行くのはもう無理だと思うし、偽装結婚するための頭金もないし、そのために借金するのもしやだし。日本行きはもう無理だと思うわ」

なるほど、日本帰り組のある人生のモデルとは、踊って、ビリヤードの相手もする援交カフェのウェイトレスというわけか！ 幸いジャネットの場合、仕事のすべてが自分の趣味と重なっている。この仕事でなくても、日本での生活で悪しき物質主義に染まっていない彼女は、フィリピンでのシンプルな生活に何の違和感もなく戻れている。彼女なら大丈夫だと僕は思った。あとは家族に事故や大病が降りかからないように、そして彼女が素敵な伴侶を見つけて女性として幸せな人生を送れるように祈るのみだ。僕は薄暗いカフェの中でささやかだが明るい未来を垣間見てすがすがしい気分だった。

「ジャネット、今日は本当にありがとう。これからも元気で頑張ってるね。また来年フィリピンに来るけど、またこの店で会えるかな？」

「ええ、よほどことがない限りこの店にいるわ」

さあ、彼女に謝礼の話はしていないのだがやはり他のインタビューに応じてくれた女性たち同様に 500 ペソを渡さなければと思い、ジャネットにさりげなく

「これインタビューのお礼だよ。ありがとう」

と渡そうとしたが、彼女はかたくなに受け取ってくれない。彼女なりのこだわりやプライドがあるのだろうと思い、僕は不本意ながら 500 ペソ札を財布に戻した。

「じゃ、本当にありがとう。また来年、ここで会おうね。ただ、今度ビリヤードをやる時は一度くらい僕に勝たせてね」

「ありがとうクーヤ。楽しかったわ。でも来年あった時に私が負けるかどうかはわからないわ。だって私はゲームが始まると真剣になって人が変わっちゃうんだから」

確かにそのとおりだ。いつもは柔和な彼女の表情がひとたびキューを握ると獲物を狙う野獣の形相に変身してしまうのだから。僕は苦笑いしながらカフェを出ようとした。

★最後のサプライズ

出入り口の扉に手をかけたまさにその時、

「クーヤ、ちょっと待って。話さなきゃいけないことがあるの」

と僕を呼び止める叫ぶような声がしてあわてて僕は振り返った。そこにはバツの悪そうな顔をしたジャネットが立っていた。

「話って何？ 僕は何か君を傷つけるようなことを言ったかな？」

僕は自分がかかなりプライベートなことを聞いてしまったことへの引け目のようなものを急に感じて、彼女から何か叱責や怒りの言葉を浴びせられるのかもしれないと思い、そんな言葉も甘んじて受ける心の準備をしていた。しかし彼女は、照れくさそうな笑顔を浮かべている。戸惑っている僕にジャネットは言った。

「クーヤに秘密にしたことがあるの。静かなさっきのテーブル席に戻って話しましょう」

「そうなのかい？ ああ、喜んで君の秘密の話を聞かせてもらおうよ」

と言いながら、僕は安堵とともに彼女の秘密に対する興味が急速に頭の中に広がっていくのを感じていた。

★主婦へ

「クーヤ、これから言うこと絶対誰にも言わないって約束してくれる？ 2ヶ月間だけでいいの。どう、約束してくれる？ クーヤはいい人だと思うから約束してくれるなら話すわ」

「ああ、約束する。2ヶ月間だけ誰にも言わなければいいんだね？ その後は原稿にしてもいいんだね？」

彼女はうなずいた。

彼女が口止めしてまで語ろうとしている秘密とはどんな秘密なんだろう？ また、ジャネットがタバコを1本取り出してすばやくライターで火をつけ、ひとふかししてから話した。

「私、今妊娠3ヶ月なの」

「えっ、本当？」

このカフェのウェイトレスたちはお腹がプクツとした女の子が

多いのだが、ジャネットの場合はちょっと贅肉がついているだけかと思っていた。確かに少し驚いた。妊娠にも本人が望んだ結果の妊娠と不注意でそうなってしまった後悔を伴う妊娠の2種類がある。彼女の場合はどちらなのか？ 僕はどう聞いたらよいか、考えていると、彼女が続きを話してくれた。

「私、去年の11月にこのお店で知り合った中国人のボーイフレンドがいて、先月妊娠していることに気がついたの。妊娠のことを彼に伝えたらすぐにお店に来てくれて、『結婚しよう』って言ってくれたの。私はすぐにうなずいたわ。それでおととい、彼の両親に紹介されたの。彼のお父さんは貿易会社を営んでいて、彼はその会社を手伝っているの。ビノンド(マニラ市のチャイナタウン)にある彼の家はものすごく立派な家だった。そこで居間みたいなところに通されて『あなたを私の息子の嫁として認めます。これからは私たちの娘として大切にします』って彼のお父さんが言ってくれたの。フィリピン人だからといって私をバカにすることもなく、すごく大事にされてる感じだったわ。彼の兄弟たちも笑顔で『こんにちは』ってタガログ語であいさつしてくれたの」

普通フィリピンに在住する上流階級の中国人はフィリピン人の血を混ぜずに、中国人としての純血を守る一族が多い。しかし、両親が出てきてそこまで言ってくれたからにはジャネットを本気で嫁に迎えるつもりなんではないかと思った。と言うことは……

「そうなの。まだ結婚式の日取りは正式には決まっていないけど、私たち結婚するの。だから私のジャパユキ・ストーリーはもうおしまいなの。秘密って言うより、うそをついちゃったみたいでごめんなさい」

「いいんだよ。そんなこと。それより、話してくれてありがとう。でもなんで2ヶ月だけ秘密にしなきゃいけないの？」

僕は彼女の幸せを自分の幸せのように感じながら尋ねた。

「それはね。私が妊娠してることがお店にばれたらすぐ首になっちゃうからよ。働ける間は、少しでも長く働いてお金をためたいの」

本当に彼女は勤勉だなと思いながら、もうひとつ心に浮かんだ疑問をそのまま彼女にぶつけてみた。

ひとつのハッピーエンド（ジャネット第8回）

★ Tさんからの電話

「彼はお金持ちだよ。何で君はまだ働かなきゃいけないの？」

「だってまだ、私たち結婚してないし、本当の夫婦になるまでは彼の重荷になりたくないの。このお店のユニフォームはみんなへそ出しだからあと2ヶ月もすれば私が妊娠してることは絶対隠し通

せなくなるわ。そうになったらこの仕事をやめるの。とにかく働けるうちは働いて少しでもお金を稼いで貯金するつもりよ。だから2ヶ月だけ秘密にしてって言ったの」

よくできた女性だ。僕はこの瞬間、彼女の人間性に惚れた。僕が彼女の誠実な生き様に感激してちょっとぼーっとしていると、彼女はうれしそうに、しかしお店のほかのスタッフに見られないように周囲に気を配りながら自分のバッグの中から金の婚約指輪を取り出して見せてくれた。金のアクセサリーで有名なオンピン通りで彼に買ってもらったと言う。

彼女のジャパユキ・ストーリーは、母国での中国人男性との結婚という形で幕を下ろそうとしている。中国人の恋人の心変わり、彼の親戚の干渉など、ジャネットとその恋人の結婚はまだ予断を許さないかもしれない。でも、僕は彼女の心からの笑顔を見た時にそんな疑念はすっと消えた。彼女は愛する男性の妻として、また生まれてくる子供の母として女性としての結婚というひとつのゴールに到達しようとしている。運命に翻弄されながらもたどり着いた最後の幸せ。僕は今回の取材でもっとも出会いたかった元エンターテイナーのその後の人生に巡り会うことができて心から幸せだった。

「クーヤ、それからね。Tから昨日たまたま電話があったの」

「えっ、まだTさんと連絡を取り合ってたんだ」

Tさんとジャネットがいまだにコミュニケーションを取り合っていることは驚きだった。

「そうなのよ。Tは時々『元気か?』って電話をかけてきてくれるの。それでね。中国人の恋人ができて、妊娠して婚約したことを報告したの」

「彼の反応は?」

「『そうか』って始めは少しがっかりした様子だったわ。それで『おれがインポじゃなかったらなああって』しみじみ言うの。私はその時は何て言葉を返したらいいかわからなくて2人とも一瞬黙っちゃったの」

僕は電話で彼がしみじみ語ったと言う言葉に笑いをこらえるのに必死だった。自分がもし『男性機能不全』なら大問題だ。笑うなんて不謹慎だし、病気を持った人への重大な侮辱だ、とは思いつつもこみ上げてくる笑いを抑えきれずにいた。

「それからね。Tは『おめでとう。俺もううれしいよ。幸せになれよ。もう日本になんか戻ってくるんじゃないぞ』って言ってくれたわ。私もありがとうって答えて……」

彼女が言いながら突然涙を流した。Tさんと過ごした楽しい日々への決別の涙なのではないかと僕は勝手に推測していた。気がつ

けば、彼女の突然の告白に僕はまだお祝いの言葉も言っていない。一言でもこの自分の喜びを言葉で伝えておかなければ!

「ともかくおめでとう。僕も心からうれしいよ」

「ありがとうクーヤ。クーヤも素敵な彼女を見つけて幸せになってね。うかうかしてるとおじいさんになっちゃって、子供の作れない体になっちゃうわよ」

「あちゃー、痛いところをつかれたなあ」と思いながらも返す言葉もなく、ただ苦笑するばかりだったが、彼女の子供のためにあえて苦言を呈した。

「ジャネット、タバコは生まれてくる子供の健康に害になるからやめた方がいいんじゃない?」

「あっ、そうだったわ。お医者さんからも彼からも言われたの。体に悪いことはわかってるんだけど、17歳の時からの私の唯一のビショ(悪習)だからなかなかやめられなくて……」

と言いながら、彼女は火をつけたばかりの最後の1本をすぐに消した。

僕はひとつのジャパユキ・ストーリーのハッピーエンドに巡り会い、心は快晴だった。

午前2時30分前、折からの台風で外は土砂降りの大雨だったが、すがすがしい気分帰宅の途につくジャネットの後姿を見送った。それから僕も帰ろうと立ち上がって出口に扉の手をかけたその時、あとを追いかけてくる足跡に気がついて振り返ると、お気に入りのビリヤード相手のメアリーが、怒ったような口調で言った。

「長くても1時間半でインタビューが終わるって言ってたのに、2時間半もジャネットと話し込んでちゃって、ものすごく待ってたんだから」

僕はインタビューの終わった後メアリーとビリヤードをやる約束してもいないし、待っててくれと頼んだわけでもないのだが、メアリーは僕らのインタビューが終わった後は、僕が彼女とビリヤードをやるものだ勝手に思い込んでいたようだ。メアリーは心底待ちくたびれている様子だ。僕はちょっと意地悪に

「じゃインタビューが終わったから僕も帰ろうかなあ」

と言ったら、彼女は鬼の形相でつかつか歩み寄ってきて、僕の尻を思い切りつねりあげながら言った。

「クーヤ、もしこのまんま帰ったら私たちもう友だちじゃないからね」

「痛い! 仕方がないなあ。じゃあ、君の相手をするよ」

彼女の仕事時間は10時から朝の7時までだ。今晚も徹夜で彼女とビリヤードをする羽目になりそうだ。外は大雨。おそらく僕のアパートの近くも冠水状態だろう。深夜、大雨の中をずぶぬれに

なって苦労して帰宅するより、気心知れた女友だちとビリヤードで徹夜するのも悪くない。

僕はメアリーとのゲームを前にもう心が躍っていた。

ビールハウスのメッカで人探し

今回から、ビールハウスで働くレイチェル（来日経験1回、21歳）の物語です。

★場末の歓楽街

「クーヤ、遊んでってよ。私が天国に連れて行ってあげるから」

ビールハウスのメッカ、マニラ首都圏南部のパラニャーケ市バクララン地区のエアポートロードという通りで目指すインタビュー相手のいる店を探してキョロキョロしながら歩いていると、Tシャツにショーツ姿の女の子たちに腕をつかまれてものすごい力で彼女たちの店に引きずり込まれそうになる。外国人観光客の多いマニラやパサイ、マカティ、ケソンシティの風俗店の女性たちとは違ってみんなどこか垢抜けず、本当に地元の男たちの遊び場に踏み込んできたんだという実感が改めてこみ上げてくる。

「ごめんね。僕はまだ君と一緒に天に召されるわけにはいかないんだ。彼女を悲しませたくないからね。僕は今の彼女一筋だから」

などといい加減なことを言いながら、僕は強烈な誘惑からさらりと身をおかし続けた。

彼女たち一人一人にドラマがあることはよくわかっている。その一つ一つに興味はある。しかしそれは今日の目的ではない。僕が目指すのはPという店で働く昨年まで日本でエンターテイナーの仕事をしていた女性である。

このエアポートロードという一角、洗練された都会的な名前とは裏腹に安っぽいチューブネオンやサンミゲールビールの看板を掲げたビールハウスやKTVというカラオケレストランが軒を連ねる場末の歓楽街で、あやしい活気を放っている。すりや強盗・殺人など犯罪も多く、観光客はほとんど足を踏み入れない。

僕がかつてマニラに長期滞在していた時、息抜きで家の近くのビールハウスに時々通っていた。ビールハウスとは、文字通りビールを飲んで、連れや店の女の子とのおしゃべりを楽しむ飲み屋である。通常飲み物はビール以外ほとんどおいておらず、おつまみもピーナッツ程度しかない店も多い。そんなシンプルなフィリピン人男性のための娯楽の場なのだ。雑貨店とほとんど変わらない値段でビールを飲むことができ、話し相手がほしければ、店にいる好みの女の子を呼んで一緒に飲みながら取り留めのない話に

興じたり、カラオケを楽しむこともできる。カラオケはたいてい無料だ。ビールハウスの女性たちは、ゴーゴーバーなどと違って売春婦ではないから、お金を払って即連れ出しというわけには行かない店がほとんどだ。ただ、通い続けるうちに恋仲になってしまえば深い関係になるのは難しくないようだ。また、ビールハウスの中にも、VIP ルームという特別室があって、そこでエッチなサービスを受けられる店もある。それだけにビールハウスの女性たちは、一般のフィリピン人からは「尻軽女」「身持ちの悪い女」「安っぽい女」など蔑視の目で見られている。

そんなビールハウスでも以前から日本帰り組の女性とめぐり会うことがよくあった。彼女たちは再度の日本行きを待つわずかな間、少しでも稼ごうと寸暇を惜しんで働いていた。中には僕が日本人だとわかると、すぐに売春話を持ち出して誘ってくることもあった。だからこそ、エンターテイナーとしての再来日が極めて困難な現在、本国での当面の生き方の一例として、ビールハウスで働く元ジャパユキも取材対象としてははずせないと思っていた。そして僕は、マニラの夜のさらに深部に身を沈めた元ジャパユキの姿を求めて場末のビールハウスのメッカを回ってみることにしたのだ。

★出会いのエアポートロード

今回目指す P 店には、『昨年法律改正後に日本から戻ってきたばかりの女性がいる』という情報提供を事前に日本人のメディア関係者から受けていた。拍子抜けするほどあっけなく、見つけ出すことができたこの店で、早速マネージャーに昨年日本から帰ったばかりの女の子がいるかどうか尋ねたところ、すぐに目指すターゲットにたどり着くことができた。

僕は、まずは彼女にビールを何本かふるまって一緒にカラオケでも楽しみながら少しでも親交を深めておきたかった。

「今つれてきますから、ちょっとここにかけてお待ちください」

とマネージャーに促されるままに薄暗い店内の片隅のテーブル席に腰掛ける。ふとボロボロのテーブルクロスに目が行った。ライターで焦げたのかゴキブリがかじったのか、あちこち穴だらけだ。いつに変わらぬビールハウスの風情に僕はなぜか安らぎを感じた。客のいない店の中をあちこち見回しているとすぐに彼女は現れた。

「コンニチハ レイチェル デス ヨロシクオネガイシマース」

レイチェルは僕が日本人だと聞かされていたのか日本語で話しかけ、日本のフィリピンパブで行われているように握手を求めてきた。もちろん僕は笑顔で応じた。

さっそく、ビールを注文した。すぐに彼女には会いに来た意図を説明した。それに加えて彼女にはまず確認しておかなければならないことがある。

「君が最後の来日から帰国したのはいつ？」

「2005 年の 5 月よ」

提供された情報どおりだ。まだ、帰国後 1 年。それから 1 年近くの待機。まさに法律改正の犠牲者だ。僕はすぐにインタビューを依頼し、OK の返事をもらった。

「スケベジジイ」と「うそも方便」（レイチェル第 2 回）

★見下した態度

初めは暗くてよくわからなかったが、次第に暗さに目が慣れると黒いノースリーブのワンピースに身を包んだ彼女の高い鼻、大きく澄んだ瞳、ややスリムだがボン・キュッ・ボンと流れるように美しいボディラインに気がついた。少女の面影を残したなかなかの美人だ。僕の視線に気がついたビールハウスの天使が出し抜けに言った。

「ナニジロジロミテルンダ スケベジジイ」

この一言には僕もちょっとびっくりした。ほんのご愛嬌のつもりなのかもしれないが、僕は素直に笑えなかった。ちょっとひどい言葉だ。こんなローカルなビールハウスに日本人はほとんど来ないためか、懐かしさでたまたま紛れ込んできた日本人客相手に日本語を使いたかったのだろうか？ それとも彼女なりのサービス精神なのか？ いずれにしろ僕はちょっとゲンナリした。しかしそれよりも気になったのは、微笑む彼女のきれいな瞳の奥がすごく暗かったことだ。さらに僕は取り留めのないことを聞いた。

「このお店には日本人のお客さんなんて来ないよねえ」

今度は僕も日本語だ。

「クルワケ ナイジャン」

と明らかになんてバカな質問するんだと言わんかのように入を見下した目で言った。

この子は何でいちいち人に突っかかるようなものの言い方をするのだろうか？ 僕がこの子にどんな悪いことをしたと言うんだ！

僕は彼女のこの一言でキレかかっていた。しかし「切れたら負けだ。それに情報提供者にも申し訳ない。何とかインタビューまでこぎつけなければ」と僕は自分に言い聞かせた。彼女はいずれにしろ悪い日本語を身につけて帰ってきた。性格も素直ではない。強烈な劣等感の裏返しなのかもしれないとも思った。僕は彼女の態度についてはあえて気にしないようにした。本当はいっそのこと「君の日本語は汚いから、もう日本語は話さないでくれ。頼む」

と言ってやりたいくらいだったのだけれども。このように突っかかってくるような彼女の態度の訳をあとで知ることになる。

★『とりあえず歌手』

彼女は 2004 年の 11 月から 2005 年の 5 月までたった一度だけ東京でエンターテイナーとして働いている。その時の資格は歌手だった。僕はその歌を聞かせてもらうことにした。

「君は歌手だったんだよねえ。お気に入りの歌を聞かせてもらえないかなあ」

「わかったわ」

彼女はウェイターを呼んで歌本を見ながら何曲かの歌番号を小さな紙に切れ端に書いて伝え、ホイットニー・ヒューストンやマライヤ・キャリーなどの世界的な女性歌手やレジーナ・ヴェラスケスやシャロン・クネータといったフィリピン人大物シンガーのスケールの大きな歌を披露してくれた。しかし、彼女の声質は深みがなく、伸びもなく、音程も不安定、心に響くものは何もなかった。ちょっと歌が好きなアマチュアの女の子のレベルだ。彼女も『とりあえず歌手』という口なのだと思いますが、

「アン ガリン モ タラガ（ほんとに上手だねえ）」

「ナタッチ ナマン アコ（感激しちゃったよ）」

などと心にもないお世辞を言った。彼女はこの時ばかりは「ありがとう」

とかすかな笑顔で答えてくれた。「うそも方便」「お世辞は人間関係の潤滑油だ」とつくづく感じた。彼女は歌い始めるととまらなくなり、ビールの方もどんどんすすんだ。

早くインタビューの約束を取り付けて帰らないと…。すりや強盗の多いこの地区で真夜中に酔っ払って千鳥足で歩きながら帰るというのは避けたい。

「じゃ、勘定を頼むよ」

といいかけた時に、レイチェルは

「クーヤ、最後にデュエットしましょ」

と誘ってくれた。つっけんどんだった彼女と一緒に歌を楽しむことで少し自分に対して心を開いてくれたようでうれしかった。僕はオギー・アルカシッドとマニリン・レイネスのパガコ(約束)を歌ってその日の歌い納めとした。そして忘れないうちにインタビューの約束を交わした。次の日は大切な用事があるらしくて、翌々日の午後 3 時にマカティ市とパサイ市の境界に近い、エドサ通りとエヴァンヘリスタ通りの角にあるマクドナルドで待ち合わせることに決めた。その角には通り 1 本をはさんでジョリビーとマクドナルドが向かい合うようにして並び立っている。僕は彼女が

間違えないように、さっと手書きで地図を描いて渡した。

生意気な天使（レイチェル第3回）

★携帯は応答なし

「チズクライ ヨメルニ キマッテンジャン バカニスルナ」

乱暴な日本語で答えが返ってきたと思ったら、ブチっと携帯電話を切られてしまった。本当に生意気な子だ。彼女のかんにさわる日本語には慣れたつもりだったが、まだ修行が足りないようだ。僕は携帯電話をケースに収めてからも怒りがなかなか収まらない。フィリピン人は地図を読むのが大の苦手だ。僕は次の約束に備えて彼女が地図を読めずに約束の場所にたどり着けないといけないと思って親切心から、

「君は地図を読めるの？」

と聞いたら、彼女の怒りを買ってしまったのだ。

それにしても悪い日本語を覚えて、劣等感が前面に出やすいレイチェルに対して、

「性格の悪いやりにくい相手だな。同じようにビールハウスに勤める他の元ジャパユキがいたらお願いしたいくらいだな」

と改めて思っていた。

そう、今日はビールハウスで知り合った元ジャパユキ、レイチェルとインタビューの当日。マカティ市とパサイ市の境目にあるマクドナルドで待ち合わせしていたのだ。

約束どおりにインタビュー相手が来ないのは当たり前。僕は約束の午後3時を1時間過ぎたところで彼女の携帯電話を鳴らしてみた。シャワーでも浴びているのかなあと思ったら、

「キョウ ヨウジアル キャンセル アシタ オナジバショ オナジジカンニ イクヨ」

とあっけなく、ドタキャンを食ってしまった。彼女には何の悪気もない。

「日本人なら、せめて詫びの一言も添えて自分のほうから電話でもかけてくるよなあ」

などとぼやいても仕方がない。ここはフィリピン、しかも僕はインタビューをさせてもらう立場だからなおさら怒ってはいけない。むしろ彼女の方から次のアポを切り出してくれたことに感謝すべきだ。今回の取材では1回ドタキャンを食うと2度目はなく、それっきりというのがよくあったからだ。

こうして1回目の約束はあっさり流れた。翌日、彼女が言い出した2回目の約束の確認をとろうと、何度電話しても呼び出し音になるばかりで彼女は応答してくれない。テキストを送っても返事は返ってこない。テキストとは携帯電話番号をメールアドレスのよ

うにを使って携帯電話間で行うメッセージのやり取りのことだ。フィリピンでは携帯電話間の e-mail のやり取りはできないのでテキストはこれに変わるものである。

★もう一度アポ取り

彼女に連絡が取れないままかれこれ 5 日が過ぎた。こうなるとまた店に行くしかない。彼女の勤務時間は午後 8 時から午前 4 時が基本。僕は午後 8 時過ぎに店に入ったが、彼女はこの数日病欠していて次の出勤はいつだかわからないと言う。僕はマネージャーに前払い代わりの謝礼の 100 ペソと自分の携帯電話番号入りの名刺を渡してレイチェルが出勤したら、テキストしてくれるように頼んだ。

2 日後の夜 8 時過ぎマネージャーから「レイチェルが出勤している」というメッセージが入った。僕はすぐに店に向かった。

「もう元気になった?」

彼女がテーブルに着くと、僕は何事もなかったかのように彼女の体調を気遣った。

「ありがとうクーヤ。ちょっと風邪をひいちゃって寝てたの。家族にも問題があって……」

彼女がうつむいた。僕らの間に一瞬沈黙が流れた。そして彼女が思い出したように言った。

「クーヤ、この前はごめんね。明日なら絶対大丈夫よ」

よかった。彼女の方からインタビューのことを切り出してくれた。覚えていてくれたのだ。

「じゃ、明日の午後 3 時に同じ場所でね。ジョリビーじゃなくてマクドナルドだよ」

僕は再び念を押した。ジョリビーでなくマクドナルドを選んだのは、隣り合う 2 件ではマクドナルドの方がいつもすいていて、より静かで落ち着いて話をしやすかったからだ。

こんちはさよならという訳にもいかない。その晩も彼女に何本かビールを振舞ってから店を後にした。彼女はその日は店の出入り口まで見送りに来てくれた。

「じゃあクーヤ、明日の 3 時にマクドでね!」

「じゃあ、明日よろしくね」

今度は来てくれそうだ。僕は少しほっとした気分店で店を後にした。

吐いて飲んでまた吐く仕事（レイチェル第 4 回）

★6 人きょうだいの長女

「ゴメンネ クーヤ オマタセ」

翌日彼女は、ちゃんと 1 時間遅れでマクドナルドの 2 階席に来て

くれた。彼女は遅れたのを少しは気にしているのか申し訳なさそうに微笑んだ。その時彼女の心からの笑顔を初めて見たような気がする。僕が彼女の歌をほめた時、彼女は笑った。でもそれは業務用の微笑みだった。ハーバーガーとコーラをはさんでインタビューの始まりだ。

「今の暮らしはねえ……まだビールハウスの仕事を始めて2ヶ月しか経っていないんだけど、身も心もボロボロよ。生きてるのに疲れたわ。あきらめの心境ね。惰性で生きてるっていう感じ」

今の暮らしぶりについて尋ねると、彼女は開口一番こう答えた。彼女が初めて僕に自分の弱みを見せた。僕はこの時、瞳の奥のかげり、そして彼女が放つ強烈な暗いオーラ・攻撃的でいながらどこかいじけたような物腰の理由を解き明かす時だと感じていた。

レイチェルは、1984年10月、現在のマニラ首都圏のバレンズエラ市で公務員の父と主婦の母のもとに生まれた。6人兄弟の長女である。父親は根っからの浮気者。レイチェルの幼少の頃から父親の浮気をめぐって両親のけんかが絶えず、母親はレイチェルが13歳の時に浮気者の夫に愛想をつかして正式に離婚し、その後再婚。父親は現在独身だが、何人かのガールフレンドと交際を持っている。現在はマニラ首都圏パサイ市に父親と父親の妹である伯母と3人でアパートを借りて暮らしている。2番目、3番目の兄弟はいずれも女の子で10代後半にしてすでに結婚して、自分たちの家庭を持っている。下の3人の兄弟は小学校か高校に在学中で、マニラ首都圏の北に隣接するブラカン州の父方の祖母のもとから通学している。レイチェルもまた崩壊家庭の犠牲者なのだ。

マニラ首都圏に暮らす母親とは今でも頻繁に連絡を取り合っている。家もなく、父の公務員としての安月給だけでは、日々の生活もままならず、レイチェルは貧しさの中で何とか2年遅れで高校を卒業した後、2002年、18歳の時に友人のリクルーターの誘いで日本行きのためにプロモーション入りした。2004年まで、2年間、マカティ市やマニラ市内のジャパニーズ・カラオケでトレーニングを積むが来日の機会に恵まれず、2004年11月によりやく念願になって、初来日、東京都内のフィリピンパブで仕事する機会を得た。

★仕事で胃潰瘍に

今の暮らしぶりについてさらに具体的に聞くと、彼女は補ってくれた。

「今の仕事には基本給はなく、私の稼ぎはビール1本について50

ペソのドリンクバックだけ。お客さんがビール 1 本注文してくれると私に 50 ペソのバックがあるの。単純なシステムでしょ。お客さんが来ても私はテーブルに呼ばれてビールを注文してもらわなくちゃ稼ぎはなしよ」

うーん、どう考えてもしんどい仕事だ。それで彼女は 1 日何本のビールの注文をとるのだろうか？

「1 日平均 5 本くらいだと思うわ。それで休日は 1 週間に 1 日だから、お店に出るのは以下月あたり 25・6 日だから月収は 6,000 ペソくらいだと思うわ。ビールは多い時で 10 本の日もあれば、0 の時もあるの。私はもともとお酒が強くないから、気分が悪くなると、トイレで吐いてまたテーブルに戻って飲んで、また吐いては飲んでなんていう日もあるわ。でもこの仕事のおかげでだいぶお酒には強くなったわ」

彼女の美しい瞳に生き生きした輝きがないのはこんな無理な仕事で体が蝕まれているのも大きな原因ではないかと思った。僕の彼女に対する気持ちはすっかり共感モードに変わっている。しかし彼女の仕事は飲むだけではなかった。

「クーヤも気がついたと思うけど、私のお店には VIP ルーム(特別室)があるの。そこでお客さんの希望に応じて、マスターベーションの手伝いをしたり、女の子によってはチップと引き換えに最後までサービスする子もいるわ」

僕は彼女の言葉一つ一つに大きくうなずきながら耳を傾けていた。そして彼女の体調を気遣って聞いた。

「でもそんな無理な仕事をしてたら、体を壊しちゃうんじゃない？大丈夫？」

「もう壊れてるから大丈夫よ。この仕事を始めてろくにご飯も食べないで飲んでばっかりいるからあっという間に胃潰瘍になっちゃったの。お金がある時は薬を飲んでたんだけど。今は自分の薬を買うお金なんてないから胃潰瘍とは仲良く付き合っていくしかないわね」

彼女は人事のように悲しく笑いながら話した。自分のために買う薬がないといていたのが気にかかる。家族に病人がいるに違いない。

「君は今、自分のために薬を買うお金なんてないって言ったけど、家族に病人がいるの？」

僕は彼女の様子をうかがいながら、おだやかな口調で尋ねた。彼女はこの質問でうつむいた。しばらく僕らの間に沈黙が流れた。凶星のようだ。しかし、ここはこれ以上聞いてはいけないと質問を変えようと思っていた時、彼女は一瞬天井を見つめて大きくため息をついてからポツリと言った。

ビールハウスで働く理由（レイチェル第5回）

★妹の病気

「私のすぐ下の妹が白血病でキーモセラピー（白血病やガンなどに対する化学療法）を受けてるの。もう2年間の闘病生活よ。妹はもう結婚してるんで、私と妹の旦那さんの二人で治療代をほとんど出してるの。お医者さんからもらう処方箋通りに薬を買っていたら毎月1万ペソ以上かかるからとっても無理。だから義理の弟と私でできるだけのことをしてるの。お父さんは思い出したように時々お金を出すだけ。自分の稼ぎはほとんど女遊びに使ってるわ」

僕はハンマーで頭をたたかれたくらいのショックを受けた。居心地のよくない崩壊家庭での生活、白血病の妹の医療費負担、文字通り命を削るような体にこたえる仕事。あまりにも厳しい現実だ。これだけの問題を抱えて明るく前向きに生きていくのは、よっぽど強い心の持ち主か、楽天的な人でなければ無理だ。僕は今、彼女の瞳のかげり・果てしなく暗いオーラの訳がよくわかった気がした。そして彼女の心の強さに敬意すら感じていた。

「妹さんは……」

僕は言いかけて言葉を飲み込んだ。聞いてはいけないことを聞きそうになってしまったのだ。妹さんの余命についての質問だった。

「クーヤいいのよ。妹の余命についてははっきりお医者さんからは聞いてないけど、長くないと思うわ。この1ヶ月くらいの間に髪の毛が完全になくなっちゃって、食欲がまったくなくなっちゃって、ひどくやせたの。でも彼女の余命がどうのこうのなんて考えたくないわ。生きてる限りはできるだけのことをしてあげたいのよ」

今度はレイチェルが僕を気遣い、僕の気持ちを読んで答えてくれた。僕は長女の責任感、強い兄弟愛に感激し、込み上げてくるもので喉が詰まった。と同時に、聞くことすべてが彼女の悲惨な日常を事細かにほじくり返すことにほかならず、つらかった。これ以上彼女を苦しめていいものか、すなわちインタビューを続けてもいいのか、やめるべきなのか心の中での葛藤があった。その一方で妹さんのキーモセラピーの話を聞いてからは、彼女がどこまで自己犠牲を払っているのかますます気になった。月6,000ペソの給料の中から、家賃を負担して、妹の医療費を支払い、自分自身の食生活がどうなっているのかが気がかりでならなかったのだ。

「レイチェル、君は妹さんを助けるためにがんばってるのはよくわかったけど、食事はちゃんと食べてるの?」

「クーヤ、心配してくれてありがとう。毎日1回、時には2回、家

のあまりものを食べているから大丈夫よ。それにご飯が食べられなくても仕事で毎日ビールが飲めるからそれがご飯代わりよ。ビールってカロリー高いでしょう」

彼女は 6,000 ペソの家賃のうち 1,000 ペソを負担し、妹の医療費に 3,000 ペソ費やし、自分のために費やしているのは月に 2,000 ペソだ。そのうち職場への交通費が約 1,000 ペソだから、本当の意味で自分の自由になるお金は月 1,000 ペソに過ぎない。食事を満足に取る経済的余裕がないことは火を見るより明らかだ。それでも彼女はもっと稼いで今は母方のおばあさんの家にいる年下の兄弟たちの勉学を支援したいと思っている。崩壊家庭の結束を維持し、自分を捨てても兄弟の幸せを優先する伝統的なフィリピン人家庭の長女の懸命な努力にただ頭の下がる思いだった。僕はもうこれ以上、この件について尋ねることも意見することもできなかった。

★難しい就職活動

しかし、レイチェルはまたなんで周りから蔑視線を浴びる『ビールハウスの女』という仕事を選んだのか、またたどり着いたのか？ なぜカラオケではなくビールハウスなのかを聞いておきたかった。

レイチェルは、来日中から妹に仕送りしていたので、帰国したらあっという間にお金がなくなった。家賃・妹の医療費・自分の暮らしのためにもすぐ現金収入が必要だった。とにかくすぐ何か仕事をしなくてはならない。一番に頭をよぎったジャパニーズ・カラオケに何店か足を運んでみた。しかしどの店も女の子があふれていて日給が安い。給料をアップするには同伴や指名を取ることが不可欠だ。しかし、大勢のきれいな女の子たちの中に混じって基本給以外の手当てを上乗せする自信もないのですぐにあきらめた。また、本国ではきちんとした仕事をしたいという気持ちもあった。それでファースト・フードのサービス・スタッフやレストランのウェイトレスの仕事に応募してみた。ジョリビー、マクドナルド、チャオキング(中華ファーストフードのチェーン店)やレストランなどだ。しかし結果的には母国がいかに学歴社会であるか思い知らされたただけだった。彼女の高卒という学歴がネックになってすべて不採用に終わったのだ。

「高卒なんて鼻も引っ掛けてくれなかったわ。それまできちんとした就職活動なんてしたことなかったから、自分たちの国がこんなにも学歴偏重社会だって思い知らされたわ。それに採用されても信じられないくらい給料は安いし」

彼女は憤懣やるかたない表情で話した。

「就職活動って、交通費だけでなく、履歴書・出生証明・国家警

寮証明書・写真とか、応募に必要な書類がものすごく多くてお金がかかるのよねえ。友だちに就職活動資金として借金して2ヶ月間、必死で職探ししてたんだけど、全部不採用。落ち込んだし、やけになりかけてたわ。私は学歴がなくて本当に苦労したし、悔しい思いをしたから、下の3人の兄弟には何が何でも大学まで終えてほしいの」

彼女は職探しの時に味わった苛立ちと年下の兄弟たちにかける思いを昨日のことのよう思い出しながら語った。

その間にも日本での仕事の話は降って沸いては消えるということの連続。ブッキングは取れるが、ヴィザがおりない。日本にはなかなか行かれそうもないし、フィリピンでのまともな就職をあきらめてた時に、ラグナ(マニラ首都圏の南に隣接する州)のとある町のローカル・クラブでバンドのシンガー募集の仕事を見つけて面接に行って採用された。その後6ヶ月間、客の入らないそのミュージック・バーで歌っていたが、店がつぶれてそれと同時にバンドも解散してまた失業。2005年のクリスマス・イヴのことだった。その後、日本行きよりも実現しやすそうな韓国でのエンターテイナーの仕事を斡旋するプロモーションにも登録して2ヶ月トレーニングを受けたが、話が具体的になってきた時に、スタッフから『韓国では売春しなくちゃいけないけどいいかい?』って聞かれて、韓国行きは断念。何があっても絶対売春はしたくなかったからだ。それでやっぱりジャパニーズ・カラオケでとりあえず働こうかなあと思っていた時に、近所の元ジャパユキの顔見知りからビールハウスの仕事を紹介された。とにかく売春以外は何でもいからと仕事を探し、最後にたどり着いたのがビールハウスだったのだ。

「もう選択肢はほかになかったのよ」

彼女は当時の切迫感を再現するかのように切羽つまった表情で言った。

裏切られ続けた過去（レイチェル第6回）

★男性不信

彼女は僕の前でなかなか本当の笑顔を見せてくれなかった。彼女の端正な顔には「私は誰も信じない」「私は誰にも決して心を許さない」という頑ななまでの決意にも近いような気持ちが表れていた。彼女はこれまでの人生の中でずっと人にだまされ続けたり、何か強烈な人間関係の挫折があったのではないか。彼女の全身から立ち上るような暗いオーラの一因がこの人間不信、または男性不信にあるのではないかと僕は思っていた。

そこでストレートに聞いてみた。

「君は過去にボーイフレンドに裏切られたとか、人間関係とか恋愛でものすごく傷ついた経験はない？」

彼女の表情が一段と陰しくなった。眉間にしわを寄せ、視線を一瞬床に落としてから、気を取り直したように視線を上げて彼女は言った。

「お父さんを見て育ってきたから、男はみんな浮気ものだと思ってるわ。それから私 3 度男に裏切られた経験があるの。3 人の男に本気で恋して裏切られたのよ。それでますます男性不振に陥ったの」

ここまできたらどんな風に裏切られたのかも聞いてみたい。彼女が答えたくないといったところで質問を撤回すればいい。僕はちょっと勇気を持って尋ねた。

「3 回男に裏切られたと言ったけど、どんな風に裏切られたの？」

開き直ったように、意外にも彼女はすんなり話し始めた。

「最初は私が 19 歳の時、初恋だった。当時プロモーションの近くに住んでいた有名銀行に勤める 25 歳の行員が恋人よ。すべてが終わってからわかったことだけど、私たちが出会った時にはもうとっくに婚約者がいて結婚の日取りまで決まっていたのに私に言い寄ってきたの。ハンサムでとてもロマンティックで理解のありそうな雰囲気を持った人だった。私がジャパユキを目指してクラブで研修中であることを知っても『君がどんな生き方をしているのもいつも愛してるよ。いつか結婚しよう』なんて甘い言葉に乗せられて、気がつけば知り合って 1 ヶ月後にはラヴホテルの 1 室にいたの。彼の言葉を真に受けてすべてを与えてしまったあと、ピタッと連絡が取れなくなった。1 週間後、我慢できなくなって彼の職場に押しかけていったら、彼は何食わぬ顔で同じ職場の婚約者を紹介したのよ。大声で『うそつき』って叫んだら、すぐに警備員につまみ出されておしまい」

「それは気の毒だったね」

僕は心からの同情をこめて言った。でも僕はレイチェルと同じような被害にあった女性の話を何度か聞いたことがあった。やはり婚約者がいるのに、彼女すらいないふりをして他の女性に言い寄り、肉体関係を持ったらバイバイという話だ。フィリピン人男性の独身時代の女性関係は全般にかなり派手だ。それが結婚すると途端に子供たちには厳しい父親に変身してしまう。完全に結婚してしまうと大っぴらには浮ついた女遊びはできなくなるから、婚約すると、結婚式の直前には今が最後とばかりに遊ぶのだろうか？ ただ、こんな話をすると彼女の男性不信や忘れていた怒りを増幅するだけなので自分の心にしまっておいた。

★『3度目の正直』

「それで2回目は、彼氏が私を捨ててオカマに乗り換えたの」

「そうだったの。それはつらい経験をしたねえ」

僕は相槌を打ちながら、これはフィリピンならではだと思った。フィリピンではオカマは日本と比べ物にならないほど多い。その中には女性も恋愛の対象として見ることのできる両刀使いの男性(?)も多い。また、男性からオカマに方向転換する人も多い。しかしいずれにせよ、これもまたレイチェルにとっては痛烈な経験だ。

「3回目は日本で働いてる時にお客さんにだまされたの。奥さんのいる日本人と4ヶ月付き合ったの。一緒によくお店に来てた彼のボスが酔っ払った時に『彼はね。きれいなフィリピン人の奥さんがいるんだよ』ってポロっと言ったの。真実を知った時は本当に悔しかったわ。だって彼はね、私が自分の過去を包み隠さずに話したら、日本には『3度目の正直』って言うことわざがあるんだよ。だから今度は大丈夫だよ。僕が君を一生幸せにするよ」って言ってたのよ。それで私も男性を信じる気持ちを取り戻しかかってたのに……最後に彼に一度だけ真実を確認したら、あっさりフィリピン人の奥さんがいることを認めたの。自分からずっと身を引いたわ。彼も本当のことがバレるともう私のことを追いかけては来なかったわ」

彼女の心の古傷につけ込んでことわざまで引用して、これは恋愛ルール違反ではないのかと僕は思った。あたり前のことだが、僕は恋愛では自分の婚姻上の資格を偽ったり、相手の弱みにつけ込んだり、悪意のあるうそのすべては絶対の禁じ手だと思っている。日本でのわずか6ヶ月間の労働が彼女の心の傷に上塗りしただけであってほしくはなかった。僕はそれを確認したかった。

「君の初来日は、心の傷を深めただけの経験になったんじゃない？」

彼女の反応は少し意外なものだった。

日本にはもう行かないかも（レイチェル第7回）

★おいしかった日本食

「そんなことはないわ。フィリピンだって日本だって同じ。まじめな人もうそつきもいるでしょ。それに日本ではフィリピンとは違った文化に触れることができてよかったわ」

「たとえばどんなこと？」

「まず、食べ物ね。ラーメン・日本のやわらかいお米・梅干・ソーセージ・焼肉・焼き鳥・うどん、日本食がとってもおいしくて日本で3キロ太ったの。街やいろいろな場所がきれいなこともよく覚えてるわ。特にディズニーランド・鴨川シーワールドが素晴ら

しかったわ。それから 100 円ショップやイトーヨーカドーは何も買わなくても見て歩くだけでも楽しかった。それから日本人はやさしくて仕事にまじめなことに感心したわ。それから行った時期がちょうど冬から初夏にかけてだったから日本の四季も経験できてよかったわね。同じ場所なのにあれだけ暑くなったり寒くなるのって本当に不思議ね」

若干の誤解もあるが、日本からいい思い出も持ち帰ってもらえてよかった。僕は少しだけほっとした。

★先の見えない未来に向かって

「今の状況では夢なんか見られない。でも夢と言えるのかはわからないけど、まず妹に十分な治療を受けさせたいわ。それからまだ学校に通っている下の 3 人の兄弟たちを大学まで行かせられるように、スモール・ビジネスを手がけたいの。ジープを買って貸すとか、サリサリストア(雑貨店)の経営、自動車修理工場の経営、お米の卸売業とか、いろいろアイデアはあるんだけど、今の状況では夢のまた夢ね」

彼女に未来にかける夢について聞くとこんな答えが返ってきた。

「そういう君の夢をかなえる手段が日本での仕事なんだね」

「ええ、そうよ。でももう 1 年近く待ってるし、もう行かれないかもしれないわね」

彼女の再来日への展望は悲観的だ。いや現実的というべきか。

しかし、彼女の夢はすべて兄弟のためのものだ。答えは分かってきているように気がしたが、彼女が自分の女として幸せ、すなわち恋愛や結婚について今どう考えているのかを聞いてみた。

「君の夢はすべて兄弟のためという感じだけど、自分の恋愛や結婚についての夢はないの？ もう恋愛なんてこりごりかな？」

「いえ、ちっともそんなことないわ。本当に人間として信頼できる責任感のある人がいたら結婚したいわ。私本当はものすごく孤独なの。本当の友だちだっていないし。クーヤが初めて店に来た時、私が日本にいた時のお客さんか恋人が私を探し当てて訪ねてきたかと思ったから、私もすごく警戒してたのよ」

心の古傷が癒えずに恋愛恐怖症をわずらっていると思っていた彼女の答えは意外だったが、彼女が自分の幸せのことも忘れていないことがうれしかった。

「みすばらしい中年男だけど、僕なんかどうかなあ？ これでもまだ正真正銘の独身なんだ」

「大歓迎よ。まじめで責任感がありそうだから。でも彼女がいるって言ってたわよね。彼女を傷つけちゃだめよ」

ほんの戯れで言ってみただけなのだが、彼女は人の話をよく聞

いているし、実は頭のいい子なんだと思った。

インタビューも大詰めだ。最後にもう少しだけ現実的な問題について聞いておかなければならない。

「君はもし、もう日本に行かれなかったらどうやって生きていくの?」

間髪を入れずに彼女は答えた。

「この店でずーっと働ける限り働くわ」

そう話す彼女の姿は凛として美しく、また力強かった。傷ついた分だけ強い心を持ったレイチェルならビールハウスの過酷な労働環境の中でも何とか生き残っていけるかもしれない。しかし月6,000ペソは命を削るような労働の対価としては安すぎる。僕は出会った頃に比べてだいぶ心を開き始めていたレイチェルに改めて聞いてみた。

「今の仕事はきつい割りに給料が安すぎるような気がするんだけど、もっと楽に稼げる仕事、たとえば君の同僚もやっているように売春をしようとは考えたことはないの? 外国人相手なら一晩で5,000ペソ稼ぐことだってできるよ」

彼女の感情を害さないか心配だったが、彼女は淡々と答えてくれた。

重すぎる現実（レイチェル最終回）

★「絶対いけない」仕事

「売春は絶対いけないことだと今でも思うわ。でも一度自分の良心に目をそむければできないこともないと思う。さっきクーヤに『絶対売春はしない』なんてえらそうなこと言っちゃったんだけど、売春するしかないのかなあと考えたことはあるのよ」

「君は売春したことはある?」

僕は思い切って聞いてしまった。

「ないわ」

一瞬間をおいてレイチェルは力なく答えた。彼女の瞳をのぞき込むとおどおどとして落ち着きがない。うそをついている目だ。『彼女は常習的に売春しているか、少なくとも売春したことがある』と確信した。ただ僕はこの点についてはもうこれ以上突っ込まなかった。

崩壊家庭でのギクシャクした生活、白血病の妹の医療費負担、文字通り命を削るような体にこたえる仕事でレイチェルはまったく先の見えず、かすかな希望すら持ちづらい状況の中で兄弟たちのために文字通り体を張って頑張っている。だからこれ以上頑張れなどとは言えない。

「今日はありがとう。これは今日のお礼だよ」

インタビューを終えて約束どおり謝礼の 500 ペソを渡すと、
「ありがとう、これで妹の薬が買えるわ」

と言いながらレイチェルは大事そうに受け取ったばかりの紙幣を折りたたんで財布にしまいこんだ。命をつなぐ 500 ペソの重みを僕はひしひしと感じながら、重い荷物を自ら進んで抱え込んだ彼女の華奢な体を見つめていた。

★ハンバーガーの行方

崩壊家庭の中で、病人と 3 人のまだ学生の兄弟を抱えて長女の責任を必死に果たそうとするレイチェルに心の中でエールを送るばかりだった。気がつくと彼女はハンバーガーにまったく手をつけていない。

「ハンバーガー食べなかったね。食欲ないの?」

と僕は聞くと彼女は

「そうなの。なんだか胃が痛くて。でもあとでビール飲むから大丈夫。それよりこれをろくな食事をしてない義理の弟へのおみやげにしてもいい?」

と聞き返してきた。

「もちろんだよ。君も大変だけど、妹さんの旦那さんも大変だねえ」

と僕は心底、レイチェルの義理の弟さんにも同情しながら、レイチェルのやさしさやフィリピン人らしい分かち合いの心を感じていた。

「じゃ私行かなくちゃ。妹の家にお金を届けてから仕事に行くわ。クーヤ、本当にありがとう」

といって彼女は席を立った。

「こちらこそありがとう。体に気をつけてね。君が病気になったら一大事だからね」

彼女を激励するにはこれ以外の言葉は見つからなかった。マクドナルドの 1 階に降りて出口を足早に出て行く彼女の後姿を見送りながら、僕はしばらく席を立てなかった。

彼女の救いようのない人生の重さを自分の問題のように感じて押しつぶされそうな気持ちになっていたのだ。長女の責任感を背負って気持ちの張りを保っていたのを、うわべだけを見て生意気だと短絡的に判断した自分を責めたり、彼女の強さと自分の弱さを同時に見せ付けられて、表現しようのない自己嫌悪に陥ったり、僕はかなり混乱していた。ある人間の人生の重い現実を突きつけられて軽い放心状態だったと言ってもよい。彼女は本当にお金に困った時、大きな罪悪感を抱きながらも、売春常習者になってい

くのかもしれない。この国では売春は必要悪なのか……？ 僕の思いは出口のない闇の空間の中でもがいていた。いや、でも彼女は強い人だからどうなってもそれなりに生きていける。大丈夫だ。僕はただそう自分に言い聞かせた。

傍らでは幸せそうな親子の笑顔と子供たちの笑い声が聞こえてくる。この同じ瞬間にいろいろな人生を生きている人がいるんだと今さらのように感じていた。窓の外にはたそがれ迫るエドサ通りはいつもどおりの大渋滞だ。しかし今日はなぜかゆっくりした車の流れをガラス窓越しに見つめていると心が安らいでくる。不思議な気分だった。「レイチェル一家に幸あれ」「レイチェルが一人の女性としての幸せを手に入れることができますように」と僕は心の中で祈りながら、重い腰を上げて帰宅の途についた。

切ない再会（リセル第1回）

今回から、マニラの援助交際カフェ、LA カフェで働くリセル（26歳）の物語です。

★夢

「リリー!!」

リリー、それは僕がはじめて本気で愛したフィリピーナ。そしておそらく初めて本当の愛を教えてくれた女性。その彼女が、17年ぶりに純白のウェディングドレスに身を包んでフワッと目の前に現れ、ニコッと微笑んだかと思った途端、あっという間に消えてしまったのだ。大声で叫びながら彼女を追いかけた僕は、大きく寝返りを打ったためか、ベッドから転げ落ちてその痛みですぐ目を覚ました。

LA カフェに通いつめていたある日の夜、僕は浅い眠りの中で、いつ完治するともわからないフィリピン熱中症のきっかけになったリリーの夢を見たのだった。

僕はよく夢を見る。そして僕が昔懐かしい人の夢を見ると、その翌日には、夢で見かけた本人や、その家族など、本人にとっても近しい人に出会う。そんなことが何度かあった。

今から 17 年前、リリーとの別れの直後、彼女の仕事場の同僚が「リリーはエルミタのゴーゴーバーのダンサーだったのよ」と言った言葉が頭をよぎる。僕は今回の取材とは別に自分の原点、リリーとの運命の再会に期待を膨らませていた。

当時 17 歳だった彼女も現在 34 歳。現役で何とかがんばっているか、一線を退いてバーやカラオケのママさんかポンビキなどに納まって、この狭くて広いエルミタのどこかにいる可能性はある。

突然、携帯が鳴った。胸の鼓動がにわかに高まった。

「あんたの探してた娘が見つかったよ。今 LA で引き止めてるから早く来てよ」

人探しを依頼していたジョシーからの電話だった。最低限の用件だけ言うとブチッと携帯は切れた。僕はあわててアパートを飛び出した。思いがけない再会への予感をも抱いて LA カフェ方面に向かう僕の足取りはいつもより軽かった。

★なつかしのあの娘

「クーヤ、シバラク ゲンキ ココデ ナニシテルノ？」

ポンビキのジョシーに紹介された日本帰りの女の子は、なんと古い顔見知りだった。しかも僕がひそかに思いを寄せていたあの娘だった。

ここは援助交際カフェとして、マニラ・ランデブーと並んで世界にその名をはせる LA カフェ店内の一角。そんなまさか!! あの娘がこんなところで働いているわけがない。僕は一瞬、信じられず、ぽかんと口を開けたままボーっとしてしまった。

「これがあんたの探してた去年日本から帰ったばかりの娘だよ。もうかれこれ半年以上ここに出入りしてるよ」

とポンビキのジョシーが言った。それでも僕はまだ信じられない。ぺちゃんこの鼻、人のよさそうなたれた目尻、大きくて黒くまん丸な瞳、間違いなく僕の旧友のあの娘に間違いはない。しかし名前が出てこない。ちょっと考えてようやく思い出した。

「あっ、そーだ君はリセルだね」

「ええ、そうよ」

リセルはうつむき加減で照れくさそうに答えた。

「本当にこのお店に出入りしてお客を取ってるの？」

「ええ」

リセルは消え入りそうな声で答えた。

僕らの間に沈黙が流れた。今回の取材では初めての顔見知りとの再会。昨晚の夢はこの再会劇の前触れだったのだろうか？ しかしこんなところで会いたくはなかった。僕の知っているリセルは、うぶなファースト・タイマーだ。それが今一人のホステス（売春婦）として僕の前に立っている。彼女との日本での出会い、いっしょに過ごした時間、いろいろな光景などが、かすかな感傷と心の痛みとともに、一瞬のうちに脳裏を駆け巡り、僕は混乱の中で言葉を失っていた。

「ジャ トモダチ モンダイナイネ」

僕の気持ちなどお構いなしで、ジョシーはさっさと紹介料を受け取ろうと僕の目の前にしわっぽい手を差し出してきた。

「ありがとう。これがお礼だ」

僕は約束の紹介料 500 ペソを目立たぬようにジョシーの手のひらにねじ込むように渡すと、彼女は、

「ありがとね。またなんか用が会ったら遠慮なく声かけてね」

というのが早いか、すぐに次のターゲットを求めて仕事に戻っていった。

★一筋縄ではいかない人探し

そう、ジョシーはここ LA カフェを主な仕事場にするポンビキだ。しわっぽい顔に厚化粧。5 年前までは現役のホステスだったと言うが今はその美貌の見る影すらない。ポンビキと言っても自分が直接スカウトして手がけ、紹介できる女の子を抱えているわけではない。一夜の女の子を探す外国人男性と、客を探すフリーの女の子たちのつなぎ役として、何かにかこつけて会話に割り込んで、即席カップルを誕生させ、男性客から 1 率 300 ペソの手数料をせしめるというのが彼女の仕事だ。たくさんカップリングさせればさせるほど、比例的に身入りはよくなるというわけだ。

世界的に名の通った援交カフェ LA にも、元ジャパユキが再就職先しているかもしれない。そこで僕は、毎日のようにここに通いつめ、女の子たちやポンビキたちに片っ端から声をかけた。ポンビキたちは、若い売春婦たちを集めては、

「あんたたちの中で、日本に行ったことのあるコはいない?」

と全員に声をかける。何人かが名乗り出る。

「私仕事したことあるわ」

そして僕が確認の質問をする。

「最後に日本から帰ってきたのはいつ?」

「1999 年よ」

「私は 2003 年よ」

今回の取材の趣旨から言うと、少々昔すぎると言わざるを得ない人たちだ。フーッ、残念!! 思わずため息が出る。底引き網のように女の子たちには片っ端から声をかけ、そこそこターゲットに近づくが、「これだ」という人にはたどり着けない日々が続く。躍起になって元ジャパユキを探す僕の姿を見て、「去年日本から帰ってきたばかりの友達がいる」という確信情報をくれる女の子もいたが、あいにくその子はすでに仕事をやめて田舎に帰った、というように 2005 年 3 月の法律改正で再来日の道を断たれ、現在 LA カフェで働く元ジャパユキ本人にはなかなかたどり着けなかった。

女の子たちの話から僕の求めるターゲットが間違いなくいることはすぐわかった。しかし彼女たちがいつ通って来るかわからな

い。おびただしい数の援交ギャルの中から目指すターゲットにたどり着くのは容易ではなさそうだ。僕は、取材 1 日目にして自分ひとりで探す方針を変更し、カフェに出入りするポンビキも頼りにすることにした。自分自身で毎日通い詰める一方、取材に協力的なポンビキのジョシーに謝礼 500 ペソという条件で元ジャパユキのホステスを紹介してくれるように頼み、彼女にも望みを託した。

取材中 4 月の下旬、ちょうどキリスト教の復活祭にさしかかると、女の子たちは大挙して一時田舎に帰ってしまい、若い女性の香りでむせ返るほどだった LA 店内は女の子もまばらになり、閑散としている。そんな中、ジョシーから「ダバオ出身の去年帰国したばかりの元ジャパユキが店に出てるよ」という電話連絡を受け、僕はあわててアパートを飛び出し、LA カフェに向かった。

探し始めてから 2 週間、日本から帰国ホヤホヤの元ジャパユキの女の子にたどり着けた。そして、そのジャパユキは、ファーストタイマー時代からのなつかしい知人。僕の気持ちを束の間、癒してくれた女性との思いもよらない、ちょっと切ない再会劇となったのだった。

「クーヤ ドシタノ？」

リセルの言葉で僕はまた現実の世界に引き戻された。

うぶなマーメイド（リセル第 2 回）

★出会い～初来日のリセルとシャロン

忘れもしない 2004 年の 7 月の初めだった。僕はフィリピン関係の催しの帰り、千葉県内有数のフィリピンパブ密集地を冷やかして歩いていた。行けども行けどもフィリピンパブ。一体この連なりはどこまで続くのだろうと好奇心に駆られ、密集地帯の果てを見届けようと、最寄の JR 駅の反対方向へどんどん歩みを進めた。30 分近く歩いたのだろうか。だんだんと店がまばらになり、最後にぽつんと 1 軒だけフィリピン国旗を掲げてさびしくたたずむ店にたどり着いた。呼び込みはいない。店の外には浴衣姿の若いフィリピーナたちの写真と料金システムが掲げられていた。僕は吸い込まれるように店の扉を開いた。

「エラシャイマセー」

発音もイントネーションもちょっとおかしい若いフィリピーナたちの元気な日本語が小さな空間に響き渡った。

店内は浴衣祭りのイベント中で、浴衣姿の女の子たちのポスターや七夕飾りなど、デコレーションはにぎやかだが、肝心のお客が僕一人とさびしい限りだ。ウェイティング・スペースの長イスに座る浴衣姿の女の子たちも手持ち無沙汰そうで、どんな客が来たのか、誰が指名されるのか、そんなひそひそ話が聞こえてくる。

ダブルのスーツを着て恰幅のいい店のマネージャーに、
「初めてなんですが」
と話すと、彼は店のシステムをていねいに説明した後、
「では特に指名はおありではないですね。何か女の子のタイプはありますか?」
と聞いてきた。中々気配りが行き届いている。僕は遠慮なく、
「初来日で日本語ができない子をお願いします」
と答えた。
「かしこまりました」
とマネージャーがうやうやしく答えてからまもなく、とてもフレッシュな二人のフィリピーナを連れてきて、紹介した。
「シャロンさんと、リセルさんです」
二人は型どおり、一人ずつひざまずいて僕と握手をしてから、僕をはさむ形で座った。水割り作り、おしぼり渡し、すべてが不慣れでおどおどしていてそれが僕にとってはベテラン・タレントよりかえって心地よかった。
「ワタシ ニホンキタ オトトイデス ニホンゴ スコシダーケ ヨロシク オネガイシマース」
シャロンが口を開いた。
「ワタシモ オトトイダケ ニホンキタデス スコシダーケ イデスカ?」
リセルが続いた。

「イデスカ?」って新人のどこが悪いんですか? もちろん、いいに決まってるじゃない!! おととい来日とは本当にホヤホヤだ。今日、僕は彼女たちみたいなフレッシュなフィリピーナに会いに来たんだから。僕がタガログ語で話し始めると二人は始めびっくりしたように顔を見合わせて

「クーヤ オクサン フィリピンジン? オミセタクサン イクスル?」

などとお決まりの質問をしてきたが、僕が独身で、独学でタガログ語をある程度身につけたこと、4年にわたるマニラの滞在中の話をする、二人の僕に向ける目が、ただの遊び人を見る視線から、一種の尊敬のまなざしに変わっていった。

★二人の妹

僕自身、その年はフィリピンに行っておらず、フィリピンが恋しくて仕方がない、言わば『逆ホームシック』のような状態になっていて、日本にいる普通のフィリピーナ、すなわち日本向けに色づけられたりしておらず、すれてないフィリピーナと、ほんの

束の間でも接して癒されたかったのだ。だからこの二人との時間がいっそう楽しく感じられた。

ベテランタレントのような気配りやサービスはできない。でも、この二人といっしょにしていると、フィリピンに滞在していて、町の食堂の女性店員と話をしているような気分になる。自然で取りとめもない会話がとても楽しいのだ。

店の暗さに慣れると、二人ともそれなりに自分の好みであることに気がついた。二人ともフィリピーナ特有のつやのある長い黒髪の持ち主だ。シャロンはスペイン系の血の混じった彫りの深い美人。フィリピン人らしくない高い鼻、白い肌、優しさと野生の輝きをともに宿したエキゾチックな瞳、薄くて形のいい唇、視線を腰元に下げると流れるようなヒップラインが浴衣姿の上からも見て取れる。そして時々テーブルを立つ時に、はだけた裾からのぞくカモシカのようなすらっとした脚線美、そして少しだけハスキーで甘い声。どちらかというとも都会派のフィリピーナに見えた。ルックスは都会派っぽいのだが、のんびりゆったりとした甘ったるい口調にはとても癒される。

また、リセルは、フィリピン人に多いぺちゃんこな鼻、黒くてまん丸な大きな瞳、いかにも人のよさそうなたれた目尻、情熱的な厚い唇。ちょっとした冗談にもケタケタ笑い、特に話がなくてもいつもニコニコしている。フィリピンの田舎に行けばどこにでもいるような素朴ないわゆるプロビンシャーナ（田舎の娘）タイプ。彼女もやはり僕の好みの天然癒し系だった。

僕はテーブルについて5分もしないうちに、恥ずかしながらタイプの違う二人のフィリピーナに同時に一目惚れしてしまっていた。

好みのタイプのフィリピーナ二人に囲まれて、すっかり興がのった僕は、彼女たちのリクエストに応え、かなり気持ちを入れてフィリピン・ポップスやアメリカン・ポップスを歌いまくった。僕は決して歌はうまくはないが、本当に気分の乗った時だけ、特定の人々の心を打つ歌が歌えるようだ。ほかの客がいなくてもあったが、僕のコンサートは二時間近く続いた。一曲歌ってはテーブルに戻って水割りでのどを潤すと、次の曲が入っていて、また歌い終わると、のどを潤しにテーブルに戻ってという具合だった。福沢諭吉をデザインしたおなじみのカラオケチケット4つづり（20枚）をあっという間に使い切ってしまった。ステージから戻ると、「マガリン タラガ クーヤ（お兄さん、本当に上手ね）」

と言ったシャロンと、笑顔で拍手し続けるリセルの瞳が涙で潤んでいるのがわかった。

彼女たちは僕の大してうまくもない歌に酔ったわけではない。

母国ではやった歌を聞いてホームシックになってしまったようだ。
「クーヤの歌を聞いてフィリピンが恋しくなっちゃった。早く帰りたいなあ」

トリセル。すかさず

「私もホームシックになっちゃった。お母さんに会いたいなあ」

とシャロンが続いた。潤んだ瞳からは大粒の涙が溢れ出している。

この二人、本当に仲がよさそうだ。聞けば二人ともダバオ出身でプロモーションもいっしょ、マニラで来日を待っている時から同室でお互いに大親友らしい。

仲がいいのは結構だが、この二人、この先6ヶ月、タレントとして仕事が勤まるのだろうかと僕は不安になった。二人とも本当に普通の素朴なフィリピーナで感受性も強い。無粋な酔っ払い相手の仕事がそんなに長期間勤まるようには思えなかったのだ。楽しい時間はあっという間に過ぎ、僕は常磐線の上りの最終に間に合うように後ろ髪を引かれる思いで店を後にした。浴衣姿で見送るシャロンとリセルの心細そうな顔を見て、ヨチヨチ歩きのうぶなマーメイドたちがこれからどうなってしまうのか、当面6ヶ月のお勤めが勤まるのか気がかりでしやうがなかった。この夜、僕には放っておけない二人の妹ができた。

「成長」していく妹たち（リセル第3回）

★二人を見守った日々

「クーヤ、キノウ アリガトネ マタキテネ マッテルヨ」

店を訪ねた翌朝、二人から別々に電話があった。まともに付き合っていたらお金も時間も続かない。僕はかわいい妹たちのために週に1回だけ様子を見に店に通うことにした。毎週1回、電車を乗り継いでいそいそと片道2時間30分かけて彼女たちの店に足を運んだ。店に行く度に彼女たちは、少しずつだが日本語がうまくなり、タレントとして必要な気配りや仕事ができるようになっていった。それは僕にとってうれしくもある一方、彼女たちがだんだん日本に染まっていくようで悲しくもあり複雑な心境だった。

自分としてはシャロンの方がよりタイプだったのだが、ルックスで見劣りして中々客がつかないリセルをメインで指名するようにシャロンに頼まれることも多く、そんな時はシャロンをヘルプで指名した。結局二人を交互にメイン指名・ヘルプ指名するのが常になっていた。駅から遠いこの店はいつもほとんど客がいなかった。初対面からほぼ1ヶ月が経過したある日、リセルから電話があった。

「オミセ クローズスルヨ ワタシト シャロン サイタマノ

オミセ イクヨ……」

やっぱり!! いつもあの客の入りではやっていられないだろうとは思っていた。彼女たちは、今度は埼玉県内有数のフィリピン・パブの密集地帯で遊びなれたお客たちに鍛えられることになるのだなと思った。来日中の店の移動。明らかなフライング・ブッキングだ。

フライング・ブッキングとは、タレントが足りない店と余っている店で、女の子を融通し合う一般的な手法だ。フィリピンパブなどは店の面積やテーブル数などによって勤務できるタレントや従業員の数が決められている。現状の人数で女の子が足りない店は、余っている店からその枠を買って雇い入れるわけである。この枠のやり取りは 2004 年当時、タレント一人 1 ヶ月につき 5,000 円が相場だと聞いた。もちろん違法行為だが、実際には業界では常識のように頻繁に行われていた。

埼玉県中部のフィリピンパブ密集地に店が移っても、僕は週 1 回のペースで彼女たちの仕事ぶりを見に彼女たちの新しい職場に足を運んだ。あっという間に二人との出会いから 2 ヶ月が過ぎた。彼女たちがタレントとしてひとり立ちしてきたなあ、と思い始めた頃だった。僕も仕事が猛烈に忙しくなり、また彼女たちも常連客ができたのか、電話がかかってくる回数も減って、いつしかお互いの連絡も途絶えた。便りのないのはよい知らせ。僕は、彼女たちがタレントとして成長していく過程であると前向きにうれしく思っていた。しかし、その一方で僕にとってはシャロンもリセルも機会を作ってきちんと求愛したい恋愛の対象であることに変わりはなかった。

『去るもの日々に疎（うと）し』ではないが、彼女たちの記憶がやや薄らいできた時、シャロンが怒ったような口調で電話をかけてきた。以前、二人が帰国する前にディズニーランドに行く約束していてそれっきりになっていたのだった。

2004 年 11 月、シャロンとリセルと僕の 3 人はディズニーランドに行った。アトラクションを楽しめるように入場者の少ない平日の午前中を選んだ。埼玉県中部の彼女たちの寮まで迎えに行き、電車を乗り継ぎ、JR 京葉線の舞浜駅へ。ディズニーランドに着くと、ほとんど一睡もしていない彼女たちは、眠気もどこへやら。憧れのミッキーマウスとの記念撮影や、今となっては刺激に乏しい、スペース・マウンテンやスプラッシュ・マウンテンなどの強いて言えば絶叫系のアトラクションなどにキャーキャー悲鳴を上げながら思いっきり楽しんでくれているようだった。シンデレラ城の前では 3 人で記念撮影もした。その反動で、帰りの電車の中ではミッキーマウスのぬいぐるみを二人仲良く抱きかかえて爆睡し

ていた。その寝顔は何の汚れもない少女そのものだった。しかし、それが僕と彼女たちが日本でともに過ごした最後の時間となった。

★安宿の寝床で

「クーヤ ドシタノ？」

リセルの一言が、また僕のタイムトラベルにピリオドを打った。さあ、インタビューを始めなくては。僕らの連絡が途絶えてから彼女たちに何があったのか、今日に至る道のりを是非聞きたい。

それにしてもこの LA カフェという場所は特殊な空間だ。明るい入り口を抜けると、まずカウンターが目に飛び込んでくる。カウンター周りには小さなテーブルと小椅子が多数並べられ、カウンターの向こう側にはビリヤード台がある。カウンターを左手に見て奥に進むと、そこはエクステンション（延長）と呼ばれるスペースがある。1回のメインスペースとエクステンションの間に2回に通じる階段があり、階段を上って2回の左側はライブバンド・スペース、右側がテーブル席とビリヤード・スペースの言わばエクステンションと言ふべきスペースの大きく4つのスペースに分かれている。

この2階建て、4つの空間の中で、一晩のパートナーを求める男性客と一晩の、あるいはほんの一時の客を探す売春婦たちの濃厚な駆け引きが24時間、日々繰り返されているのだ。パートナーを探す男性客のプロフィールもさまざま。韓国人・アメリカ人・日本人・ドイツ人・オーストラリア人・アラブ人・インド人・中国人など、国籍もさまざまなら、一夜妻を探す視線もギトギトして脂ぎったものから、スーパーや市場で果物を選ぶような真剣さの中にもクールでゆとりのある視線まで、人それぞれだ。男性も女性も選ぶ権利もあれば拒否する権利もある、とは言えしよせんここは人肉市場。あの気弱なりセルがここでどんな風に客を捕まえるのだろうかと思いは走る。

いずれにせよ、この脂ぎった空気と、しのぎを削る人肉取引の喧騒の現場でのインタビューは無理だ。

「リセル。近くの静かな場所で話を聞かせてくれないかい？」

僕が外に誘うと、

「じゃ、クーヤ、私たちが暮らしてるホテルに行きましょうよ」

とリセルが言った。僕はリセルがまさかホテルに住んでいるなんて思ってもいなかったのだからかなり驚いた。

「ホテルに住んでるなんて、お金持ちなんだね」

「そんなことないのよ。仕事場の近くでいいアパートが見つからないから、しかたなく見つかるまで仲間と3人で住んでるの」

リセルがホテル住まいの理由を説明してくれた。

ゆっくりとした彼女の足取りにあわせて歩くこと 6 分ほどでそのホテルに着いた。僕も以前、日本人の友人を訪ねて行ったことのある旅行者向けの安宿だった。

「うす汚れた部屋には二つのベッドがあり、ベッドの上には、脱ぎ散らかした服・下着、口紅がべっとりと付いたタバコの吸殻が山盛りになった灰皿や飲みかけのウィスキーのビンや化粧品などが散乱しており、夜の女性たちの生々しい生活の香りがあふれていた。

「これが私たちの今の家よ。散らかっててごめんね」

リセルが改めて我が家を紹介してくれた。

「いやいや、いいんだよ。生活感が漂ってるね」

こうとしか答えようがなかった。

目の前には 2 年前、初めてあった時と全然変わらないリセルがいる。僕らは二つのベッドのへりに向かい合って腰掛け、ディズニーランドでの休日や彼女たちを同伴した時に必ず立ち寄った 100 円ショップの話でしばし盛り上がった。

しかし、今の彼女はショートタイム 3 時間拘束で最低 1,500 ペソ、オールナイトで最低 3,000 ペソを稼ぐ売春婦なのだ。彼女にとっても時は金なり。無駄話をして彼女の貴重な時間をつぶすわけにはいかない。さあ、インタビューの時だ。

日本でのタレント時代（リセル第 4 回）

★シャロンのその後

「クーヤはシャロンが好きだったでしょう？ シャロンはね。2 回目の来日で出会ったお客さんと恋に落ちて、結婚して今日本に住んでいるはずよ」

インタビューを始めようと思った矢先、出鼻をくじかれてしまった。そう、僕は機会があれば、いや、そういう機会を作ってシャロンに求愛したいと思っていたので、シャロン結婚の事実を急に突きつけられたことは喜びでもあり、ちょっとショックでもあった。

「クーヤがいけないのよ。私に気を使って、シャロンにアタックしないから、こんなことになっちゃって。私たち初めて千葉の最初のお店で会った時からクーヤが好きで、シャロンもクーヤから求愛されるのを待ってたのよ」

終わってしまったことをどうこう言っても仕方ないが、僕はリセルの話を聞きながらちょっと惜しいことをしたなあと思っていた。それにしてもリセルも僕に好意を持ってくれていたとはあり

がたいことだ。

もし僕がリセルに求愛していたとすればあっさりカップル誕生で、今頃、彼女は自分の妻として僕の姓を名乗っているかもしれないと思うと、なんとも不思議な人生めぐり合わせを感じずに入られなかった。しかし、実際には生まれつきの優柔不断さから、僕はどちらにも求愛することもなく、結局二人と僕の間には何の恋愛物語も起こらなかった。

「クーヤ、ごめんね。私ばかり話しちゃって。インタビュー始めてね」

彼女に主導権をとられてヨレヨレのスタートになってしまったが、旧友へのインタビューの始まりにはこれくらいのイントロは必要だったのかもしれない。

★初めての体験

僕がまず興味があったのは、うぶな彼女がなぜ売春婦に変貌して行ったかだ。

タレント時代にも彼女の中に変化が起こっていたに違いない。僕は彼女の中の変化についてかなり直接的に聞いてみた。

「君と初めて会った時は、おどおどして男慣れしていないことはすぐわかったよ。でも今は世界に名の知れた LA カフェに出入りするホステスだ。その間には君の中で心境の変化とか、男性経験を積んだとかいろいろな変化があったと思うんだけど、タレント時代、僕たちが会わなくなってから君にどんな変化があったの？」

ちょっとストレートすぎたかなあ、と思いつつ僕は少しおどおどしながら彼女の返事を待った。売春婦と言わず、ホステスという言葉を使ったが、フィリピンではホステスは単なる酔客の話し相手だけでなく、最後までお供するパートナー、つまり売春婦と実態はほとんど変わらないのだが、僕はどうしても彼女を売春婦とは呼びたくなかったのだ。

僕の質問を頭の中で繰り返してからリセルは答えた。

「初めて日本に行った時は、男の人に接するだけで体がガタガタ震えるほど怖かったの。私もシャロンも生涯たった一人の彼氏もいたことがなくて……私たち二人ともクーヤに会った時はバージンだったのよ。でもある時『結婚を前提に付き合おう』って言うお客さんと初体験してから私は変わって行ったの。シャロンはそのまま初めての彼と結婚できたんだけど、私の初めての彼氏は遊び人で……後悔したけど仕方がないわね」

二人が恋愛には奥手で、男性経験はほとんどないとは思っていたが、二人ともバージンだったとはちょっと驚きだった。と言う

のは僕らが出会った当時、シャロンもリセルもともに見かけは若々しかったが、24歳とそこそこのいい年齢だったからだ。でもさすがダバオ出身の女性は違うなとも思った。カトリックの教えに基づく伝統的な性規範『処女性というものは将来の夫にささげる最高の贈り物』を二人とも守っていたからだ。もちろん現代のフィリピンでは、こうした性意識は、マニラなどの大都市部を中心に急速に崩れてきており、「セックスは恋愛の一部」とか「セックスはゲーム」と考える若いフィリピーナも急速に増えてきている。しかしその一方で、地方部には伝統的な「セックスは神聖なもの」という性意識を固持している『フィリピン撫子』とでも言うような若いフィリピーナがたくさんいる。

シャロンは結局2回目の来日時にお店で知り合った初恋の人である日本人の建設労働者とめでたく結婚。

僕がフィリピーナの性に対する意識に思いをはせている時、リセルは過去の傷心の恋愛を振り返っていたようだ。古傷を掘り起こすようで申し訳なかったがあえて聞いた。

「それで初めての愛につまづいてから君の恋愛関係はどうなっていったの？」

「シャロンに先を越されたから私も早く本当の恋人を見つけて結婚しようとあせっちゃったの。この人だと思う人に出会えると、すぐにのめり込んじゃって、すべてを捧げては相手にほかの女性がいることがわかって終わり、っていうことの繰り返しだった。性に対する考え方も変わったわ。愛し合っていればそうなるのが当たり前って思うようになったの」

「恋多き女に変身したって言うことかな？ そしてその時から仕事のためにセックスもするようになったの」

僕はちょっと意地悪な質問をした。

「恋多き女になったのは間違いないわ。でもクーヤ信じて。私、LAで仕事を始めるまで一度だってお金のためにそんなことをしたことはないわ。ただ好きな人と性的な体験を重ねるうちにだんだんそういうことに抵抗がなくなってきたのは間違いないわ」

彼女の目は必死でかつ真実の輝きに満ちていた。

「君を信じるよ。君は決して悪いうそをつく人じゃない」

「ありがとう。クーヤ」

★ 3ヶ月で終わった2度目の来日

いきなりプライベートでかなり重すぎる質問。僕はちょっと雰囲気を変えようとしてみた。

「タレント時代全体を振り返ってどう思う？」

リセルはまた少し考えてから答えた。頭の中では2度の来日のい

ろいろなシーンが光のように駆け巡っているに違いない。

「いつも指名や同伴のプレッシャーが大きくてすごく苦勞してたわ。ただ常連のお客さんができて、その人と恋人同士になってうまく行ってる時は楽しかったわ。でもね……」

彼女が眉間にしわを寄せ、急に険しい表情になった。僕はしばらく彼女を見守っていた。リセルが重たい口を開いた。

「最後の来日でお客さんを取り合うトラブルがあったの。地元の建設会社の社長Nさんが私を気に入って毎日指名してくれて、いつも1万円のチップを置いてってくれたの。そのお客さんはもともとお店一番の古株キャシーのお客さんで、キャシーがものすごく焼きもちを焼いて『あんた私のお客を取ったわね。お店にいられないようにしてやるからね』って言われて……それからがひどかったのよ。キャシーはタレントのリーダーで店長の愛人だったから誰も口答えできなかった。ドレスにタバコの火で穴をあけられたり、持ち物を隠されたり、店長と共謀して同伴や指名のポイントを減らされたり、ともかくいろいろな嫌がらせを受けて……」

リセルは急に口をつぐみ、唇を強くかみ締めたかと思うと、屈辱の日々をリアルに思い出したのかすすり泣き始めた。僕は大きく震える肩をそっと抱いて

「つらいことを思い出させて悪かったね。僕は君の味方だよ」

となだめた。雰囲気を変えるはずの質問が彼女の別の古傷をさらに掘り返す結果になってしまった。

客の少ないクラブでの羽振りのいい客の争奪戦。女同士の骨肉の戦い。その詳細に非常に興味があったが、これ以上は聞けなかった。ただ、人のいいリセルが折れて身を引いたことは容易に想像がついた。

「それで結局、お店にしばらくなくなって帰国を早めたの。2度目の来日は3ヵ月で帰ってきちゃった。サヨナラパーティで『サヨナラの向こう側』を歌っている時、これで私のジャパユキ人生を完全に終わりにしようと決心したの。うれしさと寂しさがこみ上げてきて涙が止まらなかったわ」

改めてリセルにとってタレント時代って何だったんだろうと僕は思った。一言で言えば過去だ。まかり間違えばその時代に僕とリセルは結ばれていたかもしれなかった。シャロンともリセルとも恋のターゲットを決めかねていた僕は、結局二人ともいい友だちで終わってしまったのだけれども。

いまさら何を言ってもしかたないのだが、僕はリセルにその当時の思いを告白しておきたい衝動に駆られた。告白の内容は、千葉のクラブで初対面の日、僕はリセルとシャロンの二人に同時に恋したことだった。僕はリセルの反応が見たかったのだ。

「私の人生が狂っちゃったのはクーヤのせいだわ。はっきり好きだといってくれれば私はすぐOKだったのに。シャロンに告白しても同じ結果だったわ。私たち二人は、初めて会ったときから、やさしくて思いやりがあって、話のわかるクーヤが大好きだったんだから」

リセルの答えは予想通り。僕は満足と後悔の入り混じった気持ちで彼女の言葉を聞いていた。

帰国、そしてLAへ（リセル第5回）

★観光ガイドの仕事

最後の来日から帰国すると、リセルの持ち帰ったお金はほんの2、3日でなくなってしまった。家族が生活費のためにしていた借金の返済を済ませたらもう一文無し。家族で仕事を持っているのは彼女だけだから、家族を養っていくためには、帰国直後の出稼ぎ疲れを取り除くために休むまもなく、すぐに就職しなければならない。そして最後の来日で知り合った親友エステラが勤めているジャパニーズ・カラオケにすぐに就職した。

『もうカラオケはごめんだわ』なんてわがままは言ってはいられない。働き始めて3日目に付いたお客に気に入られ、『夜の付き合いはなし』という条件でマニラの旅行ガイドの話を持ちかけられ、1日2,000ペソで請け負い、それがリセルにとっての大きな転機となった。旅行ガイドは意外とおいしい仕事かもしれない。日給250ペソのジャパニーズカラオケで耐え忍んで働くよりも、ガイドで大きく稼いだ方がいいのではないかと思ったのである。そんな話をエステラにしたところ、『夜の付き合いの方が旅行ガイドよりもお客を探すのも簡単だし、お金になるわよ』と言われた。確かにエステラのいう通りかもしれない。しかしリセルはまだそこまでふん切れなかった。

いずれにせよ、ジャパニーズ・カラオケは日本に行きたくても行かれない元ジャパユキと、田舎から出てきたばかりのジャパユキ志願の若いフィリピーナであふれ帰り、お客を獲得すること自体が熾烈だった。それに指名や同伴がなければ給料はどんどん減っていく。勤めて2週間、もう二人にはカラオケにとどまって日銭を稼ぐ理由はなかった。リセルはエステラを追うように、カラオケをやめ、LAデビューを果たした。もともとゴーゴーバーが集合しているエドサ・コンプレックスでダンサーをしていたエステラにしてみればLAで肉体営業することなど古巣に戻るようなものでたいしたことではなかったが、売春経験のないリセルは、はじめはホステス（最後までお相手する女性の呼び名）ではなく、あくまでガイドとして最後までのお付き合いまではしない方針で仕事

を始めた。

実際、LA デビューした初日からエステラはオールナイトで 5,000 ペソの客を釣り上げた。しかし、ガイドが限度とこだわるリセルには中々客がつかなかった。初めてリセルに客が着いたのは、LA に通い始めて 1 週間後。ドライバーつきでレンタカーを借り切った日本人観光客にマニラの名所を案内することになったのだ。しかし、イントラムロス、ルネタ公園、マニラ湾クルーズ、マニラ動物園、シュー・マートでのショッピングなどお決まりの観光を終えたと、温厚な初老紳士の S さんは、

「今日はありがとう。楽しかったよ」

と言って約束の 2,000 ペソに 500 ペソ上乗せして 2,500 ペソくれた。しかし、喜んだのもつかの間、リセルは S さんから恐れていた申し出を受けることになる。

「君がすっかり好きになった。観光は終わったけど、今晚このまま朝まで付き合ってくれないか。さらに 5,000 ペソ払うよ」

リセルは一瞬考えてすぐに S さんの誘いに乗った。

「S さんがタイプだったこともあるわ。でも結局 5000 ペソの誘惑に負けたの。それが私の本当の意味での LA デビューよ。それから 1 週間に二人くらいの頻度でお客さんが取れるようになったわ。ショートタイム（3 時間以内）が 1,500 ペソ、オーバーナイト（6 時間～9 時間）で 3,000～5,000 ペソが私の相場よ。お客さんは日本人だけって決めてるの。気持ちもよく分かり合えるし、アブノーマルな人も少ないし、気前はいいしね」

そんな話をしていると、ルームメイトのエステラが帰ってきた。

★大金を稼げる仕事

「こんにちは。クーヤ。私のこと覚えてる?」

「あー、覚えてるよ。LA カフェの入り口で立ってるのを何度か見たことがあるよ」

170 cmを超える長身。スペイン系の血の混じった鼻筋の通った少し野性的で精悍な顔立ち。紺のタイトなストレーツ・ジーンズに包まれた長い足。黒くつややかな黒髪。けだるそうにタバコをくゆらせたかと思うと、さりげなく足元に投げ捨て、ブーツのヒールで踏み消すプロの娼婦の風格を感じさせる彼女が LA カフェの入り口にたたずむ姿は、ひときわ印象的な光景として瞳の奥に焼き付いていた。文句のつけようのないいい女だった。

「君がエステラだね。よく LA の入り口で見かけたよ。本当かっこいい女性だなと思っていつも見てたよ」

お世辞のつもりではなく、彼女の印象をそのまま本人に伝えただけだった。

「ありがとう。ボラボラ（ゴマすり）上手ね。クーヤは覚えていないかもしれないかもしれないけど、埼玉のお店でも私たち会ってるのよ。私は覚えているのに、クーヤは冷たいわね」

と言いながらもエステラはうれしそうに微笑んでいた。そして、「ごめんなさいね。今インタビュー中なのよね。じゃあ、私は先に仕事行くから。さよなら」

僕は日本帰りのホステスの出勤を、彼女たちの寝ぐらである薄汚いホテルの一室から見送った。

エステラは、年齢こそ 23 歳とリセルより 3 つ若いが来日前からエドサ・コンプレックスでゴーゴードンサーとしてバリバリ肉体営業していただけてさすがに風格があるなと思った。

エステラの突然の帰宅で話がちょっと中断してしまったが、僕はなぜ普通の女の子リセルが売春婦になってしまったのか、自分なりに総括しておきたかった。ここで彼女にはちょっと酷な質問をした。

「リセル。結局君は何でホステス（売春婦）になってしまったんだと思う？」

この質問を聞いた瞬間彼女の瞳はひときわ大きく開き、ほほが紅潮して痙攣しているのがわかった。『やはりここまで聞いてはいけなかったのだろうか?』と思い始めた時、彼女は気を取り直したように穏やかな表情に戻って淡々と話し始めた。

「私の心が弱かったの。それにほんのわずかの給料のためにせつせと地道に働くより、簡単に大金が稼げる仕事を選んでしまったのよ。私の大きな罪よ」

より簡単に大金を手にする方法という分析は十分に説得力のあるものに思えた。

父の公然の浮気（リセル第 6 回）

★出費も大きい今の暮らし

「稼ぎも大きいけど出費も多くて何とか食べてるっていう感じ」

僕がリセルの今の暮らしぶりに話を向けたときの第一声だ。

「1 ヶ月、ほとんど毎日 LA に出入りしてお客さんが取れるのは月 7 日か 8 日くらい。近くのホテルについていって話をするだけっていうお客さんから、オールナイトでフルサービスのお客さんまでいろいろよ」

彼女は肝心なことを中々言ってくれない。僕は彼女の話さえぎって聞いた。

「それで 1 ヶ月平均で、どれくらいの稼ぎになるの？」

彼女はかばんから小さなノートを取り出して計算を始めた。チラッと覗き込むとそこには日付と金額が書いてある。彼女の売

上帳と言ったところか？ 先月は 8 人のお客さんで 25,300 ペソねえ。他の月も大体それくらいだと思うわ」

こともなげに彼女は言ったがこれは相当すごい額だ。円換算で約 58,000 円。最後の来日時の給料 550 米ドルとほぼ同額だ。これだけ稼いでいるのに日々の暮らしに苦労していると言うのが不思議だった。

そこには彼女の複雑な家庭事情があった。

リセルは 1979 年、ダバオで 3 人姉妹の長女として生まれた。6 歳の時に父親の仕事のため、マニラの南西部に隣接するカビテ州に移り住んだ。父親は腕のいい電気工事師でリセルの幼少時には貧しいながら家族仲良く、食にも困らない暮らしを送っていた。そんな暮らしが狂い始めたのは母親が 3 番目の子供を出産してから体調を崩して家で寝込みがちになってからだった。

父親は自分の性生活の相手はもちろん、家事すらも満足にこなせなくなったお母さんをあっさり見限り、潜在的に持っていた浮気癖を一挙に開花させた。母親を子供部屋に追いやり、夜な夜な違う女性を家に連れ帰り、床をともにするようになった。父親の公然の浮気は当然副産物をもたらした。父親の愛人たちは次々と妊娠・出産。狭い家は子供であふれかえった。家はいつも、争いと混乱にあふれ、リセルにとっては決して安らぎの場所ではなくなった。

父親は家にろくに家にお金も入れなくなり、リセルたち母子の暮らしは急に逼迫しだしたのだった。リセルが小学校を卒業する頃からは食事も 1 日 1~2 回になり、何とか高校に進学しても、父親は勉強に必要な文房具代や通学ための交通費すらも出してくれなくなって、彼女は 2 年生半ばで高校を中退することになった。近所の雑貨店の店番をしながらお母さんを手伝って家事をするだけの日々が何年も続いた。まともな就職をしたくても高校中退ではまったくチャンスがなかった。

そんな生活に転機が訪れたのは、近所で日本に出稼ぎに行った娘が帰国して、御殿のような素晴らしい家を建て、急に彼らの暮らしぶりがよくなったことだった。リセルはすぐにそのジャパユキにプロモーションを紹介してもらった。22 歳の時、2001 年のことだった。

紹介してもらったプロモーションのオーディションを受け、すぐにプロモーションの所属のダンサーになった。そしてマカティ市内のローカルなカラオケなどでの実地訓練とプロモーション事務所でのダンサーとしての訓練など、3 年間の時を経て彼女のジャパン・ドリームは、ようやく序章の幕開けとなったのだった。

「私、兄弟が何人いるかわからないのよ。本当の兄弟は3人だけど、お父さんが外で作った兄弟は数え切れないわ。今、『家には14人が暮らしてる』って一番下の妹がこの前あった時に言ってたわ。でもとにかくこの家族を助けるために私が何とかしなきゃいけないと思って行動を起こしたの」

彼女は運命とあきらめているのか淡々と語った。しかし、そこには長女としての責任感がしっかりと感じられた。それでも実際、そんなに大勢の家族(?)を彼女一人できちんと養っていかれているのだろうか? 僕は疑問をストレートに彼女にぶつけた。

「君一人で、彼らを養えてるの?」

「うーん、できるだけことはしてるわ。でも養えてるのかどうか、わからない。私たちが住んでいるホテル代1ヶ月15,000ペソのうち、私の払い分5,000ペソ、それから洋服代とか、化粧品代、食費、性病検査とか性器洗浄とかの病院代を残してあとは全部、月に15,000ペソくらいはお母さんに送ってるわ。でもそれでも足りてないみたいね」

彼女は、必ずしも助ける必要のないかもしれない擬似家族まで抱え込んで文字通り体を張った必死の努力をしているのがよくわかった。この国では売春は絶対悪だ。しかしここまで聞いてしまっただけで、僕は彼女を心の中で支援しないわけには行かなかった。

★リセルの仕事・ホステスの愛

僕はここで彼女の一日の流れを聞いた。仕事はハードでも時間の流れは平坦なものだった。

前日にお客がつかなかった時は午後2時頃に起きてまずシャワーを浴びる。それからルームメイトといっしょに午後3時ごろ近くの簡易食堂で昼食。そして部屋に戻ってテレビを見たり、ルームメイトと話をしたりして午後6時頃まで時間をつぶす。そして午後6時頃、また近くの簡易食堂で夕食。それから部屋に戻って入れ替わり立ち代りシャワーを浴びるのが7時頃、ゆっくりと着替え、念入りにメイクアップして午後8時ごろにLAに入店する。それから翌朝6時くらいまでお客を求めて店で待機する、といった具合だ。

お客がついた時は、ケース・バイ・ケースだ。

ここでリセルの仕事振りやセックス・ワーカーといわれる女性たちの具体的な仕事ぶりについて少し掘り下げて聞いてみた。

「もうかれこれ9ヶ月も仕事してるわけだけと、君のスペシャルサービスは?」

「クーヤったら。恥ずかしいわ」

彼女は一瞬はにかんだあと、言葉が続けた。

「特別なサービスなんてないけど、私のお客さんは日本人だけだから、日本人が喜んでくれるサービスを心がけてるわ」

「日本人が喜ぶサービスって」

「恋人みたいな雰囲気を作ることね。言葉とかしぐさとか」

なるほど、日本人はセックスに関してはロマンティスト、欧米人は野獸的とよく聞くが彼女のサービスの基本も的を得ているようだ。リセルは自分のサービスについてさらに続けた。

「あと、アブノーマルなことは除いてお客さんが望むことは何でもするわ」

「何でもってたとえば?」

彼女はうつむいて恥ずかしそうに顔を真っ赤にして話し始めた。

「いろいろなポジションとか、フェラチオとか、それからコスチュームプレイとか。日本の高校生の制服を着せられたりしたけど、私がお客さんのリクエスト通りにするとみんなすごく喜んでくれた。それくらいはもう慣れたわ。ただ、ものすごく太くて長いバイブレイターとか、ロープとかろうそくとか、ムチとか、そういうのはもう勘弁してほしいわ」

彼女は昨日の悪夢を思い出すように顔をゆがめて話した。

「やっぱり、そういう趣味のお客もいるんだね」

「いるのよ。でもたった一人だけだったけどね。ほとんどがノーマルな問題のないお客さんよ。その変態趣味のお客さんには今も付きまとわれて困ってるわ」

彼女の眉間のしわがどんどん深くなっていった。

困った客（リセル第7回）

★アブノーマルな日本人

ノーマルな嗜好のホステスが、アブノーマルな客に悩まされるのはよくわかる。しかしリセルにつきまとう困った客とはどんな客なのだろう?

「困った客ってどんな人なの?」

リセルは陰しい表情のまま、イライラしたような口調で答えた。

「まだ、私が LA での仕事を始めて間もない 2 番目のお客で H っていう人なの。60 歳で日本の大企業を定年したばかりで、奥さんにはちょっと前に死に別れて今は独身らしいの。第一印象は温厚な初老の紳士でいい人だと思ったの。しかも 1 日 15,000 ペソで 3 日間お願いしたいって言うの。始めはラッキーだと思ったの。でも実際には、セックスがすごく強くて最初の晩に 5 回もされたわ」

すごいスタミナだ。ED に悩む男性たちがうらやむことだろう。僕はその驚きを素直に表現した。

「60 歳で 1 晩 5 回って、そんな話聞いたことないな。それで君は疲れて困ったっていうこと?」

と僕がリセルの困った理由を総括しようとしたら、彼女は首を横に振りながら言った。「それだけじゃないの。一晩に 5 回っていう異常なスタミナにもついていけなくて苦労したけど、もっと大変だったのは H がサディストだったことよ。初日は小さめのバイブレーターをちょっと使うだけで許してくれたからまだ我慢できたわ。でも 2 日目・3 日目になると、エスカレートしてきて、最後の晩は、四つんばいの体制でベッドに手錠で両手をつながれて、体をロープで縛られて身動きできないようにして、体をむちでたたかれて、二つの穴は彼自身と、ものすごく太くて長いバイブレイターでふさがれて、痛いし、恥ずかしいし、最悪だったわ」

60 歳の絶倫サド男、僕も聞いているだけで気分が悪くなってきた。そんな気持ちの悪い男となぜ縁が切れないのだろうか?

★縁を切れない理由

「それでもその絶倫サド男とは縁を切れないんだよね」
「そうなのよ。3 日間彼が滞在しているホテルに滞在したんだけど、3 日目にいっしょにハリソンプラザ（マニラ市南部の大きなショッピングモール）に買い物に行ったの。通路で不動産屋さんが建売住宅の模型を置いて物件紹介をしていたの。H が『僕らの家を買おう。どれがいい?』って聞くから、130 万ペソの家を指さして『これがいいわ』って言ったら、『じゃ買ってあげるから引越しの準備しておいて』って言うのよ。『なに冗談言ってるの!!』って私は思わず笑っちゃったわ。

地獄のような 3 日間が終わって、H がレンタルしてた車で私の家まで送ってくれるって言うんで、彼に家の場所を知られるのはいやだったけど、私が LA で仕事をしていることは家族の誰にも言わないって約束させて、送ってもらったの。家に着くと、H は片言の英語でお母さんやお父さんといろいろ話してたけど、私はもう疲れ果ててすぐに空いてたベッドで眠り込んでしまったわ。H と過ごした 3 日間の後は体中痛いし、気持ちは悪いし、思い出すのも虫唾が走る、おぞましい経験で仕事をやめようかとも思ったの。

そんな矢先にね、H と別れてから 1 週間後くらいかしら、『お前がほしいって言ってた家を買ったぞ』って電話がかかってきたの。それでも半信半疑だったわ。彼とは二度と会いたくなかったんだけど、本当に買ったのかどうか確かめたくて LA で待ち合わせて、彼のレンタルしていたワゴン車に乗ったの。車に乗って 1 時間。模型で見たとおりの家が目の前に現れたわ。その時もしかしたら本当にこの人、本当にこの家を買ったのかしらと思い始めたけど、

それでもまだ完全には信じていなかったの」

「じゃ、本当に買ったんだと信じたのはいつ？」

「H といっしょにその家に入ったら何と私の家族が全員、その家に引っ越してたのよ」

「えーっ、ということは……」

「私が H に昔の家まで送ってもらった時に、両親は H に、私と彼が結婚を前提にして付き合ってた、愛の証として家を買ったからすぐに引越するんで引越しの準備をするように言われてたんだって。それでその時に『リセルを驚かせたいから、彼女は最後に家に連れてくる』って家族に説明してたらしいの。私を新しい家に連れて行く前に家族全員を先に引越しさせてたってわけ」

「でも、さっと 130 万ペソの家を買って、家族のことまでそんなに気を配ってるなんて、H という人は相当君のことが好きみたいだね」

僕は尋常ではない H 氏の行動にリセルへの並々ならぬ入れ込みを感じた。

「そうね。でもどんなに気に入られても私はやっぱり変態男は嫌い。一生いっしょなんてごめんだわ。お金のために彼の変態的な性行為に 3 日間だけ耐えたけど、限界よ。両親も兄弟もこれだけ愛されてるんだから結婚してあげてもいいんじゃないってしつこく私を説得しようとしたわ。H と私が結婚すれば一家の暮らしがよくなるのは目に見えてたから。でもやっぱり私は自分が愛する人と結婚したいの」

なるほど、もっともだ。僕はリセルの言葉に『体は売っても心は売らない』という意地と、彼女の純粋さを感じた。

「それで今、その家はどうなってるの？ 外国人は家の建物は買っても土地は買えないはずなんだけど、H さんの買った土地の名義人は誰なの？」

僕は素朴な疑問を彼女に投げかけた。

「家族はずっと住んでるけど、私は一度も帰っていないわ。いつも H が私の家族と一緒に暮らしているし、時々日本に帰ったかと思うとまたふらっとやってくるから顔を合わせたくないの。名義のことは興味がなくて聞いてないからわからないわ」

「そうか、なるほどねえ」

虫唾が走るような変態男が待っていたんでは家族がそろっていても家に帰りたくはないだろう。また H が買った家など彼女にとっては、自分の家じゃないのだから誰のものであらうと興味がないのも無理もないことだ。

変態男 H 氏の大判振る舞いでリセルの家族は当面、家賃の負担をしなくてすむ。食費や光熱費などの負担もない。リセルの家族

の面倒を見るのは自分の責任ということで、H が彼女の家族の生活費すべてを自分のふところから出しているというのだ。

しかし、H がリセルをあきらめた時、H はリセルの家族を家からたたき出し、家族はまた貧乏暮らしに逆戻りすることをリセルは知っている。だから家族の生活費を H が出している時も、彼が日本にいて生活費までは出してくれない時も、毎月毎月せつせと母親宛てに仕送りしているのだ。

父親と完全に家庭内離婚状態の母親は、リセルと自分の二人の娘という自分にとっての本当の家族のため、仕送りをしっかり貯金しているという。

現在、リセルの最大の願いは、精力絶倫の変態男 H 氏がさっさいなくなってくれることだ。

懺悔と将来設計（リセル第8回）

★良心の痛み

普通の素朴なフィリピーナだった彼女がホステスにまでなり、どんな心の痛みを感じているのかも知りたかった。フィリピーナとしての伝統的な性のモラルを持っている彼女だけに、現実の仕事と良心の間で強烈な心の葛藤があるに違いない。

「仕事をしている時は、考えないようにしてるけど、自分がとんでもない罪を犯しているっていう意識はいつも心の片隅から離れないわ。やっぱり私の心が弱いからこんな仕事をしてるんだと思う。だってどんなに貧しくても絶対売春なんかしない女の子だってたくさんいるんだから。自分で自分をいつも責めてるわ。だから私もエステラも毎週日曜日の朝は必ずバクララン教会のミサに出て、その後は自分たちの罪を懺悔（ざんげ）してるわ。どんなに疲れていても週1回のミサの参加と懺悔は欠かしたことがないの。それから私の仕事についてはお母さんたちにはジャパニーズ・カラオケで働いてるってうそをついてるわ。お母さんは『日本人はみんな大金持ち』だと思ってるから私の言葉を信じきってるの。もしこの仕事がバレたら、お母さんは自殺しちゃうかもしれない」

うなだれる彼女を見つめながら、僕は彼女たちも重い十字架を背負ってこの肉体労働をしているんだなあと思えて思った。顔を上げると、彼女の目は涙で潤んでいた。そして絞り出すような声で言った。

「本当に好きな人ができたら、この仕事絶対にやめるわ」

僕はその言葉にうそはないと思った。

★将来に向かって

昔なじみ、しかもちょっと色っぽい関係になりかかった女性との再会ということもあって話はあっちこちに脱線し、時計に目をやると、インタビューは約束の 1 時間半をとっくに過ぎ、3 時間に迫ろうとしていた。彼女の将来への夢に関する質問をして早く仕事場に戻してあげなければならない。僕は最後の質問を彼女に投げかけた。

「今の境遇では考えにくいかもしれないけど、君の将来の夢を聞かせてくれないかい？」

リセルは幸せの青い鳥を追うように一瞬遠くを見つめた後、おもむろに話し始めた。

「とにかく信頼できて心から愛せる男性と結婚して自分の家族を持ちたいわ。でもフィリピン人は絶対いや。私のお父さんの話でわかってもらえたと思うけど、フィリピン人の男はみんな浮気者で、一人の女じゃ満足しないのよ。それに怠け者でしょ。私は結婚するなら、信頼できてフィーリングが合って働き者の日本人男性が絶対いいわ」

フィリピン人男性の肩を持つわけではないが、フィリピン人男性だって一途な人はたくさんいるし、日本人男性だってパロパロ男や怠け者は数え切れないほどいる。実際リセルだって日本でタレント時代にパロパロ日本人男の被害に何度もあっているはずなのだが……僕はあえて彼女の言葉の矛盾を指摘することもなく、黙って聞いていた。

ただ、家族が崩壊せずいつもひとつにまとまって衣食住が足りた生活を送れるためには生活基盤がしっかりしていなければならないし、そのための具体的なプランがなければならない。もしかしたら自分の妻になっていたかもしれない人だからこそ、友だちとして彼女の将来設計も聞いておきたいところだ。

「結婚してもちゃんとした経済的な基盤がなければ、家族は崩壊してしまうよね。君は家族がきちんと暮らしていけるようなビジネスプランとかはもうちゃんと持ってるの？」

「ええ、クーヤ。今、お母さんたちが住んでる家は仮の住まいだと思ってるわ。あの変態男が私に飽きたら、私の家族をみんな追い出すでしょうね。だから私はまず、本当の家族のための家がほしいわ。本当の家族ってお母さんと本当の妹二人のことよ。この予算が 50 万ペソ。それからまずそこで小さなサリサリを始めたいの。その予算が 5 万ペソ」

リセルは僕の予想に反してある程度具体的なプランを持っていた。

当面の貧しさからの逃避のため、仲間に誘われる形で、カラオ

ケというまだまっとうな仕事の枠を踏み越えて売春の世界に足を踏み入れたほかの女の子たち同様、リセル本人が言っていたように、売春を絶対容認しない女の子たちに比べて彼女自身の性のモラルがゆるいという感は否めない。以前インタビューしたローナのようにどんなに生活が苦しくてもカラオケだけでがんばっている女の子だってたくさんいるのだ。そんな女の子たちから見れば一線を超えてしまったリセルの行動は非難されるべきものなのかもしれない。しかし、今の僕にはリセルを責めるような気持ちはまったく起こらない。

今回の一連の取材を通じて売春はこの国にとって必要悪なのだと強く感じたからだ。きれいごとではすまない、生きるか死ぬかの瀬戸際の生活で、女であることを売り物にするしか生きる道がない女性がこの国にはたくさんいるのだ。

その行為を非難するなら、命を投げ打つ覚悟で売春のないフィリピンの政治・社会変革活動に身を投じるか、売春せざるを得ない女性たちにまっとうな仕事の機会を作ってからにするべきだろう。それができなければ、彼女たちを非難する資格はない。非難は単なる弱者いじめだ。

僕自身は、日本国籍を捨て、フィリピンに帰化してフィリピンの政治の世界に深く踏み込んで命がけで社会の変革に取り組むまでの覚悟はまだできていないし、売春せざるを得ない女性たちに仕事の機会を提供するようなビジネスを手がける才能も財力もない。そう思うとなんとも歯がゆい思いで一杯になる。

気になる三角関係（リセル最終回）

★「候補者」の二人

リセルは強い結婚願望を口にしていたが、現在の彼女の恋愛生活はどうなっているのか、きちんと聞いていなかった。素敵な出会いとその延長の結婚とトントントン拍子にことが運べば、彼女も普通の主婦として再出発できる。

「そう言えば、君の現在の恋愛生活を聞いてなかったんだけど、誰かめばしい恋人候補はいるの？ タイプだったから身を任せた最初のお客のSさんとか……」

「Sさんも候補者の一人ね。Sさんは2ヶ月に一度はフィリピンに来てそのたびに私を連れ出してくれるわ。Sさんが私でもいいって言うてくれればうれしいわね。Sさんはね、さっき言った通り会社員なんだけど、スケジュールをやりくりして毎月二泊三日の日程で私に会いに来てくれるのよ」

なるほど、Sさんもかなり本気でリセルに入れ込んでいるようだ。

僕が大きくなずきながら聞いていると彼女はさらに続けた。

「でもね、クーヤ、もう一人候補者がいるのよ。昔の日本でのお客さんでね。さっき話した建設会社の社長の N さん、覚えてる？」

僕は少しびっくりした。なぜなら、この N さんを取り合って、結局古株のタレントに奪われてしまっていて終わっていたと思ったからだ。リセルはうれしそうに N さんのことを話し始めた。

「私が日本から帰って 2 ヶ月後に N さんから電話があったの。『君が俺のことを本当は大嫌いだとか、俺に付きまとわれたくないから君が 3 ヶ月でフィリピンに帰ることになったって店の女の子とたちに聞いてたから身を引いたんだけど、最後に一度だけ君の口から確かめたくて電話したんだ。しつこかったらごめんな』だって」

「それは事実と大違いだね。それで君は N さんにきちんと本当の事情を説明したんだね」

「ええ。焼きもちを焼いたキャシーにいじめられてお店を追い出されるように帰国したこと、N さんが私のタイプなことも話したわ。そうしたら N さんはその数日後に初めてフィリピンに来てくれたの」

N さんの初来比の日、リセルは、英語もタガログ語もまったくできない N さんをマニラ国際空港まで迎えに行き、N さんが日本で予約していたホテルに同行。今の暮らしや家族のことから何から何まですべてを包み隠さず話したのだという。

「N さんは、『そんなこと気にするなよ。今の君が好きだ。結婚したい』って言われて、すぐに結ばれちゃったの」

「プロポーズされたんだ。それですぐに OK しちゃったの？」

「いいえ、私の気持ちもさっきクーヤが私に言ったのと同じ。クーヤがシャロンと私の二人を同時に好きになったように、私の心の中には N さんと S さんの二人がいるの」

なるほど。それで彼女はどうか決断するのだろうか？

「N さんにも S さんにも、私はもう一人好きな人がいるって正直に言ったわ」

僕はまた驚いた。そしてうれしかった。売春という絶対悪の世界まで堕ちたリセルだが、二人の日本人の好意を逆手にとって金づるにしようとしないうちに、彼女はまだ汚れていないと確信できたからだ。僕はまたここで、おせっかい癖が出て N さんと S さんが今現在独身なのかどうか確認をさせてもらった。

N さんは 50 歳の建設会社社長で結婚経験のない本当の独身、S さんは世界的に有名な家電メーカーに勤務する 55 歳のサラリーマンで、10 年前に奥さんと死別。二人の子供たちも独立していて、フィリピン人女性との再婚に何の拒否反応も示していないということだった。

★幸せを祈って

実際に彼女の恋のお相手に会ったことがあるわけではないからわからないが、まずお相手は独身なのでその点だけは問題なさそうだ。あとはリセルがどちらを選ぶかというだけの問題にも見える。現在リセルはどちらとも決めかねているという。この三角関係の行く末が気にかかる。僕はただ旧友のリセルに最後に幸せをつかんでほしいだけだ。

彼女がきちんとした形で結婚できれば、彼女がさっき口にしていたささやかな夢はすぐに実現できるだろう。

しかし、彼女の結婚はそんなに生やさしいものではない。お父さんやその愛人たち・彼らの間にできた大勢の子供たちまで背負うとなると急に未来は暗くなる。どこまで面倒見るのか、つまり誰と誰を助けるかの線引きをはっきりさせなければならない。さもないと、彼らに経済的支援を求められて身動きが取れなくなってしまうことは目に見えている。その一方で彼女が笑顔で赤ん坊をあやす姿も脳裏をかすめる。リセルの将来のことを考えて僕は彼女を置き去りにして物思いにふけてしまった。

「どうしたの？ クーヤ!!」

と言われて僕はわれに返った。

「シャロンのことでも考えてたんじゃない？」

リセルがぜんぜん見当違いのことを言った。シャロンか?! 懐かしい名前だ。彼女は今日本に暮らしながら、日本人の夫の支援を受けて故郷ダバオでレストランを始め、営業は家族に任せているらしい。『また、後手を踏んでしまったな』と僕は苦笑いをしながらもうれしきで一杯だった。それにしてもいつもいい人で終わってしまう自分が改めてふがいなかった。僕は、

「君の将来のことを考えていたんだよ」

と言った。リセルは何とも言えない微妙な笑顔を浮かべた。

また、僕の物思いで会話が途切れた。気がつくとしセルがついさっきまで腰掛けていたベッドで横になってすやすやと寝息を立てている。連日の仕事の疲れがたまっているのだろう。耳を澄ますと吐息が一定にリズムを刻んでいる。

リセルのたどった道のりは決してほめられたものではない。でも僕は、根っからの悪人でもなければ、根っからの売春婦でもない旧友にある種の共感のような気持ちを感じていた。

約束の1時間半をはるかにオーバーして3時間もインタビューにつき合わせてしまった。

僕は用意していた封筒に、約束のインタビュー代の500ペソでは

なく、彼女の通常のショートタイム料金 1,500 ペソを入れた。しかしそれだけでは足りない。彼女に僕の今の思いを伝えたかった。僕はいつも携帯していたノートを 1 ページ破り、そこに『今日はどうもありがとう。しばらくぶりに会えてうれしかったよ。自分を責めないで。自分を恥じないで。僕は君の生き方を支持するよ。本当に好きな人と結ばれるといいね。体を大切にね。君の幸せをいつも祈ってるよ』と書いて、封筒の中に入れ、その封筒を眠り込んだ彼女の手のひらにそっと握らせた。

そして彼女を起こさないようにボタン式の部屋のドアをそっと閉め、鍵がかかっているか確認して部屋を後にした。その安宿を出て振り返ってみた。そのたたずまいは、彼女の仕事場の喧騒と混沌と比べてすべてが地味でひっそりと静かだった。リセルのこれからの人生も喧騒と混沌ではなく、ひっそりと波風の立たないものであるように祈りながら、すっかり日の落ちたエルミタの人込みの中に僕は吸い込まれていった。

(リセルの章終わり)

予期せぬ出会い (ジョイ第 1 回)

今回から、LA カフェでフリーのホステスとして働くジョイ (? 歳) の物語です。

★夏休みの学生たち

リセルとの切なく悲しい再会はかなり尾を引いた。彼女との再会の日から数日間、僕は小さな甘い思い出と受け入れがたい過酷な現実の狭間で、とてつもないむなしさと脱力感に襲われた。しかし、取材のためのフィリピン滞在期間は約 2 ヶ月間。立ち止まっている暇などない。僕は感傷の世界に引きずり込まれそうになるのを何とか踏みとどまり、自分の気持ちを必死に立て直した。

それからちょっと冷静になって今回の取材の原点を振り返った。取材目的は、かつてエンターテイナーとして僕たちをいやし、楽しませてくれたすべてのフィリピーナたちのいろいろな『その後の』人生を追いかけ、僕と同じような興味を持った人々に彼女たちの様々な現状を伝えることだ。そのことだけのために日本から飛んで来たのだ。盛り場で働く元ジャパユキの生き方だけを追いかけに来たわけではない。むしろそれはほんの一部に過ぎない。その他にも、フィリピンの社会でまっとうな仕事について女性、自ら商売を始めた女性、主婦として家族の下に戻った女性など、追いかけるべき取材のモデルは他にもたくさんいる。

そんな意味でフリーの娼婦の溜まり場として有名な援交カフェである LA カフェを本拠に働く元ジャパユキの姿は、あくまでも一

例に過ぎない。だからこそリセル一人を紹介できればそれで十分なはずだ。だから僕が LA カフェに通う理由はもう何もないように思われた。

しかし、4 月中旬の復活祭明けと言え、常夏の国フィリピンでも一段と熱い 3 月から 5 月にかけて続く夏の真っ只中。フィリピンの学生にとって 3 月下旬から 6 月上旬にかけて続く長い夏休みは、夏季補習授業のシーズンでもある。1 学年が 6 月に始まり、翌年の 3 月下旬か 4 月の上旬に終わる学校制度の中で、夏休みは新学年分の学費や夏季特別補習授業の授業料を稼ぐために勤労女学生のアル売春が増える特別な時期としても知られている。今回の取材の目的からは外れるが、せっかくこういう時期にマニラに滞在しているのだから、そんな女学生たちのアル売春の実態も自分の目で確かめておきたくなった。それで旧友リセルとの再会後も、僕は若いフィリピーナたちのいろいろな人生との出会いを求めてもう数日だけ LA カフェに出入りを続けることにしたのだった。

実際、「私は看護学生なんだけど、新学期の学費稼ぎでアルバイトしてるの……」「私は大学生で今夏休みなんだけど、夏季特別授業の授業料で 1 週間後までに 1 万ペソ稼ぎたいの……」、学生証を見せながらそんな言葉で誘いかけてくる学生らしき女の子たちともたくさん出会った。それは僕にとって LA カフェの中で季節を感じた瞬間でもあった。

また、『お母さんが大病で緊急手術が必要でどうしても明日までに 5 万ペソが必要だから、私は処女なんだけど 5 万ペソで明日の朝まで自由にしてもいいわ』とか、明日までに家の家賃 3 か月分 4500 ペソを払わないとアパートを追い出されちゃうからお願いだから私を連れ出して』といったアプローチを受けた。あまりに真剣なアプローチに同情心から思わず札入れからお金を出したくなる場面もあった。

もちろん彼女たちの話はすべてが本当ではないだろうが、日々の生存を欠けてのそれぞれに真剣な戦いぶりはよく伝わってきた。余談ながら、母親の病気を理由に僕に言い寄ってきた 18 歳の女子大生だと名乗る女の子は、僕が 5 万ペソなどという大金は持っていないと言うと、すぐに半額の 25,000 ペソにディスカウントしてきた。彼女は僕が今宵の相手を探していると勘違いしている。彼女の話が本当だとすれば、ますます彼女の生涯一度の処女としての仕事を邪魔するわけには行かない。女性を買うつもりはないことをはっきり告げると、彼女は悲しげに僕が座っていたテーブルを去っていった。

所持金は 3,500 ペソあまり。今回の取材の趣旨に合った女性に巡

り会った時の謝礼代と食事代など、ほとんど最低限の金額しか持ち合わせていない。でも、もしこの時、5万ペソの持ち合わせがあったとしたら、母親が大病だと言う彼女に『これを使って。ただし自分を大切にすると約束してね』と言って渡していたに違いない。それだけその子の様子には鬼気迫るものがあったのだ。そして、『たった1回の行為から彼女が誤った方向に人生を踏み外してほしくない』という強い衝動に心が突き動かされていたのだ。彼女の話が嘘で僕が騙されているのであればそれはそれで自分に人を見る目がなかったと納得できる。しかし、幸か不幸か、僕には5万ペソも、50%引きの25,000ペソの持ち合わせもなかった。

家賃を払わなければ家を追い出されると言った女の子の方は、家を追い出されること自体が今すぐ人の命にかかわる問題でないこと、また直感的にその子がこの手の嘘で常習的に外国人たちを騙していると確信に近いものを感じたので、なんらの同情心もわかず、『お金がないから』と軽くかわすことができた。

★メスティーサ(混血)美の象徴

そんなある日のことだった。

「アナタ ニホンジン？ ワタシ ニホン キョネン イッタヨ」

ふいに日本語で声をかけられてあわてて振り返った。そこにはこれぞメスティーサ(混血)美の象徴とも言うべき、スペイン系の血の濃く混じった彫りの深い美少女ジョイが立っていた。やさしくも怪しい笑顔に僕は一瞬のうちにグイッとひきつけられた。黒く大きな瞳、高い鼻、あごの線が鋭角で、まなざしは鋭く、深い憂いとかげりをたたえている。5フィート(152 cm)とやや小柄だが、大きな胸のふくらみからくびれた腰のライン、そして豊かで張りのあるヒップへと続くシルエットは、コーラの8オンスびんを思わせる見事な曲線美だ。声をかけてきたのは単なる客探しのためなのだろうが、いずれにせよリセルに出会うまであれだけ見つからなかった、日本から帰国して間もない元ジャパユキにかくも簡単にまた遭遇してしまったのだった。

援交カフェで働くフリーの売春婦というプロフィールの元ジャパユキは一人紹介できれば十分と思っていた自分だが、ともかくジョイに出会ってしまった。しかもジョイには、リセルとはぜんぜん違ってプロの売春婦のにおいがする。この子はまたぜんぜん違った人生を歩んできたはずだ。また、一味違った元ジャパユキの人生に出会える予感がした。この偶然を利用して彼女の話もぜひ聞いてみたい。それで取材の趣旨を説明し、承諾を得て話を聞くために連れ出すことに決めた。となると、念のために何をおいても彼女の年齢だけは確認しておかなければならない。

「今、何歳？」

「20 歳よ」

ひとまず O K だ。17 歳以下の女の子とこの辺を歩いていると、児童買春の疑いをかけられて逮捕されてしまうかもしれないから、この確認は絶対不可欠だ。さらに念のため、僕は彼女の身分証明書 (ID) も見せてもらうことにした。つい最近も日本人観光客が、グルになった未成年売春婦と警官にハメられて、ホテルに入ろうとするところを呼び止められて捕まえられ、『児童買春は大変な罪になるぞ』などと脅された挙句、拘留を免れるために何百万円という金を払う羽目になったというような事件が何件も起こっている。用心にこしたことはない。

ジョイは、小さなバッグの中からさっと財布を取り出し、その中から 1 枚のカードを抜き出して見せてくれた。それは裁縫工場の会社名、彼女の名前・写真も入っている ID だった。生年月日も 1985 年×月×日となっていて問題はなさそうだ。

児童買春で捕まらないためのチェックが済むと、僕は、

「H なサービスは何もいらないから、今の君の暮らし、日本での出来事とか、僕が聞くことに正直に答えてね」

と彼女に頼んだ。帰ってきたのは

「いいわよ」

というそっけない返事だけだった。乗りかかった船だ。僕はインタビューがうまく行くか一抹の不安を感じながらも、3 時間 1500 ペソの約束で彼女を連れ出し、すぐ近くの日本レストランに誘った。彼女がうどんを食べたいと言ったからだ。

初対面の時の微笑が嘘のように、二人きりになってからの彼女は、レストランに着いてオーダーを終えても何かイライラした様子で、落ち着きがない。どうしたというのだろうか？ 変な客に関わったとか、女の子同士の客の取り合いとか、仕事上のストレスで神経がまいっているのか？ それとも家賃が支払えなくて家を追い出されそうとか、間近に迫った経済的問題のプレッシャーに押しつぶされそうになっているのか、僕はジョイの心のうちについていろいろ思いをめぐらしてみたが、答えは見えない。

重苦しい沈黙の中で、彼女はおぼつかない箸づかいで何とかてんぷらうどんを平らげると、小さなショルダーバッグからタバコとガスライターを取り出し、あわただしく火をつけ、煙を深く吸い込むと、ゆっくりと吐き出した。実に堂に入った吸い方だ。1 年や 2 年の喫煙歴ではなさそうだ。

「タバコは長そうだね。いつごろから吸ってるの？」

「小学校 1 年くらいから」

彼女はこともなげに言ってのけた。僕の驚きを察したのか、ジョイは少し説明を加えてくれた。

「お父さんにタバコの火をつけてくれるように頼まれて、よく火をつけてあげているうちに自分でも吸うようになったの。7 歳くらいの時からかなあ。その頃は時々お父さんのタバコの箱から 1 本、2 本ってこそっと抜き取って吸ってただけよ」

なるほど、納得だ。僕はかつてスラムの路地裏でよく見かけた光景を思い出していた。というのもフィリピンの庶民、特に貧困層の人々の中では、子供たちがお父さんやお母さんのタバコにマッチで火をつけて、一ふかし二ふかしして完全に火がついてから手渡す習慣がある。僕はかねてから『これは子供の健康にとっても悪いし、児童喫煙のきっかけにもなりかねない悪しき習慣だな』とっていて、そんな場面に出会うと、眉をひそめて見ていたのだが、多くの子供たちは完全にタバコに火がついたらそれで役目は終わり、実際の喫煙に至ることはめったにない。しかし、ジョイの場合はそこでタバコの味を覚えてしまったようだ。

タバコの威力で少し気分が落ちついたのかジョイの表情が穏やかになったので、僕はおもむろにインタビューを始めた。

「迷惑」なメール（ジョイ第 2 回）

「去年、日本で仕事してたんだって？」

「ええ、そうよ」

彼女の表情がまたにわかに陰しくなった。

「何月から何月まで？」

「1 月から 7 月」

「日本のどこ？」

「東京」

聞いたことに対して最低限の答えしか返ってこない。身の上話はしたくないのだろうか？ ジョイの黒くて大きな目はキョロキョロと落ち着きなく動き、視点が定まらない。

とその時突然、彼女の携帯が鳴った。しかし出なかった。僕に遠慮したのかと思い、

「僕に遠慮しないで、電話に出てもいいんだよ」

と言うと、ジョイは

「遠慮してるわけじゃないのよ。うっとうしいのよねえ。この客。おととい知り合った現地駐在の日本人なんだけど、私に本気になっちゃったみたいで『君を今の汚れた仕事から救い出したい。僕の恋人になってほしい』だって。おとといからもう 40 ～ 50 回はメッセージを送りつけられてるわ。これ見て」

ジョイは受け取ったばかりのメッセージを見せてくれた。

「I love you Dakara Shigoto wa yameru OK? I miss you Kimini aitaina Sugu akono(僕の) Heyani kite Matteruyo Bokuga kimito Kimino family mo tasuketeageruyo ……」

ジョイに入れあげたお客のいささか勝手なメッセージがそこにあった。

「同じようなメッセージを何回も何回も送りつけられてもううんざりだわ」

と言いながら、ジョイは迷惑そうに端正な顔のみけんにしわを浮かべながらテキストを送り始めた。テキストとは、フィリピンの携帯電話間で、電話番号をメールアドレスのように使って行うメッセージのやり取りで、日本の携帯メールのようなものである。やはりすんなりとインタビューに入っていられない一因は仕事上のトラブルだったようだ。しつこい客、スケベな客、アブノーマルな性癖を持った客……稼ぎは大きくても仕事上のストレスやトラブルが多いのもまたフリーランス・ホステスの仕事の一面である。

「彼がうっとうしいって言うのは余計なお世話っていう感じかな? やっぱりお客さんと本気で付き合うのはいやなの?」

僕は彼女の心の中を読み解こうとしてみた。

「お客さんだっていい人もいるし、自分と相性の合う人なら彼氏にしてもいいと思うわ。でも『私を助けだす』なんて余計なお世話っていう感じね。だって今の私にとって一番大事なのは、家族を助けるためにお金を稼ぐことだし、このお客さんタイプじゃないの。わがままで。もう 30 歳なのにまだ心は子供のまみたいなの」

「じゃ、しかたないね」

「そうなのよ。だから彼があきらめてくれるようにメッセージを送るからちょっと待ってて」

彼女は手馴れた様子で目にもとまらぬ速さでメッセージを打って送信した。そしてまた、灰皿に置いたタバコをくわえ、煙を深く吸い込んで、静かに吐き出した。彼女の表情は陰しいままで、視線はキョロキョロと定まらず、きれいな瞳は『心ここにあらず』という彼女の内面をはっきりと映し出していた。

「何てテキストしたの?」

「『今、お客さんといっしょだから仕事の邪魔しないで』って」

少しでも相手の立場に立って考えることのできる客なら少しは彼女の仕事に気遣ってしばらくは何も言ってこなくなるはずだ。しかし、すっかり熱くなったその客は引き下がらなかった。

「それじゃ、話を始めようか?」

と何とか彼女の気持ちをインタビューに向けようと、穏やかな表情を作って僕が必死に努力している時、またしても『ピー、ピー』とテキスト・メッセージの着信音が鳴る。彼女はまた険しい顔をして、無言でテキストを送った。

「今度はどんなメッセージを送ったの?」

「『あなたはタイプじゃないの。迷惑だからもう私に付きまとわないで』って」

それは強烈だ。もうこれで僕にとっても迷惑なその客からのテキストが入ることはないだろう。実際、その後もう二度とその迷惑な客からテキストは来なかった。

仕事として甘いサービスをしたのを愛と勘違いしてすがりつくように張り付いてくる男性も悲しいが、それを振り払うホステスにも自分の暮らし・プライバシー・仕事を守るための苦労があるのがよくわかった。

さあ、問題がひとつ片付いて今度こそようやく落ち着いてインタビューだと思った矢先、ジョイから思いもよらぬ申し出があった。

「ねえ、今日はむしゃくしゃするの。インタビューに答える気分じゃないわ。お願い!! ビリヤードに付き合ってくれない?」

ジョイは苦悩にゆがんだ表情で、懇願するように言った。またしてもビリヤード?! 僕は覚えてたでやりたくてしょうがない時期だ。彼女にお相手してもらうのも悪くないが、インタビュー第一だ。何しろ拘束料を支払い、夕食までご馳走している。そしてようやく話が聞けると思ったら、今度はビリヤードに付き合つて来た。このジョイという娘はリクエストが多すぎやしないか? 僕はちょっとジリジリ・イライラしてきた。すぐにも彼女の身の上話を聞きたい。しかし、彼女の突き刺すようなまなざしに、Noとは言えなかった。それに、彼女の立場に立てば、タイプでない客からしつこく付きまとわれるのは大変な迷惑だし、大きなストレスの原因になるだろう。場合によってはストーカーまがいの客に命を奪われるような問題に発展するかもしれない。しかしそれをさばくのもホステスの仕事のうちなのだが、言うは易く、行うは難しだ。そんな時に気晴らしが必要なのもうなずける。僕ははやる気持ちを抑えて彼女のお願いを聞き入れることにした。

「わかった。今日はまずビリヤードしよう。でもその後、もし今日がダメならまた近いうちに君の話を聞かせてね。」

「ええ、わかったわ」

僕は彼女のうわの空の返事を信じて、今日はうさ晴らしに付き

合うしかなさそうだ。

ジョイの行きつけだというビリヤード店は、僕らが食事した日本レストランから歩いて5分ほどのアドリアディコ通りに面したビルの3階だ。

彼女はすばやくキューを選ぶと、ビリヤード台の上でキューを突き出す練習をしている。彼女の一連の動きは凜として美しかったが、いやな思いを振り払うかのように、そして何者かに取りつかれたかのように、自分をビリヤードへと駆り立てているようにも見えた。僕が彼女の動きに見入っていると、ジョイは不意に背中越しに、

「勝負しましょう。1ゲーム100ペソでどう?」

と言った。フォームを見ているだけで彼女が相当の経験者であることは素人目にもわかる。かなりの腕と見た。何ゲームやるのかわからないが、おそらく僕は1ゲームも取れないだろう。

普通、このエルミタで見知らぬ同士がビリヤードの手合わせする時、賭けゲームはさほど頻繁には行われない。せいぜい負けたほうがゲーム代を持つ、それがこの外国人観光客の多い界隈の暗黙のルールにもなっている。賭けるとしても、ゲーム代は1ゲーム分のゲーム代である25ペソが普通だ。真剣勝負というより遊びの延長というわけだ。

今日の僕らのゲームでは、ビリヤード台の時間借り料金やドリンク代はすべて当然僕持ちだ。その上さらに掛け金まで取られるのではどう考えても割に合わない。そもそも持ち合わせの少ない僕は、10ゲーム負けたらもう支払いができない状況だったので、自分が全部負けることを前提に1ゲーム25ペソで許してもらうよう頼み、了承してもらった。

さあ、ゲームだ。もちろん8ボール。彼女のダイナミックなフォームから勢いよく突き出された白い玉が3角形に並んだ15個の玉を勢いよくはじく。すさまじい迫力、そして殺気。彼女は何かに取り付かれたかのようにダイナミックなフォームからある時は力強く、ある時は繊細なタッチで次々と自分のボールを突く。一球入魂と言うのだろうか? ジョイの情念の乗り移ったボールは、気持ちいいくらいに次々とポケットに吸い込まれていく。自分の魂のすべてをボールに注ぎ込んでいるような彼女に、プレイ中はまったく話しかけることすらできなかった。僕はその美しさと迫力に圧倒されたまま、見入っているだけだった。

あっという間に予定の2時間が過ぎた。18ゲームやって全敗。悔しいとかそんなレベルではなかった。それは実力が伯仲している場合だ。この日の勝負では、ただただ恐れ入りましたとしか言

いようがない。僕はまず負け分の 450 ペソをジョイに支払った。この 450 ペソは彼女のプレイを見せてもらった鑑賞料だと思うことにした。ジョイは少し気が晴れたのかこの時初めて笑顔を浮かべた。

再会は無理？（ジョイ第3回）

「もう何年くらいビリヤードやってるの？」

「7 歳の時お父さんに誘われて始めてからかな」

ジョイは平然と答えた。

20 歳にして 13 年のキャリア。日本なら 7 歳でビリヤードのキューを手にする女の子などまずお目にかかることはないだろう。しかし、ビリヤードの世界チャンピオンを次々と輩出するこの国では、そんな子供はちっとも珍しくない。それだけビリヤードはこの国に広く浸透したスポーツなのだ。僕は日比の文化の違いを感じてただ苦笑いするしかなかった。そう言えば彼女がタバコを吸い始めたのも 7 歳だったっけ。ただ、こちらはスラムの児童喫煙を助長する深刻な問題であり、笑って済ますわけにはいかない。それはさておき本題のインタビューの約束だけでも取り付けておかなければ。

「本当は今日、君の話を聞きたかったんだけど、今度会う時は協力してくれるって約束してくれたよね。いつならいい？」

「明日は、日本からゲストが来るんで、あさってならどう？ あなた携帯あるならテキストするわ」

「あさっての何時？」

「ゲスト次第だからなんとも言えないけど、必ずテキストするわ」

と言うやいなや、彼女は自分の右手の薬指を僕の右手の薬指に絡めて指きりをしてきた。

僕が彼女に携帯電話番号を教えたと、彼女は無造作に自分の携帯電話にインプットした。

「じゃ、もっと稼がないといけないから LA に戻るわ」

「さよなら。連絡待ってるよ」

という僕の言葉に彼女は振り返りもせず、背中で聞きながら後手に手を振って小走りに LA に帰って行った。こんな風に『また今度ね』と言って女性たちと別れた時、再会できたためしがない。今回の取材の経験から、僕は十中八九もう二度と彼女から連絡をもらうことはないだろうとあきらめていた。それでも心のどこかで再会の日が来るのを期待せずにはいられなかった。このままインタビューができなかったら、連れ出し料としての 1,500 ペソの彼女への支払い、日本レストランでの支払い 700 ペソ、600 ペソのビリヤード場での支払い、賭けの負け分 450 ペソなど 3,000 ペソ以上

の出費もさることながら、それ以上に限られたフィリピン滞在時間の中で費やした時間のすべてが無駄になってしまうからだ。それだけに何とかインタビューに漕ぎつきたい。彼女の電話番号も聞いたが、彼女がインタビューに応じる気がなければしつこく追い回せば追い回すほど、彼女は遠ざかって行くだろう。彼女がその気になってくれるように僕は祈るばかりだった。

ただ、もしかしたら彼女を再度きちんとインタビューできるかもしれない展開になって、携帯電話をすぐに買い直しておいてよかったと思った。あとは指きりの約束を信じて連絡を待つだけだ。

★アクシデント～携帯電話が盗まれた

実は、旧友リセルのインタビューが終わった直後、僕は憩いの場となっていたもうひとつの援助交際カフェAに直行していた。リセルとの思わぬ再会が非常に切なく、気晴らしが必要だったのだ。夜7時過ぎに店に入った僕は、サンドイッチをほうばり、サンミゲールライトを何本か空けながら、この店のウェイトレスで夜11時に出勤予定のビリヤード友だちのメアリーを待った。メアリーは11時10分前にTシャツにジーンズといったいつもの姿で店に現れ、僕に気がつくニコッと笑って2階のスタッフルームに消えた。彼女はすぐに白いセーラー服のユニフォームに着替えて戻ってきた。

「やる？」

メアリーはキューを持って突くふりをしながら言った。

「シエームプレ イッツ マイ プレジャー(もちろん、喜んで)」

と僕は答えた。それから7時間、翌朝の6時くらいまで僕とメアリーは、お客のいない2階のビリヤード台でワーワーギャーギャーいいながら、お遊びビリヤードを楽しんだ。

本来なら彼女の勤務時間の7時まで付き合うところだが、朝の6時頃急な眠気に襲われ、その日は家に帰らせてもらうことにした。

帰りは、ジープで二乗り、勝手知ったる通勤(?)コースだ。それでも油断は禁物、ジープの中にもスリや強盗が頻繁に出没するからだ。

僕は最初に通りにかかった自宅方面行きのジープに乗った。乗客は誰もいない。『他に客がいないから万一眠っても大丈夫だな。これはいいや』と思って前方の運転手の隣に座った。しかし、ジープが少し走ったところで学生風のこざっぱりした身なりの若者が乗ってきた。そして彼は、誰も座っていない後部座席ではなく、わざわざ僕が座っている前部座席に『エクスキューズ』と言いながら乗り込んできた。

うさんくさい。普段なら、僕はそこで降りて自分が後部座席に移るなどの対策を取るのだが、その日は眠気に絶えられず、隣に座った不審な若者のことなどお構いなく、束の間の甘い眠りに落ちてしまった。ジープの終点で運転手に起こされた僕は、何気なくジッパー付きの右ポケットをまさぐったら、ジッパーが開いているではないか！ 眠気が一気に吹き飛んだ。ポケットに手を突っ込んでみたら、そこに入れていたはずの携帯電話がない。

「やられた！」

思わずつぶやいたがあとの祭りだった。フィリピンを行き来するようになって 16 年、初めて携帯電話を盗まれてしまった時のことだ。

フィリピンは所得水準に比べてものすごく携帯電話本体の料金が高い。新品だと最低でも 2700 ペソくらい。これはマニラ首都圏の法定最低賃金 275 ペソ(2006 年 6 月 3 日現在)のほぼ 10 日分だ。しかし実際には法定最低賃金以下の給料で働いている労働者もたくさんいる。さらに注目すべきは利用者のほとんどがプリペイドタイプを使っていることだ。防犯登録などないから携帯電話の譲渡も自由自在。だからこそ、全土で中古携帯電話のマーケットは大きく、携帯電話専門の窃盗団もいるほどだ。当然被害者も多い。実際、私のフィリピン在住の知人・友人でも、日本人・フィリピン人全部含めて携帯電話盗難の被害にあったことのないのは自分だけであり、僕はそれをひそかな自慢にしていたのだった。

悔しかった。しかし、それ以上にすでにインタビューし終わった相手の電話番号などのデータを失ったことの方が痛かった。先方から連絡を受けない限り、こちらからは二度と連絡が取れなくなってしまったからだ。しかし、事件から数日後、公証役場事務所と警察に出向いて事故報告書を書いてもらったおかげで 1 年前に買った携帯電話の購入額の 85%を取り戻すこともでき、自分自身にとっては安全・危機管理の基礎の再確認、また情報保存のあり方への警鐘という意味ではいい教訓になった。

それ以降、『携帯電話は常に盗まれる可能性のあるもの』という前提で、教えてもらった電話番号は、すぐにアドレスノートに転記し、同時にコンピューターにも入力保存するようになった

(ジョイ第 4 回) 欠落

15 歳でシングルマザーに (ジョイ第 5 回)

★ LA カフェまでの道のり

「現実を受け入れるしかないという気持ちだわ。大家族の生活費を稼ぐために必死で働いて、稼いだお金はほとんど全部お母さ

んに渡して、自分は飢え死にしない程度に食べて。そんな感じ」

今の暮らしぶりについて聞いた時のジョイの言葉だ。17歳の女の子にしてはシビア過ぎる。一家を一身に背負っている切迫感がびんびんと伝わってくる。淡々とした語りを聞きながら、彼女の背後に大勢の家族の影が見えるように気がした。僕が彼女の言葉の重みをかみ締めている間もジョイは語り続けた。

「日本から帰国する前に、もう二度と日本に戻って来れることはないって仲間と話をしてたんで、『フィリピンに帰ってから仕事をどうしようか?』っていうことばかり考えてたわ。高校中退の私に大家族を養っていくためには他の選択肢なんてないわ。それでフィリピンに帰国する前からダンサーに戻ろうと思ってたの。でも LA ならお客さんはいつも多いし、踊らなくてもすむし、仕事が楽だって聞いてたんで、すぐ LA でフリーのホステスになろうと思ってたの」

彼女は『ダンサーに戻る』と言った。と言うことは来日前からクラブなどで踊っては客を取っていたということだ。

「『ダンサーに戻ろうと思った』って言ったけど、日本に行く前からクラブとかでダンサーしてお客も取ってたの?」

「ええそうよ。14歳で高校を中退してまともな仕事を探してもすべて門前払い。できる仕事と言ったらサリサリストア(雑貨店)の店員とか、近所の食堂のウェイトレスくらい」

そう、学歴偏重社会のフィリピンでは、高校卒業でも安定した高収入の仕事につくのは難しい。まして高校中退となるとなおさらだ。ちなみにフィリピンの学校制度は、小学校が6年、その次が高校で4年、その後が大学で通常4年である。日本式に言えば6-4-4制である。義務教育は小学校の6年間だけだ。経済的理由などで学業を中断せずにストレートで進学できた場合、小学校1年で満年齢7歳になるのは日本と同じだが、中学校がないため、日本で言えば中学入学の年、すなわち満13歳になる年に高校生になり、高校卒業の年に16歳、大学入学の年に16歳になり、大学卒業年次に20歳になるということになる。ジョイの場合は14歳、高校2年の時に中退したというわけだ。

サリサリストアの店員や一般食堂のウェイトレスでは自分ひとり生きていくのがやっとなのはずだ。

「1ヶ月1,000ペソや1,500ペソの給料じゃ、いくら三食食事つきでも、家族を養っていくどころか、自分ひとりだって満足に生きていけないわ。家から少し離れたレストランに住み込みで働いた時は、朝の5時から夜の10時まで働きづめに働いて休みは月に二日だけよ。仕事が終わったら洗濯やら後片付けやらで自分の時間もまるでなし。家族とも疎遠になっちゃったわ」

「給料が安い割りにずいぶんとき使われてたんだね」

僕はジョイへの同情を禁じ得なかった。

「そうでしょ。半年間働いたけどバカバカしくなっちゃって、ダンサーになろうって思いついたの。外国人相手なら1日に何千ペソって稼げるって聞いてたし。それで家族を養っていくためにクラブMでダンサーとして働き始めたの。全裸で踊って1日で800ペソよ。それにお客からドリンクをもらえればバックが100ペソ。お客さんに連れ出されなくても1日1,000ペソ～1,500ペソは確実に稼げたわ」

食堂での給料1か月分が、ちょっとした決心次第で1日で稼げてしまう。でも地味な食堂のウェイトレスが、いきなり全裸で踊り、お客に連れ出されることに抵抗はなかったのだろうか？

「もちろん、始めはものすごく抵抗があったわ。薄暗いステージに上って何十人というスケベな酔っ払いたちの視線を一身に感じるだけで緊張したし、虫唾が走るような気がしたわ。でも私には家族を助けるための他の選択肢はなかったの。それからだんだん大勢の男たちの前で踊ることも裸になることにも何も感じなくなっていく。そして時々お客さんに連れ出されたわ。最初に私を連れ出したのが40代の韓国人。とてもやさしくてすぐ彼のことを好きになったの。彼が私の初めての男性よ。知り合ってすぐ彼のコンドミニウム(豪華マンション)で同棲し始めて、一ヵ月間そこに住んでたの。一時は将来結婚することも考えたわ。彼は毎日お店で稼ぐのと同じくらいのおこづかいをくれただけ、私を独占しようとしたり、無理に仕事をやめさせようとはしなかった。それでも私は彼が好きだったから、お店に出ても他のお客の連れ出し希望は全部断って自分なりに愛情表現したり、いろいろ努力もしたんだけど、彼にとってはただの遊びだったのね。すぐに飽きられてあっという間に捨てられちゃった。Mで働いてると彼とよく顔を合わせて気まずい思いをしたから、気分を変えようと思ってOっていう他のクラブに移ったの。Oでは4ヶ月踊ってたわ。Oでは全裸じゃなくてパンティとブラジャーはつけたままよ。踊るだけだと500ペソだけど、お客さんに連れ出される回数は増えたから結果的に稼ぎは増えたわ」

彼女は自分の来日前の過去について淡々と話してくれた。

「Oに勤め始めてからすぐに妊娠してることに気がついたの。もちろん同棲してた韓国人の子供よ。出産費用くらいは彼に面倒見てもらおうと思って連絡してみたけど、携帯電話はもう使われていないし、彼の住んでたコンドミニウムに行ってみたらもう他の外国人が住んでた。それでお腹が大きくなって、お店のマネージャーから『出産するまで仕事を休め』って言われるまで仕事を

続けたわ。そして翌年、2004 年の 5 月に出産したの」

クラブのダンサーと外国人客、束の間の恋の結末は聞くまでもなく明らかに思えたが、ジョイは元カレに対していささか未練があるように話した。

「それで 15 歳でシングルマザーよ。彼のことが好きだったから後悔はしてないけど、妊娠・出産で生活がますます苦しくなったわ」

出産のとき彼女は何を思ったのだろう？

「お父さん・お母さんを助けようと思って仕事を始めたのにかえって迷惑かけちゃって自分が情けなかったわ」

家族のための自己犠牲を当たり前のことだと考える彼女の言葉を聞きながら、そのけなげさに胸打たれるとともに、家計の担い手としての強い自負心を持って年齢には不相応な壮絶な人生経験を重ねてきたからこそちょっとやそっとでは揺るがない心の強さを身につけたのだと僕は思った。

いずれにせよ彼女の場合は売春婦が一時たまたまジャパユキとなり、また元のフィールドに戻ったのだった。

14 歳にして全裸で踊るダンサー、そして売春婦としてのデビュー、15 歳でシングルマザーに……淡々と語るジョイの過去は、僕にとってはかなり衝撃的なものだった。

今の暮らしぶりを聞いたつもりが彼女の話が脱線したおかげで、彼女が LA カフェのフリーのホステスになるまでの道のりはよくわかった。しかし、そんな彼女を両親はどう見ているのだろうか？ 当然仕事の中身のことは両親が知っているはずがないと僕は思っていた。

「君の仕事については、ご両親は知らないよね？」

僕の問いに対して彼女は一瞬苦笑いを浮かべてから答えた。

「初めてクラブ M でダンサーの仕事を始めた時は、『ジャパニーズ・カラオケで働いていて、ものすごいお金持ちのお客さんに気に入られていつもたくさんチップをくれるの』って嘘をついていたんだけど、韓国人のボーイフレンドとの間に子供ができて、おかしいじゃないかって言うことになって、厳しく問い詰められて本当のことを洗いざらい話しちゃったの。私が売春してるって初めて知った時、お母さんはヒステリックに泣きわめいて、お父さんからはひっぱたかれるし、それは大騒ぎだったわ。でも二人とも少し落ち着いたら、『家族のために、お前にこんなことまでさせてごめんね』って言うとお母さんもお父さんも理解してくれたわ。それで今は両親公認で仕事してるわ。兄弟たちは知らないけどね。ただ、お父さんとお母さんには『病気だけは気をつけて』って言

われてるわ」

娘の仕事をわかっていて送り出すジョイの両親のやるせなさ・つらさを考えると胸が詰まる思いだった。

ジョイのようなホステスがマニラだけでも数万人、フィリピン全土で数十万人はいるだろう。そのほとんどが、家計の担い手としての強い自負心と責任感から、心ならずも売春という仕事に従事しながら、仕事の中身については家族に苦しい嘘をつき、後ろめたさを胸に秘めながら働いている。しかしジョイの場合、少なくとも両親に対してだけは後ろめたさを感じることなく仕事に専念できていることに、僕は少しだけ気持ちが救われたような気がした。

稼いでも厳しい暮らし（ジョイ第6回）

★今の暮らし

「話がそれちゃったけど、さっきは君の今の暮らしぶりについて聞いたんだ。もう一度同じことを聞いてもいい？」

「あっ、私は見当違いのこと話しちゃったのね。今は、ともかく必死よ。風邪をひいたり、熱があって本当に我慢できない日以外は毎日 LA に通って、一生懸命働いてるわ。お客さんにありつけるのは2日に1人くらいかなあ。話し相手だけのお客から、オールナイトのお客さんまで時間帯もいろいろなら、お客さんの国籍もいろいろよ。私はフィーリングさえ合えばどこの国の人でもOKよ」

ホステスの中にはお客を国籍で選ぶ娘が多い中で、彼女はお客を国籍で選ばないと言い切った。客として男たちのお国柄について聞いてみた。

「私はお客さんを国籍で選ばないけど、アブノーマルな人だけはごめんだわ。このお店には本当にいろんな国から男の人たちが来るけど、日本人が一番親しみやすい気がするわ。フレンドリーでアブノーマルな人は少ないし、気前がいいし。国籍で選ばないとは言ったけど、態度が大きかったり、あそこが大きすぎたり、アクロバチックなスタイルを要求されたり…本当に国ごとにそれぞれね。他にも、ケチだったり、バイブレイターやいろんな道具を使ったり、しつこかったり、体臭が耐えられなかったり…私がケチと言うのはさんざん値切った挙句に、終わったあとにさらに値切ってくるっていう意味よ。でもお客がいない時は、そんなことは言ってもらえないから、どんな国の人でも相手をするけど」

彼女の話をしている時、かつて H なビデオなどで見たことのあるシーンの数々が次々とリアルに僕の頭の中をよぎっては消えた。

「なるほど、それで1ヶ月でいくらかの稼ぎになるの?」

「私の場合は一日 3,000 ペソのお客さんがほとんどね。6 時間で最後までサービスが希望のお客さんよ。一ヶ月でいくらになるなんて私はバカだから計算できないわ」

フィリピン人はそこそこの学歴のある人でも非常に計算が苦手だ。まして彼女は高校中退。僕は頭の中で簡単な計算をした。3,000 ペソ× 15 日=45,000 ペソ。改めて計算してみて彼女の稼ぎ振りに驚いた。

「一ヶ月で 45000 ペソも稼いでる計算になるよ。君は実は大金持ちじゃないか!」

半分ひやかして僕が伝えたと、彼女は自分自身の稼ぎに改めて驚いたようだった。

「えっ、本当? 私はそんなに稼いでるの? 自分の食費とメイクアップ代とか除いてお金は全部お母さんに渡しちゃうから、自分自身はいつだってせいぜい 1500 ペソくらいしか持ってないの。だからそんなに稼いでるなんてぜんぜん実感がないのよ」

僕はジョイの日常生活をもう少し掘り下げてみた。

「君は自分の生活費として1日いくらくらい使うの?」

ジョイは少し考えてから話した。

「自分のための手当ては1日 200 ペソって決めてるの。実際の支出は、ご飯が一日に大体一回で 20 ペソから 40 ペソくらい。あとは化粧品とか歯磨き粉・シャンプーとか身の回りのものばかり。洋服も以前買った物を着てるから今はほとんど買ってないわね。ただ化粧品代は意外とかかるのよねえ。これはケチると商売にかかわるから食費よりも大事だと思ってあまり節約しないようにしてるの」

さすがプロ。ジョイの言葉一つ一つにある意味僕は感心していた。彼女は1日一食しかしないにもかかわらず、売り上げに直結する化粧品代はケチらない。

彼女は家族にどれくらいの経済的支援をしているのだろうか?

「ジョイ、今住んでる家の家賃はいくら?」

「電気代、水道料金込みで月の家賃 3,000 ペソのアパートに仲間と3人でいっしょに住んでるわ。私の負担分は 1,000 ペソよ」

自分用の手当てと家賃、そして毎週家族を訪ねる交通費、すべて合わせても 8,000 ペソ。彼女は毎月 37,000 ペソもの大金を家に入れていることになる。これだけのお金を入れてもらえば、普通なら彼女の家族はそこそこの暮らしができるはずだ。僕は、ジョイだけに苦勞させて他の家族は遊びほうけているのではないかとも思った。しかし、実態はまったく違うようだった。

ジョイは、1988 年 5 月、果物販売業を営む両親の元に 13 人兄弟

の4番目の子供としてマニラの南西部に隣接するカビテ州に生まれた。両親は勤勉で夫婦仲もよかった。ジョイは両親が争っているのを一度も見たことがない。しかし、子だくさんのため、生活は困窮を極め、子供の頃から1日一食しかできない日がほとんどで、ジョイの幼い頃の記憶で真っ先に浮かんでくるのは、いつもおなかをすかせた幼い兄弟たちが少ない食べ物を取り合っている光景だ。食事もままならない家庭で子供の教育にまで手が回るはずがない。長男は何とか高校を卒業し、成績がよかったため、奨学金を得て4年生の大学を卒業して有名コンピューター専門学校の事務職員として就職、結婚して自分の家族を持って自立することもできたが、他の兄弟は高校卒業すらままならない。これは、学歴社会フィリピンで、ジョイ家族が大きなハンディキャップを負っていることを意味する。高校卒業や中退の学歴では、自分の家族を、いや自分自身を養っていけるだけの所得を得られる職業につくチャンスすらほとんどなくなってしまふのだ。

そんなわけで、ジョイの家族、すなわち両親と独立した長男を除く11人の兄弟、そしてジョイの子供という14人を支えられるのはジョイ一人なのである。それでもジョイが決して隣近所には言えない仕事で大家族を強力に支え始める前から、彼女の両親は地元の市場で果物を売って1日300ペソほど稼いで、何とか一家が飢え死にしない程度に家族を養ってきた。そしてジョイが大きく稼ぎ始めて家族は豊かになるはずだった。

そこに今年に入って突然降って沸いたのが、ショッピング・モール建設計画とそれに伴う建設予定地の不法占拠者の立ち退き問題である。

現在ジョイの家族は、フィリピン政府の土地に勝手にトタン屋根の家を建てて暮らしている。彼らはいわゆるスクワッターと呼ばれる土地の不法占拠居住者なのだ。当然、家賃・地代などは払っていない。しかし、ショッピング・モール計画が実現段階に入ろうとしている今、一家は最終的には有無を言わず立ち退きを迫られることになる。となればまったなしで新しい住居を探して引越ししなければならない。新たに家を借りるか、購入しなければならないのだ。これは貧しい大家族にとっては大きな経済問題なのである。

ジョイたちは現住所の近くに家と土地を購入し、住宅の隣接地にやや大きめのサリサリ（雑貨店）を作るために頑張っている。その目標達成のために家と土地で50万ペソ、サリサリ店作りの費用20万ペソの計70万ペソを1日でも早くためるのが家族上げての目標なのだ。そのほとんどすべてが17歳の娼婦ジョイの肩にのし

かかっているのである。

「私もこんな仕事やりたくてやってるわけじゃないのよ。目標の金額だけ貯金できたら、すぐにこの仕事をやめたいわ」

職業売春婦としてキャリアを重ねて、彼女はお金や性に対する感覚が麻痺しているかと思っていたが、決してそんなことはなかった。家族の明るい未来のために具体的な目標を持って計画的に頑張っているのだ。

ただ、キャッシュでなくローンなら今すぐにでも引っ越して新居に住めると思うのだが、なぜキャッシュにこだわるのかが不思議だった。

「すぐ新しい家に引っ越すなら、キャッシュで払わなくてもローンで支払うという手もあるよ。それならすぐ夢の新居に引っ越せるんじゃない?」

「お父さんが銀行に相談してみたんだけど、『スクワッターに住む果物の露天商じゃローンは利用できない』って言われたんだって。それでも一応っていうことでローンの場合の支払いを試算してもらったら、25年プランで毎月8300ペソの支払いになるんだって、これって50万ペソの家を買うのに250万ペソも払う計算でしょ。実際の値段の5倍も支払うなんてすごくもったいないと思わない? それでお父さんが毎月15,000ペソの支払いならどうなるかって聞いたら10年かかるって言われたんだって。これだって全部で180万ペソでしょ。それで絶対現金じゃなくちゃ損だっていうことになって、今は定期預金してお金を増やしながらか2年計画でマイホーム、マイ・ファミリー・ビジネスに向かってみんなで頑張ってるの。私は自分の最低限の生活費以外はみんなお母さんに渡してるからお金の細かいやりくりはぜんぜんわからないの」

なるほど、貧乏人ではローンも組めないというわけか。またローンが組めたとしても大手銀行の住宅ローン金利は12~18%。こうした異常に高い利息のため、支払いが長期にわたると元本の数倍に当たる金額の返済を続けなくてはならないことになる。25年ローンだと元本の5倍、これは何とありがたい(?)住宅ローン金利だ。僕は改めて日比の金融事情の違いにも驚かされた。それにしてもジョイは自分のことをバカだと謙遜していたが決してそんなことはない。数字にもなかなか強い。

「君は自分がバカだなんて言ってたけど、決してそんなことないと思うよ。数学は得意そうじゃない」

と僕は少し冷やかし気味に言った。

「そんなことないのよ。お父さん・お母さん・コンピューター学校に勤めているお兄さんが銀行や不動産屋さんに相談したり、いろいろ計算した結果を私が覚えているだけよ」

彼女はテレながら答えた。

僕はこの時、一家の期待を一身に背負って押しつぶされそうな重圧と厳しい現実の中で、文字通り家族のために体を張って生きるジョイがたまらなくいじらしく、また一段と美しく見えた。

日本での「楽な仕事」(ジョイ第7回)

★来日

そんな彼女にとって日本での仕事はどんな意味を持っていたのだろう。彼女は入管法の実施規定が厳しくなった 2005 年 3 月 15 日のわずか 2 ヶ月前の 2005 年 1 月から同年 7 月まで、たった一度だけながら 6 ヶ月間勤め上げている。

「おとし 2004 年、私が出産を終えて、確かその年の 6 月だったわ。16 歳の時、バクララン教会の礼拝からの帰りに、日本に女の子を送り込んでいるプロモーションのマネージャーから『日本で働いてみないかい?』ってスカウトされたの」

僕は、ジャパユキのスカウトを街頭でやっているという話は何度か聞いたことはあったが、事例にめぐり会ったのは初めてだった。

「以前パサイ市内のクラブで働いている時のお客さんにも日本人は多かったし、日本に行ってみたかったし、すぐに彼の事務所について行って話を聞いたわ。『売春しないで、お客さんの話し相手をするだけでそんないい給料がもらえるの?』って思ったわ。それでその日のうちに何が書いてあるのかよくわからない英文の書類にたくさんサインしてプロモーションに入ったの。私は英語もよくわからないのよ」

彼女もやはり 17 歳のカトリックの女の子、いやプロモーションにスカウトされた当時は 16 歳。いくらかなりの実戦経験があるとは言え、売春という仕事は彼女の心の大きな負担になっていたのだと僕はこの時改めて感じた。彼女は日本行きの経過についてさらに説明してくれた。

「それから先はトントン拍子よ。昼間はプロモーションでダンスの訓練を受け、夜は自分のペースでクラブ O に働きに出るかたわら、私の日本行きの偽書類はどんどん整って行って翌年 1 月にはあっさり日本に行けることになったの」

フィリピンでバリバリのホステスだった彼女の目に日本でのエンターテイナーの仕事はどんな風に映ったのだろうか。

「日本での仕事は、はっきり言ってきれいで楽な仕事だったわ。本当にお酒やカラオケの相手をするだけなんだもん。酔ったお客さんにちょっと体を触られたり、抱きしめられたりするくらいのことは、私にはぜんぜん苦にならなかったわ。それにお客さんに

ホテルに誘われることがあっても、それを強制されることもなかったからイヤって言えばそれですんだし」

フィリピン社会のいわば底辺の一角で過酷な仕事に慣れていたジョイには強制売春のない普通のフィリピン人エンターテイナーの仕事などそれは楽なものに違いなかった。

「それに同伴とか、指名も、私のことを気に入ってくれるお客さんがいたから全然問題なかったわ」

そりゃ、彼女くらいのルックスとセクシーなボディの持ち主なら、すぐに何人かのお客がつくのは当然だ。そんな意味で彼女もまた自分のお客たちに、束の間の癒しの時間を与えてきたはずだ。彼女に日本人のカレシがいるのは先ほどの話からわかっている。来日中のロマンスなのか？ それともマニラの職場で知り合ったのだろうか？

「日本人のカレシとは来日中に知り合ったの？ それともマニラで？」

「来日中にお店で知り合ったのよ。実は昨日も彼から電話がかかってきたばかりなのよ」

質問に対する彼女のリアクションはすごく早かった。彼の話をしたくて仕方がないようだった。

「どんな人？」

「20歳の学生よ。ほとんど毎日お店に来てくれたわ」

20歳の学生で、毎日のようにフィリピンパブに通えるなんてお金持ちの息子かなと始めは思った。しかし事實は僕の予想とはだいぶ違っていた。

「日本に行ったばかりの時に知り合ったんだけど、彼はアルバイトの先輩に連れられて初めてフィリピン人のお店に入ったらしいのよ。その時私が彼の隣に座ったの。ハンサムなんだけど、とってもシャイで、あまりにも話をしないんで私のことが嫌いなのかなと思ったくらい。でも次の日、電話がかかってきていきなり『マハル・キタ(愛してる)』って言われてびっくりしたけどうれしかったわ。それから毎日のようにお店に来てくれて言葉はなくても愛はどんどん深まっていく感じだったわ」

来日中の束の間のロマンスについて語るジョイはとても幸せそうだった。彼女はバッグからカードケースを取り出すとその中から彼の写真を取り出して見せてくれた。ハンサムというのはいささか首を傾げるものの、ガテン系でさわやかな笑顔のいかにも人のよさそうな若者だった。彼女は僕の彼氏に対する評価のコメントを待っている。

「やさしくて信頼できそうな人に見えるね」

と僕が言うと彼女は最高の笑顔を浮かべて

「そうなのよ。本当にやさしいの」

と言った。でも彼らはどれくらい心を通い合わせていたのだろうか？

「君は日本は初めてだったから、日本語はほとんどできなかったと思うんだけど、彼は英語かタガログ語はできたの？」

「いいえ、全然できないのよ。彼の知ってるタガログは後にも先にもマハル・キタだけ、あと英語はアイ・ラヴ・ユーとアイ・ドント・ノウだけ。それでお店に来ると必ずマハル・キタを歌ってくれるの」

彼女はこみ上げてくる笑いをこらえながら話した。『I Love you から始めよう』なんていうタイトルの歌があったが二人もまさにそんな感じなんだろうなと思った。言葉はなくてもフィーリングで分かり合える、それが『言葉はなくても愛が深まっていく』ということなのだろう。それで、彼はやはりお金持ちの子息だったのだろうか？

「日本のお店の料金はとっても高かっただろう？ だから毎日お店に来られる彼は、お金持ちの息子じゃなかったの？」

「私もそうかと思ったんだけど、お店に来るために毎日必死でアルバイトしてたんだって」

なるほど、そうだったのか？！

「それじゃ今、彼からお金の仕送りとかは？」

「まったくもらってないわ」

どうやら彼女にとっての彼は、スポンサーとしての彼ではなく、本当のカレシのようだ。

「昨日も彼から電話がかかってきたって言ったけど、まだ関係はちゃんと続いてるんだよね」

「えー、そうよ。私たち愛し合ってると思うわ」

僕はそれが彼女だけの思い込みでないことを祈りつつ、二人の愛がどれだけ本物か、あたりをつけてみた。

「何で君は、彼が本気で君を愛してると思うの？ だって言葉だけならマハル・キタ(愛してる)なんていくらでも言えるよね」

「言葉だけじゃないの。昨日の電話は彼が来月学校を休んでフィリピンに来るって言う電話だったの。彼、初めての海外旅行だからってすごく興奮してたわ。私もすごくうれしかったけど」

彼女の帰国後もほぼ 10 ヶ月間連絡を取り合って、わざわざ初めての海外旅行で彼女を追ってフィリピンに来るとなると彼の本気度も高いかもしれないが、この事実だけで二人の未来を楽観視することはできない。

「彼だったら結婚してもいいなあ」

彼女は遠く日本の彼氏を瞳の奥で見つめるように話した。この

時、僕は彼女が結婚願望を持っていることに気がついた。女であることを売る仕事の中で、そんな気持ちはとっくにどこかになくなってしまうっていると勝手に決め付けてしまっていたのだ。僕は彼女が普通の女性として当たり前前の幸せを目指す気持ちを失っていないことがうれしかった。と突然、立場が一転、彼女から相談を受けた。

「クーヤ、私はまだ彼には私の本当の姿、過去について何も話してないのよ。彼には今、私はジャパニーズ・カラオケで働いているってうそをついてるし、子供がいることも言っていないし、家族に会わせて私たちのひどい貧乏暮らしを見たらすぐに彼の熱も冷めちゃうんじゃないかと思うと怖いわ。クーヤ、どうしたらいいか教えて」

ジョイも彼氏も一番すっきりする解決は、ジョイが本当のことを洗いざらいぶちまけて彼氏がそれを受け入れてくれることだ。または、子供のことも仕事のことも、一生隠し通すという選択肢も頭をよぎった。でも、彼女の兄弟として彼に紹介することになる実の子供も気の毒だし、現実問題として彼女は、家族を養い、新居購入資金調達のために LA で働き続けなければならない。真実を隠し通すことなんてほとんど不可能だし、できたとしても本人の精神的負担の大きさは計り知れない。『自分ならすべてをぶちまけて彼氏の判断を仰ぐだろうなあ。それで彼が受け入れてくれないければしかたない』という、ごく当たり前前の結論に達した。そうこう僕が思い悩んでいる間に、彼女は自ら結論を出した。

夢と携帯電話の行方（ジョイ最終回）

「私も今まで数え切れないほど嘘をついてきたけど、彼をだますようなことはしたくないわ。全部を洗いざらい話して彼に判断してもらおうわ。クーヤどう思う」

「僕もそう思ってたんだ」

と答えながら、僕はジョイが心の底から汚れてはいないことがわかってとてもうれしかった。

そんな彼女にとって、おそらくたった一度になるであろうエンターテイナーとしての日本行きとは何だったのだろうか？

「ひとつの過去ね。でも彼との出会いもあったし、もしかしたら新しい未来の始まりかもしれないわ。是非そうなってほしいわ」

日本で本当の愛を見つけた彼女にとってたった一度の日本行きの評価はまだ定まっていないようだ。

★夢

「本当はもう仕事に疲れちゃって、日本人の彼と結婚して自分

の家族を持ちたいわ」

彼女の夢を聞いた時の回答は意外だった。大家族を助けるため、住居を購入し、ファミリービジネスを立ち上げることだと答えると思っていたからだ。しかし、本音としては2年もこういう仕事をやっていて、いい加減うんざりして自分自身の幸せを追いかけなくなる気持ちもよくわかる。

それでも、彼女は自分自身の夢は二の次で、どこまでも家族の幸せを優先する女性だった。

「でもね。実際には家族が第一よ。私の気持ちのままに生きるわけにはいかないわ。だから家の購入資金を貯めて、ファミリービジネスのサリサリを立ち上げるまでは今の仕事を続けるしかないわね。それから自分自身の幸せを追いかけるわ」

窓の外に目をやると、もうすっかり日が落ちている。時計を見るまでもなく午後6時を過ぎていることだけは間違いない。一年を通じてマニラの日没はほぼ午後6時だからだ。彼女を夢に近づけるために早く仕事場に行かせてあげなくてはならない。

「今日はどうもありがとう。インタビューはもう終わりだよ。君の夢が早くかなうといいね」

と言いながら、僕は彼女の拘束料1,500ペソを彼女に差し出した。しかし彼女の反応は意外だった。

「クーヤ、受け取れないわ。本当ならおととい私がちゃんと話しをしてれば終わりのはずだったんだから。ビリヤードにも付き合ってもらってありがとう。それにクーヤは友だちだから」

と言って受け取りを固辞した。彼女は意外に義理堅く、律儀なんだなと僕は改めて彼女を見直した。

「じゃ、クーヤ、ありがとう。私、仕事に行くわね」

と言い残すと彼女はさっと立ち上がり、足早に安っぽいネオンが通りの左右に灯るエルミタの夜に吸い込まれた行った。ただ、今日は途中何度か立ち止まり、振り返って微笑みながら手を振ってきた。僕も笑顔で彼女に手を振って答えた。

それ以来、取材旅行の最中にも、すべてが終わって帰国する際にも、何度となく一言お別れの言葉を言いたいと思って、彼女の携帯を鳴らしてみたが、もうその番号は使われていないようだった。LAカフェにも何度か足を運んでみたが彼女の姿を見つけることはできなかった。

携帯電話泥棒の多いこの国のこと、多分携帯電話をなくしたか、盗まれたか、あるいは当面のお金に困って売ったか質入れしたか、そんなところだろう。あるいは病気にでもなってしまったのだろうか？ その時、『携帯がなくなったら一巻の終わり』という彼女の言葉が頭を過ぎった。

日本人のカレシとの関係が続けることも微妙な状況だ。彼氏はジョイの住所をしっかりと把握しているだろうか？ 先ほどのジョイの口ぶりからすると、多分ジョイは彼氏にフィリピンでの住所を教えていないだろう。だとすると、彼からジョイへの連絡手段は携帯電話だけだ。一方、アドレス帳など使っていないジョイは彼の電話番号を覚えているだろうか？ こちらも非常に心もとない。ジョイは自分から彼氏に電話したことはほとんどないと言っていた。となると、すべての情報の入った携帯電話の紛失や盗難が二人の終わりになる可能性が非常に高い。もしかして彼女が携帯を買い換えて、番号も変えてそのことを彼にも伝えていけば全然問題ないのだが……いや、彼女の電話は真新しかった。買い替えというのは非常に考えにくい。やはり紛失か盗難ではないか？

しかし、二人にとっては余計なお世話かもしれないが、よくよく思えば、フィリピンのことなど何も知らない 20 歳の大学生と大家族を養っていくことなど多くの問題を抱えた彼女の恋にハッピーエンドを期待するのはむずかしい気もした。そう考えると、いつかは訪れる二人の愛の終わりが少々早めにやってきただけだと言えなくもない。

ともかくジョイとカレシをつなぐ唯一の手段であるジョイの携帯電話がなくなったようだ。おそらくジョイはカレシの電話番号を覚えていないし、アドレス帳などにも控えていない。またしても電話が原因でひとつの国際恋愛が壊れてしまうかもしれないと思うと何とも切なかった。

そう言えば 17 年前、僕とリリーの関係が終わったのも電話で連絡が取れなかったのが直接の原因だった。僕が当時、タガログ語はおろか英語すらできなくて彼女の家電話しても彼女にたどり着けず、初めてのフィリピーナとの愛があっけなく終わったのと、ジョイとカレシの愛の顛末に僕は何か重なり合うものを感じるのだった。

取材旅行も終わりに近づいたある日、僕は彼女の姿を求めて曇り空の中、LA カフェに足を運んだ。彼女の姿は見当たらなかったし、何の消息情報もつかめなかった。僕は、窓際の席で降り始めたスクロールをガラス越しに見つめながら、彼女が愛する家族に家とスモールビジネスの機会を与えて 1 日も早くこの仕事から引退し、普通の女の子として幸せな人生を歩んでほしいとただ願うばかりだった。